
魔法先生と王噓憑き

さんぱい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生と王嘘憑き

【Zコード】

Z4568T

【作者名】

さんぱい

【あらすじ】

神様のミスで殺された主人公が能力をもつてネギまの世界で頑張る話。ハーレムを作りたいんだが・・・これは・・・出来るのか?

田が覚めると田の前に神様がいた

(中略)

とまあ大抵の転生ものの小説のように神様のミスで死んだ俺を好きな世界で能力をつけて生き返させてくれるらしい。やつたー。

現世では大した特長もなく平々凡々な俺だったが好きな世界に行つてさらに能力まであるなんて素晴らしいミスつて殺してくれてありがとう！

とまあおふざけはこのぐらにして、能力とやらの制限を訊いて。

特に制限はない、が、数は3つまでとさせでもらつ

なるほど、なんでもいいけど3つまでなのね、十分十分。能力つてのはアレだよな、身体能力とかじゃなくて、漫画とかの妄想みたいなアレってことでいいんだよな？

どうのものでも問題ない

なるほど、なんか投げやつた気もするけどまあなんでもいいならなんでもいいか。

ていうかさつきからその喋り方つまむカツクんだが。普通に括弧付けてしゃべれ。

まあいいや、能力か。漫画みたいな能力にするのは当然として、やっぱりよく知つてる好きな漫画の能力がいいよな。ということで好きな漫画の中でもバトルとか能力とかがあつたものを頭に挙げる。ワンピース、ナルト、禁書目録、f a t e、とまあ代表的なのがいくつか浮かぶが、やっぱり俺が一番好きな漫画といつことでめだかボツクスを選ぼう。

そしてそのなかでも俺の好きなキャラノ・1とノ・2、球磨川禊と都城王土の能力。アレが欲しい。

もちろん「脚本作り」とか「理不尽な重税」の方じやないぞ。理不尽な重税ならまだ使い道はあるが脚本作りにいたつては意味不明だ。貰う能力のうち2つは「大嘘憑き」と「言葉の重み」だ。決定。そして最後の能力もめだかボツクスから選ぼう。まあ無難に主人公の「完成」でいいか、便利そuddash;だ。

というわけで「大嘘憑き」と「言葉の重み」と「完成」で頼む。

了解した。次は行く世界を選ぶがいい

ああ、それも考えたんだよ。色々と。

最初に思い浮かべたのはやっぱり一番好きなめだかボツクスだが、めだかの能力貰つてめだかの世界に行くのもなあ、つてことでパス。ワンピとかナルトとかは女の子が可愛くない。パス。

俺の能力以上にチートなやつがいそうな世界、禁書目録とか（一方さんに言葉の重みつて効くのか？）f a t eとか（これまた英雄王に言葉の重みとか効かなそう）もパス。

とすると俺の能力がそれなりに活かせそうな世界で女の子が可愛い世界。

・・・ネギまじゃね？

あの世界のネギ君のクラスに居る女の子つて大体の需要を満たしてるよね。あのクラスがあれば95%の男は満足できると思うんだ。口リ、ツンデレ、お嬢様、お姉さま、オタク少女、口ボ、等々。

しかもなんか敵があんま強そうじゃないしな。言葉の重み使ってひれ伏せって言えば皆ひれ伏しそう。一番の強敵そうなエヴァちゃんも大嘘憑きで登校地獄をなかつた事にすれば嫌われるつてことはないでしょ。

決まりだな。

というわけでネギまの世界でお願いします。

了解した、達者で暮らせ

おう、神様もありがとなー。最後まで喋り方はウザかつたが感謝はしてるぞー。

とまあそんな感じで田の前のびっくりマンに出てきた神様みたいなやつがポポイと杖を振つて出てきた扉にレツツゴー。よーし、ハーレムつくるぞー。

そして俺がふと田を覚ますと、周りは森だった。

えー、森って・・・ここには麻帆良じや・・・ないよなあ？

そういうえば原作のいつのどこかで指定してねえ！普通に原作開始と同時だと思ってたけどそしたらどうやって介入するんだよ！

いやそれだけならまだいい、もしかしたら大戦の頃かも・・・ナギさんとかアルさんとかあのへんはよく知らんが関わるつもりはねーぞ。英雄はさすがにこわい。でももしそのへんの時代だったらどうしよう・・・。

あれ、そういうばー一次創作だとよく原作開始と同時、大戦時、以外にももう一つ、600年前のエヴァちゃんが吸血鬼になった頃、つてのもあったよな？おいおい、エヴァちゃんと遊べるのはいいけど

能力の中に不老不死にしてなんてものを入れてないぞ。出会つて數十年で俺だけ死んじゃうじゃねえかよ。
つて考えてても仕方ないな。とりあえづ今がいつでどこのかを調べないと。

「では、そろそろ参りましょ」

考え事をしているとふと自分の右後から声をかけられた。
振り向くとそこには角の生えたお化けみたいなやつが膝をついていた。

「うわ！誰だお前！」

さすがネギま、なんでもありか。

「・・・何を言つておられるのですか？」

「あ、いや、すまない。ちょっと混乱してしまつて。悪いがここがどこで俺たちが何をしているのか教えてくれませんか？」

明らかに田下の人（？）のようなので強気に命令しようかと思つたが見た目が明らかに化物でこわいので後半弱気になつてしまつた。

「はあ。私達はこれから非常に屈辱なことではありますが人間に遭われこれより麓の村へ強襲をするとこりであります」

「なんのために？」

「かの英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドを抹殺するためにです」

「・・・は？」

言われて自分の体を確認・・・顔は見えないが手を見るだけでわかる。おっさんじやん。

「悪いんだが、私の名前を言つても『うるさい』かな?」

無駄だと思いつつも最後の悪あがき。

「はい、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン様でございま
す」

丁寧に応えてくれるすぐ脇の人の言葉を聞いて、ああ、600年前
でも老化をなかつた事にすればずっとエヴァちゃんとキャツキヤウ
フフしながら一人で過ごせるじやん・・・と現実逃避していた。

1話（後書き）

いつかめだかボックスのクロスオーバーを書こうと思つていたんですが、能力だけになつてしましました。展開はあまり原作通りにやるつもりはないです。ご了承ください。

前回のあらすじ

転生かと思つたら憑依だった。しかも悪魔のおっさん!。

「どうせいりなせねましたー?」

あ、いかんいかん。つい混乱のあまり叫んでしまつた。側の人があん引きしてる。

「それで、今からどうするのかな？」

「はい、悪魔召喚の魔法を使い下級悪魔を大量に呼び出し下の村を襲い、ネギ・スプリングフィールドは抹殺、それ以外の人間は石化魔法を使い行動不能にします」

あ。ひらめいたよ俺。

まだ襲う前つてことはまだ敵じゃないつてことだよな？今のうちにネギ君と仲良くなつておけばうまくすれば一緒に麻帆良に行けるんじゃね？仮契約とかしとけば引き離されることはないだろ！まあ男とキスするのは正直アレだが・・・ショタなら許す！

それじゃあそのためには自分が無害であることを示さないとなりえず目の前のいかにも悪魔然としたこいつを何とかしよう。

「じゃあこいつから先は俺一人でやるからかえつていいいよ」

「そういうわけにはまいりません。今の私たちはメガロメセンブリア元老院との契約によって縛られています。任を達成するまでは帰りたくとも帰れません」

「あ、そうなの？それじゃあ」

うーん、「じつこう」とても使えるのかな、あれって。まあこーや、とつあえずやつてみよ。

「『その契約とやらをなかつた事にする』」

は？・・・な！？戒めかとれた！？」「

ついでに自分にもイツツオールファイクション。なんか自由になつた
氣がする・・・かも。よくわからん。

隣でなんか喚いてるやつがいたから。おい、帰れるよ! ってんだから帰れよ。

「おい」

「なんでしょうヘルマン卿？共に人間界での自由を謳歌しようではありませんか！」

「『アーティスト』」

はーい。こういう時に便利なのが言葉の重みですねー。

· · · · ? · · · · ! · · · · · · · · ! ! ! ? ?

なんか口パクしますが言葉は出ないようです。金魚みたい。あれ、でもこいつってどう帰したらいいんだろう?帰つてつていつ

ても無理そつだし……ネギ君殺されたら女子中学生と出会えないし……。

あんまり気は進まないけどこいつ敵だしいよね？悪魔の中でもヘルマンとかなら名前あるけどこいつはただのモブみたいだし、ついにヘルマン俺だし。

というわけで

「『田の前の』こいつをなかつた事にする」

・・・おお。一瞬で消えたよ。ちょっとこれはひどすぎるな。球磨川さんが下手したら地球ごとなかつた事にしちゃうとか言ってたのは間違いじゃねえな。出来ちゃうよ、多分。

まあでも邪魔者もいなくなつたことだしネギ君のとこにレッジゴー。

村に着きました。早速近くの人と話しかけてみます。

「すいませーん」

「おや、見ない方ですね。旅の人ですか？」

「はい、そんなんところです。ところで、この村にネギ・スプリングフィールドという人がいると聞いたんですが会わせてくれませんか？」

？」

田の前の人との気配が変わる。あれ、なんか俺やつちつた？

「あんた、ネギ君に何の用だい？」

「え、いやただ仲良くなりたいと思いまして……」

「へえ、英雄の息子と仲良くなれ、ね」

ああなるほどー確かに見たこともないおつさん&英雄の息子に会いたいなんて言つたら怪しまれるよね！・・・どうしよう。

「あ、ドイルさん！」にちわー。あれ、その隣りの方はどうなたですか？」

「ネ、ネギ君ー？」にちわかや『ちょっと黙つててください』・・・！？」

ネギ君の方からじつちの方に来てくれたぞー、ラッキー。うるさい村人Aさんには黙つてもらつて、ネギ君の方に近づく。

「やあネギ君こりんにちわ。私の名前は・・・」

俺の名前なんだ？一応一人称はおつさんである外見を考えて私にしておいたけど・・・名前・・・前世の名前はあんま使いたくないし、ていうか日本名とかこの外見に全然合わないだろうし。ヘルマントて名乗るのもなー、悪魔つて知つてるやつは知つてそ'うだし。

「まあ名前なんてどうでもいいね。私はネギ君と仲良くなりたいんだ。一緒に遊ぼう？」

「え、でも・・・あの、ドイルさんが・・・」

あれー？ちょっと怯えられちやつてるぞー。田の前でドイルさんとやらが必死な表情で口パクしてくるからかな？よしわかつた。

『ドイルさんはいなかつたことに』

「えー？ドイルさん！？」

「ほり、これでもう怖くなこよ。わあ、一緒に遊ぼー。」

「こりやかスマイルを浮かべながらネギ君の肩にポンと手を乗せる。

「やだつ・・・離してつー離してへだせー。ドイルさん・・・そんな、誰か、助けて・・・」

「ネギ君。どうしてそんなに震えているんだい？私は君の友達さ。なにか悩みがあるなら相談にのるよ」

「あなた、一体何をしたんですか・・・。ドイルさん、ドイルさんをどうしたんですかー。」

そういえば今思い出したんだが悪魔襲撃の日つてナギさんにネギ君助けられてなかつたつけ。やばい、それまでに仲良くなつとかないと俺を有害な悪魔と勘違いしたナギさんにぶち殺されてしまつ。でも俺の手から必死に逃げようともがいてるネギ君を見ると仲良くなれる気がしない。何でかわからんが嫌われてるっぽいし。どうしようかなあ・・・。

あ、またしてもひらめいた。ネギ君が俺を怪しいとかこわいとか思うならそう思つていることをなかつた事にすればいいんじゃね？原作の球磨川君が相手の心に對してオールファイクションを使つてることはなかつたと思うけど、一応神様からもうつた能力だしそれくらいできてもいいよね？

てこりか球磨川君の場合怪しいとか怖いとか思わせてなんぼなんだろ？、マイナスだから。とこりわけで

『ネギ君が俺に對して抱くマイナスな感情をすべてなかつた事に』

・・・できた？できたかな？

「ネギ君、調子はどうだい？」

恐る恐る声をかけてみる。暴れてるのは収まつたけど、どうだ？。

「なにがですか？そんなことよりおじさん一向いいにきれいな川があるんですよ！一緒にあそびましょー！」

大・成・功！笑顔満点になつたネギ君に手を引かれて行つた川で2、3時間遊ぶはめになりました。まあ自分で誘つたんだからしょうがないけどこの年になつて川遊びは辛いぜ・・・。

ネギ君と川遊びしてゐる最中に俺のことは村の皆には内緒つてことを言つておいた。

どうせもうすぐ魔法学校に入るんだらしその時にまた合流して仮契約なり何なりすればいいやと思つたからだ。

というわけで今から俺はしばらく暇になる。どうか魔法学校の近くの村でしばらく静かに暮らそうと思つてゐるんだが、とりあえず覚えなきやいけないことは若返りの魔法だな。このままの見た目じゃハーレムなんて夢のまた夢だ。

こっちにはめだかちゃんの異常性である『完成』があるから若返りの魔法の才能がちょっとでもある人に少し教わるだけで大丈夫なはずなんだが、そんな魔法を研究してゐるやつつてゐるのかな？

そんなことを考えながら森の中をのんびり歩いてたからだろうか、そいつが来ていたことに俺は気づけなかつた。

「おいてめえ、何者だ」

だから突然そう声をかけられて少し驚いてしまつた。まさかこんな森の中を歩いている奴なんているとは思わなかつたからな。んでもつてそいつの顔を見てその数倍は驚いた。だがまあ考えてみりやこいつが此処に来るのは当然だ。メガロメセンブリア元老院が召喚した悪魔による襲撃は本来今日行われていたはずなんだから。そしてそこからネギ君を助けに来るためにはそいつが来るのは原作通りだ。何もおかしくはない。

問題があるとすれば、その襲撃が俺の一言で中止になつてしまつたことだ。そして本来なら俺は村を襲撃するはずの存在だということだ。

さてここで問題です。今日襲撃される村がまだ無事で、未来の襲撃

犯がその村の辺りをうろついてたらそれを見た人はどう思つでしょう？

「はつ、もしかしたら間に合わねえかと思つたが、まだ大丈夫だつたようだな。よつ悪魔野郎、あの村は襲わせねえぞ。ひとつ消えやがれ」

まあ今から襲撃するんだと想いますよ。

こっちに杖を向けながら睨みつけてくる「サウザンド・マスター」ナギ・スプリングフィールド。ネギ君のお父さん。伝説の英雄。そしてなにより、才能の塊。

こいつは好都合だ。あんだけ天才天才言われてたんだ。若返りの魔法の才能ぐらいいあってもおかしくねえだろ。

ちょひつと戦つて、魔法の才能をゲットできたら帰ろつ。

「いえいえ、私も帰りたいのはやまやまなんですがね。そこの村にいる子どもを1匹殺さないと帰れないのですよ。まあその程度ならすぐ済むでしようから待つていてください」

挑発しておぐ。けじ前の世界でも口喧嘩なんてしたことがないからどう挑発すればいいかわからんな。

「てめえ！だつたら俺が力づくだけしてやるよー。」

あれ？思ひの外釣れたぞ。楽でいいや。

「『千の雷』……。」

おい、それしょっぱなからぶつけよつた魔法だつたか？結構強めの魔法じゃなかつたか？

まあ雷なんてもん避けれるわけもないの直撃。けどその瞬間にイツツオールファイクション。

「なつー？無傷だと・・・てめえ、何しやがつた！」

攻撃を食らつたことをなかつた事にしただけですよ。まあそんなことをわざわざ教えてやるつもりはないけどな。・・・教えたところで特に対処できるとも思えないが。

ということですんなこんなで數十分たちました。無抵抗の私相手に何度も何度も高威力呪文をうちこんで、たまに肉弾戦でぶん殴つてきたりして、まあそれはそれは有意義な時間を過ごせました。『完成』的な意味で。ていうかこいつ肉弾戦の才能もあるんだな。そりやそりや。

まあもう大体魔法の才能はもらえたので終わりにしよう。

「千の雷ー！」

どかーん。

「ぐあー、やられたーー！」 いりのせんです！もうしないからゆるしてー

切りの良いタイミングでまたも最強呪文を打ち込んでくれたのでギブアップしておぐ。勿論身体は無傷ですよ、なかつた事にしないと痛いです。

「あー？ふざけてんのかてめえー傷ひとつねえくせによー！」

「こやこや、私のこの回復魔法にも限度がありまして。次食ひつい
そろそろヤバいんですよ」

嘘だけだ。

「じゃあこれでてめえをぶつ倒せるつてわけだーへりこやがれ、千
の雷ー！」

おい、攻撃してくんなんよ。そろそろめんどくさいになつてきたのやつ
つちも攻撃に移ろう。せーの、

「『平伏せ』」

「がつーつなんだ、これはー？」

ひやつせー、やつぱ都城先輩の言葉の重みつて嘗つたらこねだよな。
あのサウザン・マスターこれで通じるなんて、やつぱつ原作より
強化されてんのか？

とことことで俺に對してすげー勢いで跪いたナギさんの上に座つて
少し考える。

こいつがここにこなかつたことにしててもいいけど、でもそれだとま
た原作の流れが変わっちゃうよな。それともこいつがここの俺と会
つた時点でもうそろこいつの気にしなくていいこのか？ こいつかこい
つちゃんとネギ君に杖渡すんだろうな。

「じややがれええええー！ てめえええー！」

なんか下で叫び声がするが無視。原作だと善哉君でも跳ね返せてた
のにナギさんが無理つてことはもう間違い無く強化されてるんだろう
うな。あー早く麻帆良いきてー。

「あ、思いついた
「なにいつてんだお前？」

あ、こいつに声に出してしまった。そのまま叫んでたくな、こ
つちがちょっと独り言言つただけで突つ込みいれてくるとがマジ意
地が悪いなこいつ。

まあそんなことより、こいつ処分して杖奪つて、あとでネギ君に杖
を渡すなり、それがまずそなうなら適当に売るなりすればいいんじや
ね？

こいつが此処に来たことを知ってる人はいるかも知れないけど俺と
会つたことを知ってる人はいないだろうし。まさか英雄がタイマン
で負けて殺されるとか思わないだろうし。そもそも世間的にはナギ
つて既に死んでるはずだからあまり公には出来ないだろうし。
あれ？本当にこいつ殺しても何の問題もないじゃん。

そつと決まれば善は急げだ。早速『大嘘憑き』で……いや、やめ
たほうがいいな。

今まで『いなかつたこと』にしてきた奴らは皆モブだったからビリ
でもいいけどこいつはナギだ、英雄だ、メインキャラだ。『いなか
つたこと』の範囲がどれくらいかまだはつきりとはわからないが、
もしかするとなんかまざい影響があるかもしれない。『大嘘憑き』
を使うのはやめておこう。

でもただ死ぬだけだつたら普通に交通事故とかで死ぬこともあるし
何の問題もないよな？

「それじゃあナギさん
「何だよ。さつさと降りろ」

言われたとおり降りてあげる。ついでに上下座状態を維持させてい
る『言葉の重み』も解除しておこう。けど立つ気配が全然ないな。
・・こいつもしかしてどんなに動いても起き上がりがないからつて逃

げるの諦めてないか？まあ楽でいいけど。

跪いてるナギさんの田線に合わせてしゃがみこんで、セーの、

「『白唐じり』」

物言わぬ肉片となつたナギさんはきちんと埋めて供養してあげましたよ？流石に野ざらしさは可哀想なんで。

さて、それじゃちょっと移動して魔法学校付近の村にでも住まわせてもらつか。それと並行して若返りの魔法の練習もしないとな。幸先良く魔法発動体も、まああまり人前じゃ使わないほうがいいかもだけど、ゲットしたし、がんばるぞー。

この世界にきてから数ヶ月がたつた。俺は今魔法学校の近くの村で暮らしている。

報告すべきこととしては、まず若返りの魔法についてだ。

さすがサウザンドマスターの魔法の才能、若返りの魔法もすぐに実用可能レベルになった。

効果はきつかり24時間、それより早く解除もできないし、延長するためには重ね掛けもできない。まあ解けた直後にまたかけ直すことはできるけどな。

本来であれば1・2時間ぐらいしか効果のない魔法のはずなんだが、才能があるからって言うのと元の体が悪魔だから魔力の質も量も人間とは違うという理由で24時間という桁違いな数字になっているのだと思う。あくまで予想だ。

それと何故か若返ったときの姿がまんま球磨川さんだつた。

・・・いや、おかしいだろ・・・。

次はこの魔法発動体についてだ。最初はネギ君にあげようと思つてたんだけど、この杖つて非常に魔法発動体として優秀なんだよな。もしかしたらあの若返りの魔法もこれのおかげなんじゃないかってぐらい。さすがサウザンドマスターから譲り受けた杖だ。

ということなのでもう少し持つていてることにする。それに下手に杖あげちゃうとネギ君度がすぎるほどのファザコンになっちゃうしね。あとこの杖はやっぱ人前で使わないほうがいいみたいだ。普段魔法を使うときは人目のない場所を選んでやつてているがそれでもたまに見つかる。殆どの人はそのまま素通りしてくれるんだけど、1割ぐらいの人にはこの杖がナギさんのものだと気づかれてしまった。まあそいつらには『いなかつたこと』になつてもらつたけど。

ネギ君はやっぱ子供だから持つても不審がられなかつたんだろ

うなー。俺が持つてたら明らかに怪しいよなー。

3つ目は、目に魔力を込めてよく見ればその人のいいところが見えるようになった。

もつとも、いいところ=その人から『完成』を使ってゲット出来る才能、のことなんだけどね。

そのおかげで村に来た大道芸人からジャグリングの才能がもらえた。・・・役に立つのか、これ？

そして最後に、なんと明日、ネギ君が魔法学校に転入します！

ネギ君と魔法学校で合流するために数ヶ月世話になった村から出る。もう一度と来る予定もないでの、適当な民家数軒から金目の物を根こそぎ奪い取つた後その記憶を『なかつたこと』にしておく。今までは村の飲み屋でバイトしてたけどもうできないからね。資金調達は大切だ。

夜のうちに魔法学校近くまで移動、そのまま待機。
時刻が午前1時になつた。そしてここで若返りの魔法をかけておく。
これで24時間の間俺は見た目も身体も球磨川さんだ。

今後もだいたい午前1時くらいに若返りの魔法をかけ続けて、老人モードが誰にも見られないように努めよう。
んじや明日も早いし、おやすみー。

おはよー!」ぞいます、朝になりました。

そろそろネギ君が来るそつなので・・・お、きたきた。何でかわからんが一人で歩いてる、こりや好都合だ。

「やあネギ君、久しぶりだね」

「え？ どなたですか？」

忘れられてた……。たしかに一日しか会ってなかつたけど剣とシヨック……。

「いや、僕だよ、僕。あの、えつと……」

よく考えたら俺ネギ君に名前名乗つてない。

ちなみに一人称は見た目に合わせている。老人の時には私、球磨川さんの時には僕、心のなかでは俺。球磨川さんの時には俺つていつてもいいのかかもしれないけど、めだかボックスファンとしてじつても許せない。なので僕で通す。

「まじ、ちょっと前に川で遊んであげた……」

「おじさんのことですか？ いや、おじさんはもっとおじさんでした

「ふ

あ、なるほど、見た目が違うからね。でも、とするけどじつって説明したら……。

ああもう、めんどくさい……

「『僕を疑つ心をなかつた事に』」

これでいいよもつ。

「とにかく、僕はあの時のおじさんなんだ。魔法学校に入学するとまた会いに来るって言つたろ？ 約束を守りに来たんだよ」「えーほんとにおじさんなんですか！ わーいーお久しぶりですー！」

急に態度を変えて俺の胸に飛び込んでくるネギ君。もしこれを見る人がいたら明らかに不自然だが幸いにして今はだれもいない。

「ああネギ君。僕は今おじさんじゃないだろ?だからそういう呼ぶのはやめてくれないかな?」

「わかりました。じゃあなんて呼べばいいですか?」

ふむ、ヘルマンを名乗るのはアレだし、前世の名前もうひとつ嫌だし、もうこれでいいや。

「僕のことは裸と呼んでくれ」

「ミソギですか?わかりました」

まあ見た目も能力も同じだし問題ないだろ。

そのままネギ君と会話しながら学校長のところへ。

「失礼します」

「おおネギ君が、入りなさい」

ネギ君と一緒に学校長室に入ると、学校長から不審げな目で見られた。

「おや君は一体・・・」

「『僕を疑問に思つ』とをなかつた事に」

正直この技卑怯すぎると思つ。麻帆良にはいたら心を縛る系は封印しようかな。

その後、出会いの先生全員全員に同じようなことをやっていくべきで、いつしか魔法学校公認のネギ君のお兄さん的地位となることに成功した。部屋はネギ君と共同、さらに売店で手伝いをすることを条件にここにいていいんだそうだ。

部屋が一緒なのは困るが、ネギ君は俺にマイナスの感情を持つことも疑つることもできない。仮に若返りの魔法が解けた姿を見られても問題ないだろ？ 最悪記憶をなかつた事にすればいいだけだし。

について、俺とネギ君の魔法学校での生活が始まった。

4話（後書き）

今日は自分でもひびきの悪いと想っています。
次回でとつとと魔法学校編を終わらせて麻帆良に行つてもうおつと
思っています。

魔法学校にネギ君が入学してからもうすぐ5年が経とうとしている。俺としてはひとつとと麻帆良に行つてもらいたかったが、下手なことして修行地が麻帆良以外に変わつてしまつては困るのでおとなしくしていた。

特にこの5年間で報告すべきようなことはない。俺自身も成長なんかしていないし、誰にもフラグなんか立たなかつた。

アーニャちゃんはネギ君一筋だし、ネカネさんはネギ君が帰省した時にしか会わないからそこまで親密にもなれなかつた。まあ外見年齢が近いからよく話しかけてはくれたけど、それだけだ。

学校の女の子たちにも結構ちよつかいかけてたんだけど仲良くなれたのは4・5人だ。その子たちも将来有望だが、今はまだ9歳から11歳。さすがに青い果実と言わざるをえない。

・・・え？女子中学生も十分青い果実だつて？さてなんのことやら。

「ミソギさん！ そろそろ時間ですよー！ 一緒に行きましょー！」

「ああわかつたよネギ君」

そして今田は卒業前に同期皆で集まつてパーティーでもしようということになつてゐる。

俺も最後に子供たちにお別れを言つべくそれに参加することにした。皆売店をよく利用するため割と仲の良い子がいたりするのだ。

部屋の外に出るとネギ君とアーニャちゃんが待つてゐた。

「もしかしてお邪魔だつたかい？」

「や、そんなことないわよ！ 何言つてんの、もつー！」

アーニャちゃんはからかうとすぐ赤くなつて面白いなあ。

「？邪魔つて、なんのこと？」

「よし、ネギ君に教えてあげよつ。アーニャちゃんはネギ君と一人で「わー！わー！わーーーーー！」ちよ、痛い痛い。たんまたんま、もつ言わないから」

照れ隠しにボコスカ殴るのはやめてもらいたい。身長差の関係上、拳が股間周辺に飛んできて非常に怖いんだ。

・・・いや、さすがに子供たちとじやれてる時に大嘘憑きだの言葉の重みだのは使わないよ？事実この学校にいる間は俺の存在が怪しまれたときにそれを『なかつた事』にする時以外は使つてないし。

「もひ、早く行くわよミソギさん。今日の参加者はあなたを除いて皆卒業生なんだから、ミソギさんは皆を一人でお祝いしなきゃいけないのよ？」

「ああ、ちゃんとプレゼントも用意したから楽しみにしててよ」

「ホントですかー楽しみです！」

そんな会話をしながら大食堂に向かう。今日は特別に貸し切らせてもらつてるのだ。

「みんなー、ミソギさん連れてきたよー。これで全員かな？」

「おひ、ミソギー！やつときたか！」

「ネギ君おつかれー、はーい、ドクペあげるー」

「あ、アーニャちゃん。これ、こないだ借りた本、まだ返してなかつたから返すね」

それぞれ仲の良い子たちが出迎えてくれた。こうこう光景を見るのも今日が最後なのか、それはそれで少しあみしこな。報告するようなことはなかつたが普通に楽しい日々を送ることはできた。

最初は早く過ぎると思ってた魔法学校での生活だけど、今にして思えばもう少しも良かつたかも知れないな。

そんなこんなで数時間の卒業前夜パーティも終わり、翌日、卒業式になつた。

次の修行場が書かれている卒業証書をもらつたネギ君を待つている間、近くに来たネカネさんとだべる。

「じゃあミソギ君もネギと一緒に修行場に行こうと思つてるので?」

「ああ、それしかやることもないしね」

ちなみに大嘘憑きのおかげで俺がネギ君と一緒にいることを疑問に思つやつはない。

「でも、ミソギ君なら購買のといいで雇つてもいいんじゃないの?」

「一生あんな仕事を続けるのは御免だね。ネギ君の修行地がどこだかは知らないけど、もうここに5年もいたんだ。そもそも僕も田舎な活動がしたくてね」

主にハーレム作成的な意味で。

そういうえばこいつらの中で俺はどんな設定なんだろう。俺とネギ君が一緒にいることを疑問に思わないのはいいけどこいつらの中ではなんて理由付けされてるんだろうな。それとも理由なしの無条件なのかな。

「あ、ネカネおねーちゃん、ミソギさん」

と、ネギ君が来たようだ。すぐ横にアーニャちゃんもいるな。

「やあネギ君、アーニャちゃんも、卒業おめでとう」「ネギ、アーニャ、卒業おめでとう」

「「ありがとう…」」

「さて、それで君たちの修行地はどこだつたんだい？」

「私はロンドンで占い師をせよ、だつて」

「僕のは…・・日本の学校で先生をやれ、だつて」

「せ、先生！？」

ああ、とかいいながらくらうと倒れそつになるネカネさん。

「大丈夫だよ、僕もついて行くから。できる限りサポートするぞ、修行の妨げにならない程度でね」

「まあ、ミソギ君がいるなら大丈夫かしら…・・？」

俺のフォローでなんとか大事には至らなかつた。

まったくこの人はネギ君に対して過保護すぎるんだよな。俺が側にいるつてことで最近は沈静化してきたけど。

「それじゃあ早速日本に行く準備をしたほうがいいね」

「え？ でも修行つてまだ先じゃないんですか？」

「何を言つてるんだネギ君。いきなり行つて先生なんて無理に決まつてるだろ？ 早めに現地へ行き、雰囲気を掴み、空気に慣れてからじやないと先生なんてとてもできないぞ」

「そ、そなんですか。わかりました、早速部屋に戻つて準備しますね！」

うむ、ネギ君は素直でいいなあ。原作通りだとここから更に数ヶ月

は待たなきや いけないからな。

原作を見てれば事前の準備なんて「」してなかつたのは歴然だ。だつたらとつとと麻帆良に向かつてもかまわないだろ？

「も、もひよつとゆつくりさせてもいいんぢやないかしら？」

「なにいつてんだよネカネさん。理由はさつきも言つただろ？ ネギ君の為を思つなら早く行かせてあげるべきなんだ。大丈夫、手紙とかは書かせるからさ」

まあ気持ちは分かるけど。やっぱり身近な人の別れはあとに回したいつて思うだらうからね。

「ネギも//ソギ君もいなくなるなんて、寂しくなるわね」

「いや、そこはアーニャちゃんも入れてあげよつよ」

「あ」

「よし、僕は校長にネギ君の修行先について話を聞いてくるよ。それじゃあまた今度、日本に行く前にもう一回ぐらこ会おうぜ

「そうね、じゃあ私はネギの様子を見てくるわ」

「一」とあれから2週間後、ネカネさんとアーニャちゃん、その他の元クラスメイトに見送られながら俺とネギ君は日本に飛び立つ。いざ、麻帆良学園へ！

5話（後書き）

魔法学校での生活は機会があれば番外的な感じで書いてみたいんですけど、まさしく誰得なので頭の中で妄想するだけに留めます。

・・・まずい事態になつた。

今日本に到着したばかり、日本時間にして午前9時だ。だが、なん
ということだ！

若返りの魔法が解けるまで後1時間しかないじゃないか！！
時差とか完全に忘れてたよ。地球が丸いことを今ほど憎んだことは
ないね。

今までの生活習慣に戻すためには15時間ほど老人の状態で過ごさ
なきやならないぞ。イギリスにいた頃ならともかく日本に来たばつ
かりでそんな長時間姿が見えないのは不自然だし・・・。

「ここから電車でもう2時間くらいで着くようですね

地図片手にネギ君が言つ。

仕方ない、とりあえず魔法が切れるぎりぎりでトイレにでも行って
かけ直そう。うーん、でも明日以降はどうあるかな・・・。

そんなこんなで麻帆良学園に到着。勿論途中で若返りの魔法はかけ
直した。

わて、このあたりに迎えの人があつらじいんだけど・・・。

「やあネギ君にミソギ君、久しぶりだね」

「あ、タカミチ！」

「ああ高畠さん。迎えの人つてあなたでしたか」

やつてきたのは麻帆良学園教諭にして最強クラスの魔法使い、高畠・

タカミチさん。

この人はネギ君が魔法学校にいた頃にわざわざ挨拶に来てくれた。最初は不審がられたが、『『疑う気持ちをなかつたことに』』してあげたらすぐに俺のことを信頼してくれた。

「ちゃんと迷わずにこれたようだね」

「ていうか今日平日なんですが、高畠さん仕事は？」

「え？ あ、あははは。・・・とりあえず学園長の所まで行こうか

誤魔化しやがつた。原作見ててもいい加減な教師だとは思つてたがここまでとは。いや、いい加減なのはこの学校自体か？ 高畠に連れられて学園長のところまで行く。てか学園長は向で女子中学エリアに居るんだよ。

「失礼します、ネギ君たちを連れてきました」

「おお、タカミチ君か。入りなさい」

言われるがまま室内へ。まあお約束通り突っ込んでおくか、後頭部長つ！

「よく来たのネギ君。それにミソギ君も、タカミチ君から話は聞いているよ。わしが麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門じゃ」

「はい！ 初めまして！」

「高畠さんがなんて伝えてるのか気になりますが・・・まあ、初めてまして」

まあ俺に對して疑いの念も悪感情も持てないから悪い」とは云えないといつてのは分かりきつてゐるけど。

「まつほほほ、何、悪いことは聞いておらんよ。ネギ君の良いお兄さんになつてくれるとか

「ああ、安心しました」

「では学園長、ネギ君の今後の予定についてですが」

「おお、そうじゅったの。ネギ君がこの時期に来たのは、麻帆良に慣れるためだそうじゅつのつ」

「はい、そうです」

「それじゃあ、いまから一ヶ月半ほど麻帆良で生活してもいいで、その間は教師の仕事の裏方に回つてもらおうかの。その後、1月から始まる新学期に新しくクラスを持つて先生としてやってもらおうと思つてるんじゅが」

「はい、わかりました」

「僕もそれがいいと思つますよ」

まあ妥当だろ。その間に俺は出来る限り女子とお知り合つになつておきたいものだ。

「それでその間の生活スペースなんじゅが、ネギ君とミンギ君は一緒に部屋にした方がいいのかの?」

「べつにどっちでも「一緒にいいです!」

・・・今割り込んだのはネギ君だぜ?こやー、なるべく信頼を得ようと行動してたつもりだけどまさかここまで依存されるとはなー。

「それじゃあ教師用の寮でいいかの?一人部屋と一緒に住んでもらおうと思つんじゅが

「わかりました」

とこうことで寮の住所を教えてもらつた。俺がいたせいで女子寮に入るイベントなくなつちゃつたのかな?ネギ君が女子寮にいてくれれば自然に女子寮に入る口実ができたと言つたの?・・・。

「今日と明日は好きに過ごして貰っていいぞ。明後日の今からこの時間にここにきておくれ」

「はー、じゃあ今日はこれで失礼しますね」

「行きましょうミソギさん！ 麻帆良ってすごい大きいですよね！ 僕こんな大きい街初めてです！」

「いや、まだ学園長の前だからもう少し落ち着いてね」

「え、あ・・・す、すいません・・・」

「ほほほほ、子供は元気な方がいいんじゃよ。よかつたらタカミチ君も一緒に連れて行つてみてはどうかの、案内役にはちょうどいいと思うぞい」

「わあ、タカミチも一緒！？」

「ああ、僕も一緒に行こうかな。街案内ぐらいはできるよ」

「じゃあ三人で行きましょうか。それでは学園長、また一日後に

適当に挨拶をして部屋から出る。いや、また変に警戒させないために『大嘘憑き』を使わなきゃ駄目かと思つてたけど高畑のおかげでその手間が省けたわ。

明後日のお昼まで暇だからな。今日はともかく明日はネギ君と別れて誰かにフラグ立てに行こうかな。勿論標的は俺が原作でもトップクラスに好きだった・・・ムフフフフ。

「それでは学園長、また一日後に」

ネギ君とタカミチ君、それにミソギ君が部屋から退出した。数分待つても戻つてくる気配がないことを確認して近右衛門は息をつく。

実際に会つたというタカミチ君に聞いても彼を肯定することしか言わず、彼の素性について調べてみても、まるでネギ君と出会つたという魔法学校入学の日に初めてこの世に現れたかのように何の情報も掴むことができない。更に気になることに、ネギ君の魔法学校入学の前夜、その近くの村で行方不明者が数人出でているときてる。彼の素行自体には特に問題が見られないとしてもやはり学園に迎える方としては気になることが多いすぎる。

だから今回の対面で彼への今後の対応を決めようと思つていた。

だが、その結果がアレか。

表面だけ見ると彼の言葉は善良で一般的な人のものであるかのように思えた。しかし彼の本質は善良とは言ひがたい。彼は恐らくなにか邪悪なものをその身に秘め、自分の目的の害になると思つものには容赦なく牙を向けるような人だろう。

問題はその目的が一体何かということである。正直彼には関わりたくないというのが本心だが、常にネギ君の側にいる以上そういうもないだろう。もっと様子を見る必要がある。

だが、タカミチ君にまるで洗脳のように（タカミチ君に洗脳の有無の確認はしたが極めて正常だった）信頼させた所を見ると、洗脳とは別に心を操るような魔法を使うのかもしれない。つかつに近づくわけには行かない。・・・どうしたものか。

非常に今更ですがキャラ崩壊注意。

いやー昨日は大変だつた。

騒ぎが起きるとすぐタカミチはネギ君にいい所を見せようとどうか行つちやうし、ネギ君はネギ君でタカミチのことを追いかけてつちやうから俺まで行かなきやいけなくなるし、行つたはいいけど騒ぎが収まつた後の後片付けとか手伝わされるし、タカミチは一部女子生徒に人気があるし、ネギ君は大多数の女子生徒から可愛いーとか言われてちやほやされるし、見た目球磨川さん（普通の高校生）の俺は特に誰からも注目されないし。

お前らしい加減しろよ。

そんなこんなで騒がしい一日が終わり、あてがわれた職員用の寮の部屋で眠り、朝になつた。

さて、今日はどうするかな。一応ネギ君に今日は一日一人で過ごす許可をもらつたが（かなり愚図られたが基本ネギ君は俺に従順なので最後には頷いてくれた）、こざフリーになると何をすればいいのか・・・。

一応俺にはハーレムという目標があるのでそのために動くのもいいし、昨日はそうする気満々だつたのだが、よく考えたらまだ皆授業中なんだよな。だから動くにしても夕方からしか無理なんだ。夕方からはそれでいいとしてもそれまではどうやって時間をつぶすか考え中。

とりあえずネギ君が起きてこないしね。外に出てよう。杖の入つてる鞄（魔法を使って容量を増やしてるからあの大きさの杖でも入る）を持つてけば外でも若返りの魔法をかけられるしね。

ていうか午前10時に魔法が解けてもしばらくそのままでいるか。最終的には今までの午前1時にかけ直す習慣に戻すためにもこう

いう時に少しずつ時間を稼がないと。

ということでネギ君に書き置きを残して部屋からとつとと出ることにした。

はい、あれから2時間ほどたつた今、特に何もせずにぶらぶらしていたら10時になつたので、人がいないことを確認して元の姿に戻つています。なんか球磨川状態より自分の悪魔度が上がつた気がします。

いいのか麻帆良、敷地内に悪魔がうつりついてるだ。誰も気づかないのか？

多分侵入者には敏感に反応するけど中にはいる人には鈍いんだろうなあ。吸血鬼とか鳥族とのハーフとかいるし、そういうのにいちいち反応してたらめんどくさいもんな。

まあこの姿をあんまり人に見られるのも喜ばしいことではないので、特に誰かに話しかけたりはせずに普通にのんびりしてるだけだから害はないよ。だから見逃してね、結界さん。

あまかつた・・・。そりや学園都市に見知らぬ老人がいたら怪しく思われるよな。

かなりの数の学生にひそひそ噂された気がするし、よくわからんが見知らぬ先生から職務質問（？）とかされたぞ。まあ流石にそいつには『大嘘憑き』使っておいたけど。

そしてあれから5時間たつた15時、俺は大変なことに気がついた。エヴァちゃんつて確かに内部時間の一日が外での一時間に変わる別荘を持つてたよな。あれに0時に入つて中で1日待つてから外に出ればもういつも通りの習慣に戻れるんじやね？

だとしたら俺が今までやつて來たことは一体……？
まあでもその方がずっと樂だからそれでこいつと組み合ひだね。

とこいつことで今度は若返りの魔法をかけて普通に街を探索します。
ネギ君と合流してもいいけど、どうせ夜遅くに抜け出すんだからだ
つたら朝帰りでもいいかなと思つて今日はまつ帰らないことにする。
麻帆良は科学と魔法だけじゃなくて食文化の面でも優秀だから、レ
ストランの飯が非常に旨い。お金に関してはイギリスポンドが日本
円に両替できたので問題なかつた。

にしても麻帆良は広いね。見て回つてのだけでもう一日が過ぎてし
まつた。今2・3時ちょっとずき、けよしひどい時間だひつ。
事前に調べておいたエヴァちゃんの家へレッツゴー。

到着。夜遅くの来訪だが相手はロボットと吸血鬼、別に夜でも大丈
夫だらう。

よく考えたら女性の家を訪ねるのなんてこれが初めてじゃないか?
前世では・・・いや、やめよう・・・。

そんなわけで多少緊張しながらもドアをノック。

「はい、どちらさまだしよう」

そう言いながらドアを開けてくれたのは茶々丸ちゃん。いやーほん
とにロボットとは思えないね。かわいい。

「夜分遅くにすいません、私、禊といいます。エヴァンジェリンさ
んはいらっしゃいますか？」

「マスターに何の御用でしょ?」

む、警戒されてるな。まあ当然か。でもどうするかな、ハーレム作

りのために『大嘘憑き』を使って心を操ることはしないと決めてはいたんだが、でもそうなると警戒されるのは当然なんだよな。

「えっと、少しお話したいことがあります。大丈夫です、いくらお一方が可愛らしいからって襲いかかったりしませんよ。ほつはつは

「…………」

スルーされた……。田も合わせてくれなくなつた……つておい、扉を『閉めるな』！

「……」

ふう、『言葉の重み』成功。ロボットにも通じるかは不安だつたんだけど、よく考えれば言葉の重みつていつも電磁波を操つてるだけだからな。むしろロボットのほうがより効果的なんじやないか？茶々丸ちゃんは身体が動かなくなつたことに驚いてるようだな。うふふ、焦る姿も可愛いぜ。表情ほとんど変わってないけど。

「それじゃあ入らせてもらいますね」

「え？ あ、まつ……」

身体が動かない茶々丸ちゃんをスルーして中に入る。

「あん？ 貴様、誰だ？」

そして中で紅茶を飲んでいたエヴァちゃんを発見した。

「かわいいいいいいいいいいいい…」
「はー…お、おー…やめや、近寄るなー触るなー…」

エヴァちゃん見てからダッシュショ余裕でした。

優雅に足を組んで紅茶を飲んでるエヴァちゃんの胸に飛び込んでいきました。

さすがにいきなり飛びつかれるとは思わなかつたのか、何の抵抗もなく抱きつけた。

はー、胸なんか全然ねー、でもやわらかーい、ふははははははははははははは。

「離れると言つてはいるだろ、ひー…」

「ぐはつー…」

腹を思いつきり蹴り抜かれた。いてえ。でもなかつた事にはしない。エヴァちゃんと俺の初めてに触れ合いだからね。思い出にこの痛みは一生とつておくんだ…。

「なんなんだ」こつはー茶々丸ーおい茶々丸ーこつをつまみ出せー！

「こつって…ひどこなあエヴァちゃん。僕には禊つてこつ名前があるのに」

え？ 口調がさうきと違つて？ いやむつ今更丁寧にしてやべつても…
・でしょ。一応訪ねる側だから失礼のなによつに振舞おうと思つて
たんだけど…・無理でした。エヴァちゃん見た途端俺の理性が振
り切れました、はい。

「貴様の名前など聞いておらん…ええい、茶々丸はまだか…」うな
れば私自ら呪きのめしてくれる…」

「いやエヴァちゃん。僕は戦いに来たんじやないんだ。ちよつとお

話しに来ただけなんだよ」

「エヴァちゃんとか呼ぶな！ 駐れ駻れしいぞ…！」

「エヴァちゃんと仲良くしたいだけなんだつて、他意はないよ」
「こきなり飛びついてきたやつを信用できるか！ それだけならなぜ
あんな事をした！」

「いやエヴァちゃんがあまりにも可愛くて」
「かわ…・・・つ…」

「おお、顔が真っ赤になつたぞ。こんな状況でも照れるのかよ、かわ
いいなおい。

「そんなことを真顔で呪つた馬鹿が…くわつ、茶々丸！ 何をしてい
る…」

「あ、忘れてた」

まだ『言葉の重み』で動けなくしたままじやん。急いで解除。

「「」無事ですかマスター！」

おお、すぐきたな。

「無事じゃないーー」の変態に襲われそうになつたんだぞ！何をしていたのだ！？」

「いえ、何故か突然体が動かなくなりまして・・・明日、ハカセに見てもらいます」

「ああ、その必要はないよ。実は僕機械にも強くてね、僕が茶々丸ちゃんを見てあげるからとりあえず服を脱い・・・いや、なんでもないです」

「えええええ！超睨まれたぞ！あれ？茶々丸ちゃんって人のことあんな眼力で睨んだりするキャラだつたっけ？」

「マスター、早急にあの『』を排除しましょ」

「え？あ、ああ」

「おい、茶々丸ちゃんキャラおかしいだろ！エヴァちゃんもちょっと引いてんじゃねえか！」

「って、闘する気満々じゃねえか！」

「茶々丸ちゃんに殴り飛ばされる。いてえ。けどこの痛みも消さない

でおこう。思い出だから。

そんな俺にさらに追撃しようとする茶々丸ちゃん。更にその後で俺が逃げ出したときに魔法で追撃できるように構えてるエヴァちゃん。まったく、しょうがないなあ。

「『動くな』」

「「...」」

うん、ちゃんと吸血鬼にも効くみたいだな。ふたりとも驚いてる・・・いや、エヴァちゃんも茶々丸ちゃんも少なくとも俺が原因であることには気づいたみたいだな。まあ今回は声にだしちゃつたから当然か。

とつあえず近くのソファに座る。俺に立つてうれると回りつも落ち着いて会話しづらいでしょ。

「……これはどんな術だ？ そつにえは先程も障壁を無視して突っ込んできたな……。貴様、一体何者だ？」

あ、障壁なんてあつたんだ。多分無意識で『なかつたこと』にしてたわ。俺とエヴァちゃんを遮る障壁は全て取り除くぜ！ みたいな？

「だから、話をしようって言つたんだ。やつを飛びつにちやつたのは、まあ、謝るけど、でも僕に交戦の意思がないのは確かだよ。エヴァちゃんと仲良くなりたいというのは本当だし、エヴァちゃんの得になるような情報も持つってきたんだ。だから、話だけでも聞いてくれないかな？」

こつして、第一印象最悪の状態から僕とエヴァちゃんと茶々丸ちゃんの二者会談が始まった。

7話（後書き）

最初の予定では、エヴァちゃんを言葉の重みでひれ伏させて無理やり仮契約するはずだったんですが、さすがに自重しました。

「それで、話といつのはなんだ?」

「まあまあまでは落ち着いて、お茶でも飲むつじやないか。ねえ茶
々丸ちゃん?」

「・・・お茶を用意してまこつます」

とこつ訳で一人の言葉の重みを解除して今からお話タイム。やつぱりお話する時のはお茶がないとね。でも茶々丸ちゃん、露骨に俺の方を睨みつけるのはやめたほうがいいと思つよ?、

「どうぞ」

「うむ」

「ありがとう茶々丸ちゃん!」これは美味しいそつ、な・・・水、だね」「申し訳ありません。安物のティーバッグを切らしてしまったので「でもエヴァちゃんのは普通の紅茶だよね?」「マスターのものは最高級の茶葉を使っております」「・・・僕もそっちの方がいいかなあ」「・・・」

無視された。

なんか茶々丸ちゃん滅茶苦茶俺のこと嫌つてるよね?なんで?

「・・・あれだ、茶々丸。確かに気に食わんやつだが、そこまで邪
険にすることもないんじやないか?」

おお、エヴァちゃんが気を使つてくれてる。天使か。エヴァちゃん
マジ天使。吸血鬼だけど。

「やつだよ茶々丸ちゃん。いくら僕とは『え』んなことをされたらさすがに傷つくよ。僕のどじがいけないのか言つてくれれば直すから、正直に言つてみてよ」

「別にどじが嫌というわけではないんですが……生理的に無理といいますか」

「えー？ 口ボソツトにも生理つてあんのー？」

「やつこいつといふがいけないんじやないのか？」

閑話休題。

「わい、それじゃあ改めて自己紹介といつつか。僕は禊。年明けからこの学園で先生をやるネギ君つて子の付き添いでイギリスから来ただんだ。ネギ君がどんな立場の子かはエヴァちゃんには説明するまでもないよね？」

「ふん、あの馬鹿の息子か。それで、その付き添いとやらがこの私に何の用だ？」

「ああ、警戒しなくともとりあえずネギ君は関係ないよ。さつきも言つたけど僕はエヴァちゃんと個人的に仲良くなりに来ただけなんだから」

勿論茶々丸ちゃんともね、と付け加えたが何の反応もくれなかつた。こつちを見てすらくれなかつた。寂しい。

「仲良く、つて言つて方だと少し曖昧かな？ 具体的に言つて恋仲に」
それが用件なら追い出すだ「……ええっと、協定を結ぼうつてことだよ」

「まつ？」

「登校地獄……だけ？ ふざけた呪いだよね」

「……そんな事まで知っているのか」

「あ、僕が勝手に知ってるだけで、ネギ君は何も知らないよ。それ
どこのかエヴァちゃんのことも闇の福音のことも知らないと思つよ。
ネギ君は魔法世界で育つたわけじゃないし」

「それで、それがどうかしたのか？」

「登校地獄を解くためにサウザンドマスターの息子であるネギ君の
血を狙つてるんだよね？」

「貴様、それをどこので……？」

「まあそんなことはビリヤドモいに」とだよ。あ、茶々丸ちゃん、お

水おかわり

「かしこまりました」

睨みつけてくるエヴァちゃんは可憐いけど、情報源については話せ
ないんだよねー。まさか漫画で読んだなんて言えないし。

「お待たせしました」

「うんありがとう……ってぬるいー。さつきはまだ冷蔵庫から出
したミネラルウォーターっぽかつたけど、今回のこれは明らかに水
道水だよね！？」

「…………」

「何で茶々丸ちゃんは僕のこと無視するの？」

「そんなことはどうでもいい！で、私があいつの息子を狙つて
からなんだというのだ？ 阻止でもするのか？ やれるものならやつて
みろ！ この呪いのせいで私がどれだけ屈辱的な日々を過ごしたか、
貴様などにわかつたまるか！」

「いや阻止なんかしないけど」

「…………」

「言つただろう？ 僕はエヴァちゃんと仲良くなりたいって。だから

別にエヴァちゃんがやりたいことにケチつけるつもりはないよ。登校地獄、解けるように祈っているよ

まあ俺がその気になれば『大嘘憑き』で登校地獄をなかつたことにもできるんだけど、しない。大して仲が良くない今それをやつてもあんまり効果がないだろうしね。

もつと言つと今エヴァちゃんが登校地獄を解除するのは俺にとつていいことではない。エヴァちゃんと夢の学園生活が送れなくなつちやうから。だからもし万が一俺がここにいることによるバタフライエフェクトでエヴァちゃんがネギ君に勝つちやつて、しかも学園側から何の邪魔もなかつた場合は、仕方ない、俺が何とかそれを防ごう。だからこそ今エヴァちゃんに『大嘘憑き』を見せたくないんだよね。そうすればエヴァちゃんが見てないところで『大嘘憑き』を使つても俺が犯人だとは思われないだろうから何の問題もなく妨害ができる。

だからエヴァちゃんの前で使つのは『言葉の重み』だけにしよう。少なくともしばらくは。

「それならなぜその話を出した

「ネギ君を襲つことに関する妨害はしないつもりだけどさ、実はその前に一芝居演じて欲しいんだよね」

「どういうことだ？」

「いや、ぼくにも面子つてものがあるでしょ。付き添いできたのにネギ君が襲われているときに何もしてませんでしたじやちょっとね。だからそのための理由作りがしたいのさ」

「なるほど、貴様の言つこともわからんではないな

「でしょ？それさえしてくれるんならこの件に関してぼくはノータツチで行くからさ」

「わかった、いいだろ？で、その一芝居とは何をすればいいんだ

？」

「えつと、まあ、それは追々……」

「……あまりふざけたことさせたせるなよ?」

「わかつてるよ。大丈夫」

女の子とフラグが立ちそつた吸血鬼イベントを幾つか考へてはある
んだけど、誰を落とすかはまあ当人を見てからとこといで。茶々
丸ちゃんみたく原作のイメージとだいぶ違つてる子もいるだらうし
ね。あ、もちろんこの茶々丸ちゃんも好きだよ? でももう少しテレ
てほしいな……。

まあでもこの子ならネギ君に奇襲されたときに颯爽と助ければ案外
すぐ落ちるんじゃないか?

・・・でも待てよ? あれって確かオゴジヨに唆されてやつたことだ
ったよな・・・。あれ? オゴジヨってネギ君と知り合つたつけ?
村にいた頃にオゴジヨと出会つてるならいいけど、魔法学校にいて
授業がないときはほとんど俺と一緒にだし、俺はネギ君からオゴ
ジヨの話なんて聞いたことないし・・・。

もしかしたらネギ君とオゴジヨって知り合つてないかもしれん。

・・・まあいいか。あいつがいても邪魔なだけだし、仮契約の魔方
陣は俺が覚えてるからとりあえず問題ないだろ。オゴジヨがいない
と起こらぬいイベントなんて修学旅行のネギ君の唇争奪戦くらいだ
ろ。あんなうらやまけしからんイベントなんてないほうがいいんだ。
でもそうすると茶々丸ちゃんにフラグ建てるのが一気に難しくなつ
たな・・・。最悪ネギ君に取られてしまつぞ・・・。

「おい、どうした? 突然呆けて」

「ああ! めん、なんでもないよ。じゃあまあそつにう事でこれから
僕とエヴァちゃんと茶々丸ちゃんは仲間つてことでいいね?」

「・・・・・・」

「いやです」

エヴァちゃんは嫌そうに顔をしかめただけだったけど茶々丸ちゃんからはさっぱりと断られた。ここまで嫌われるともついつそ清々しいね。

「ま、まあ仲間は言こすぎだらう。せつだな、せいぜい共犯者といつたところじやないか？ なあ？」

「ええまあそれくらいなら」

見かねたエヴァちゃんがフオローしてくれた一天使か。

「でも共犯者つてなんか仲間以上に蠱惑的な響きだよね」

「「・・・・・」」

「『』を見るような目で見られた。癖になりそ・・・いや、やっぱないな。

「それで、貴様が言つていた私にとつて得になる情報とはなんだ？」
「あ、それは・・・あれだ。・・・ちょっとまつてね」

どうしよう。エヴァちゃんがこねた時のために、

『実はナギさんと何年か前にあつたんだぜー、しかもその時この杖を受け取つたんだぜー、この杖はネギ君が立派な魔法使いになつたらネギ君に渡すけどそれまで預かってるんだぜー、だから死んだつて言つのはガセでまだナギさんは生きてるかもなんだぜー』

つて言おうと思つてたんだけど、それをするまでもなくエヴァちゃん（初対面にしては）それなりに良好な関係になれちゃつたぞ。とするところは言わないほうがいいよな。実際ナギさん死んでるわけだし、またナギさんへの想いを取り戻して俺の事見向きもしてくれなくなつたら困るし、とりあえず言わんと。でもそうするとエヴァちゃんの得になるようなことがなくなつちや

うんだよな・・・。

「おい、実は何も無いのか？あれはただの方便だったのか？」

「う、ぐぐぐ・・・。あ、そうだ！別荘だよ別荘！」

「なに？」

「ここにじや言いづらいことなんだ。さつきの話以上にね。たしかエヴァちゃんって内部時間の1日が24時間になる別荘をもつてたよね？そこで話したいんだけどいいかな？」

「だからなぜそんなことを知っている・・・。まあいいだろう、ここまで来れば乗りかかった船だ。別荘の中に入れてやる。感謝しろ」「ありがとうございます」

ところが、現在の時刻24時ちょい過ぎ、ちょっとタイムオーバーしたが本来の目的である別荘にも入ることに成功。さて、それじゃあ取つておきの秘密を告白するとしますかね。

「少し準備があるからな、1分ほどここで待つていろ」

さて別荘に入る「う」というときにエヴァちゃんからそんな要請が。なんだそれ。想い人が来たときに急いで部屋を片付ける高校生かよ。・・・はつ！まさかエヴァちゃんは俺のことが・・・。

「君の気持ちはわかつたよエヴァちゃん。でも1分でいいのかい？」

「ああ、中ではその24倍だからな」

あ、なるほど。現実世界ではたったの1分でも別荘内では24分になるのか。そんだけありやさすがに大丈夫だね。

「それでは行くぞ、茶々丸」

「はいマスター」

よし、じゃあ今から1分間待機だ。

・・・

はい、もういいかな。

「おじや ましまーす」

一応挨拶してから中に入る。へえ、中は結構おしゃれなんだね。てくてく歩いて行くとエヴァちゃん発見！なんかこつちに手を突き

出してるぞ！

これはあれか？抱きしめろひとか？よつじやまかせろー。
エヴァちゃんに向かつてそれなりの速さでダッシュ。ニヤリとする
エヴァちゃん。

「エヴァちゃん、会いたかつ『『氷瀑』！』」

なんか周囲が突然爆発した。しかも景色は南国なのになんか寒い。

「ちょ、エヴァちゃん？これは何のサプライズパーティー？」

「だまれ。『氷神の戦鎧』！」

俺の質問に対する返事は巨大な氷塊だった。さすがに『これは『大嘘
憑き』を使わないと死んでしまつ。

「ふはははははは！私が力を封じられてるからといって甘く見
たな！ここでは力が取り戻せるんだよー！ふん、ここに来たいなど
といつたのが運の吸きだ。じわじわと翻り殺してくれる。ほらーと
つと起きろ！」

「はあ・・・エヴァちゃん・・・

「つか！？無傷だと！？」

なんだよ、そういう事かよ。どうりですんなり別荘に入れてくれる
と思つたよ。それなのに俺はもしかして俺に・・・とか、なんだよ
根はいい子なんぢやないか、とか色々勘違いしてしまつた。
がっかりしながらも立ち上るとエヴァちゃんが驚きの声を上げた

「馬鹿な・・・直撃したはずだぞ・・・」

「ああうん、僕は回復魔法の使い手でね」

それには適当に返事。だつて詳しく説明したら大嘘憑きがバレちゃうもの。

にしてもエヴァちゃんが俺に攻撃を仕掛けてきたってことは、まだ俺のことを全然信頼してないってことだよな？うーん、やっぱり最初は力づくにでも言うことを聞かせるべきかな。まず俺のことをよく知つてもらつてその上で仲良くなつたほうがいいかもしれない。

「まあそんなことせざりでいいんだよ。ねえヒカルちゃん。」「ぐあーーー。」

ぼーっとしてると、波田がそうなのでとりあえず『紅葉の重み』で動けなくしておひづ。でもただそれだけだとお仕置きにならないのでひれ伏せさせとく。たまには都城さんっぽくしてもいいよね。

「ふざけるな貴様！ 一体何をした！」

「ふざけるなはこっちのセリフだよエヴァちゃん。僕は大抵のことはされても怒らないけどね？ それでもされたら嫌なことだつてあるんだよ。今のが正しくそれだ。エヴァちゃんは僕のことを裏切つて、襲いかかってきた。そうだよね？」

激昂するヒガアちゃんに対し思いつくままに言葉で威圧感をアピール。別に今回のこれも怒つてはいないけど怒つてるつて言わないとヒガアちゃんを怒ることができないから怒つておく。ん?なんかよくわからなくなつてきた。まあいいや。

「黙れ」

「 」

叫ばれるとなんか罪悪感が湧いてくるのであいつと落ち着いてもらおう。

「マスター……」

おひとい、茶々丸ちゃんもいたのか。まあでもエヴァちゃんに怒つてる最中だから今は邪魔しないでね。とこいつだけで、

「『動くな』」

「へーーー。」

ロボットなのに睨んでるつことかがわかるべりにキツイ皿付きをしてるわ。でもそんな茶々丸ちゃんも可愛こよー。

「わい、今、僕はエヴァちゃんに『襲われたよ』ね?」

「・・・」

氣をとりなおして続あとこいつ。と黙つたがエヴァちゃんが返事をしてくれない。

そのまま沈黙に包まれて一分ほどたつた後でやつやへ氣づいた。そういえば俺黙れって言葉の重みで命令したままじやん。やつや喋れねえよ。

「あ、おひ『喋つてこよ』。つこで茶々丸ちゃんは『邪魔しないで静かにしててね』」

若干恥ずかしいがいまさらながら言葉の重みを解く。その時意味ありげに呑みを持たせたと思われるよつて茶々丸ちゃんのことを黙らせておく。ついで扱いで「めんねー

「・・・貴様、何者だ？」

「今そんなことはどうでもいい。質問に応えてほしいな」

弱々しげヒュアちゃん可愛いー!と思いつながらも高圧的な態度で接する。

「・・・ふん、襲つたからどうした」

「襲つたんだよね? だつたら今僕がヒュアちゃんを襲つても、君に文句をいつ資格はないよね?」

「何を、する氣だ?」

エヴァちゃんの顔が恐怖でひきつる。やうやくだよね、なにする気だよ俺。

女の子に土下座の格好させて今から襲う宣言だと? どこの変態だよ。なんか死にたくなつてきたがこれも後々エヴァちゃんと良好な関係を築くため! 本当に襲つちやつたらただの犯罪者だけど、言つだけなら別にいいよね?

すげ怖いので茶々丸ちゃんの方は絶対に見ないよつじよつ。背中を向けてるのに、なにか怨念めいたものが感じられる。

「何をするかつて? 僕は男が女を襲つたら一つしか知らないから、それをするつもりだよ」

「なつ! や、それは・・・」

あんまりな俺のセリフにますます顔を青くするエヴァちゃん。まあここまで怖がつてくれたならもう大丈夫だろ? じりりで態度を変える飴と鞭作戦により、裏切れば怖いけど裏切らなければ普通の無害な少年だと思つてもらえるはず。

「でもかわいそりだから一回だけチャンスをあげよ? 素直に、こ

めんなさい、って言つて反省してくれたら、特別に許してあげるよ

よし、これでエヴァちゃんが謝つて、俺が許して、それで大団円だろ。その後は三人で楽しい時間を過ごそうねー。

「・・・ふざけるのも大概にしろよ・・・なぜ私が貴様に屈服せねばならん・・・」

・・・あれ?

「私はエヴァンジロリン! 真祖の吸血鬼にして最強の魔法使いだ! 貴様などに屈服してたまるか!」

・・・あれ?

「私をどうしようが好きにするが良い! だが何をされようが貴様に對し服従するなどありえん!」

え、ええと・・・。

俺は今選択の余地を与えたよな? 謝れば許すって言つたよな? その上でこの選択なんだよな?

これは・・・まさか・・・やつちやつていいことか・・・?

「つまり、僕に謝る気はないってことだね？」

「そうだと言つていいだろ？！」

「その結果僕に何をされてもいい、と？」

「貴様に媚びるよじました！」

「それじゃあ遠慮なく」

「つ・・・！」

YES！今言質とつたよ！何されてもいいって言つた！つまり同意の上だ！

もうここまであたら据え膳食わぬはなんとやらだろ。やるしかなに。

「それじゃあ遠慮なく」

「つ・・・！」

エヴァちゃんの方に一步踏み出す。それだけなのにエヴァちゃんは怯えたような声を上げた。言葉の重み状態だから体が震えられないんだろうなー。自由になるのは顔面だけだろ？

側に歩み寄つてしゃがんで髪を撫でる。わあふわふわだ。

「それじゃあエヴァちゃん覚悟はいいかい？」

「・・・」

返事をしてくれないことに若干つまらなさは感じるものの、まあ仕方ないかと思い直して頬を撫でる。・・・ん？なんか濡れてる？くいつと顎を持ち上げて顔を見ると、声が出ないことに舌を噛み締めながら泣いていた。

涙を流す目と目が合う。俺は何も言えない。エヴァちゃんも声が漏れないように唇を噛み締めているから何も言わない。・・・気まずい。

いや、さすがにこれ襲つとか無理しじょ。ムリムリ、絶対無理。

「ナ、ナーンチッテー！ア、アハハハハ。ジョウダンダヨジョウダ

「…

焦りのあまり片言になってしまったが、とりあえずこの気まずい状態を何とかしたくて言葉を紡ぐ。正直さつきの飴と鞭とか考えてた俺をなかつた事にしたい。

エヴァちゃんが何いってんのこいつみたいな目で見てきたのでいたまれなくなつて目をそむける。

「でも今回はこれで許してあげるけど仮の顔も三度までだからね？ 次は・・・あつ、三度だから次もいいのか。でもその更に次はないからね？」

とつあえず一刻も早くその場から立ち去りたくて自分でもよくわからない適当なことを言い残してその場から立ち去り、そこから離れた場所で20分ほどぼーっとしてから言葉の重みを解除していなかつたことこづづいて急いで解除したのだった。

9話（後書き）

最初はエヴァ視点で書いていたんですが、あまりにもキャラ崩壊がひどくなってしまったため急遽書き換え。
エヴァ視点も見たいという方がいたらいつてください。

あー、まことに、泣かせちゃったよー……。これから仲良くやつていきたいんだけど、なんかこいつ、気まずいよね。泣かれちゃうと。

そんなことを考えながらエヴァちゃん達がいた場所から離れた所の海で泳いでいた。

いやほら、やつぱりこんな南国風の場所なら逆に泳がないと失礼でしょ？勿論服はきてるよ。万が一エヴァちゃんや茶々丸ちゃんに見つかったときに、明らかに突然来た向こうが悪いのに、何故か男である俺が痴漢呼ばわりされるらぬ。それは避けたい。

あがる時に濡れてたことをなかつた事にすれば何の問題もないからね。まあエヴァちゃんに見つかったらそれもできないけど、その時は仕方ない。

にしてもこの体やつぱりすげー。泣いてるエヴァちゃんから逃げてきた後1~4時間ぐらいいぶつ続けで泳いでるけど一切疲れない。さすが悪魔+『完成』によって身体能力が極限まで上げられている状態だ。

考え方をするときは適度に身体を動かすといつて言つしね。でも名案が浮かばない。エヴァちゃんが俺を探す気配も一切無い。24時間は出られないからこの中にまだいるはずなんだけど。

そんなこんなでさらに9時間後。

あの後若返りの魔法が切れた俺はエヴァちゃんに今の姿が見られないよう泳ぐのをやめ、森のほうを散策してた。んでもつてこの中に入つてから後20分ほどで24時間。若返りの魔法をかけ直してからエヴァちゃんのところに戻つて、そろそろ仲直りをするべき時間だ。

とこうことで間近でマジカル ワンダー＝ミソギでおなじみの俺が最も得意とする若返り魔法をかけてエヴァちゃんのもとへ。

二人は来た時と殆ど変わらない場所で優雅にお茶を飲んでいた。

「む、遅かったなミソギ。何をしていたのだ？」

「え？ いや別に特に何も」

約24時間前のことは何もなかつたかのよつに振舞われた。それでいいならいいけどさ。

ていうか初めて名前を読んでくれた！ 嬉しい！

「なんだと？ 私は貴様が戻つてくるのをここで待つていたというのに、貴様は何をするでもなくただ徒に時間を過ごしていったというのか？」

「まあ・・・そう言われるとそつかな」

泳いでただけだし。眠くなつたら寝よつと思つてたけど眠くならなかつたし。

「え、ていうかエヴァちゃん俺のこと待つててくれてたの？」

「何馬鹿なことを言つてるんだ。貴様が話があるからここに連れて行けといつたんだろうが」

「あ、そうだった」

やべえすっかり忘れてた。別のこと集中してたせいでそれを考える時間がたつぶりあつたにもかかわらず完全に忘れていた。

「ほり、外では言えないようなことなのだろう？ 早くいってみる」

「ヤーヤーしながら催促するエヴァちゃん。この幼女わかつていやつてるんじゃな」だらうな？」

でもビリュウ。ここまで来てやつぱり嘘ですなんて言ごそりこし。・・・。

「・・・こきなり襲つてくるよつな人に教えられるよつな」とじゅうないかな・・・」

「は?」

「さつきエヴァちゃん突然襲いかかってきただろ? もしこの情報を教えた後にそんなことをされたらまたものじやないからね、もひじばりへあはずけだ」

とつあえず言いがかりをつけた」とした。

さつきエヴァちゃんには泣くほど叱つたわけだから、多少は効果があるんじやないか?

そう思つてエヴァちゃんにそいつ叫ぶと、顔を俯けてしまつた。

「最低ですね。マスターの寛大なお心で先程の件はなかつたことにしてあげたところに、その優しさを踏みにじるなんて。見損ないました」

茶々丸ちゃんにすく冷たい声で言われた。

あれ? さつきの件つて俺が被害者じやないの? 原因がビリうであれやつぱり幼女が正しつてことになつちやうの? なんだこの女尊男卑は。なかつた」とにするのは俺の専売特許だぞ。

「とまあ色々突つ込みたいところはあるけれど、まず茶々丸ちゃん。見損なえるほど僕の評価は高かつたのかい?」

「私の中でゼロからマイナスになりました」

「むしろ今までマイナスじゃなかつた事に驚いたよ」

そこまで嫌われているわけじゃないのかもしれない。

「よせ茶々丸。確かに先程は私に非があった。ミソギ、先程はすまなかつた、許せ」

なんとエヴァちゃんが茶々丸ちゃんを止めてくれた上、謝罪までしてくれた。一応頭も下げてくれた。椅子からは降りてないけど。

「謝つてくれるなら許すけどさ。突然どんな心変わりだい？ 昨日は絶対謝らないって言つてなかつた？」

「まあ考えてみたら私が一方的に悪かったわけだからな。それに、貴様の事情を考えれば私に裏切られたらショックをうけるのも当然だろう」

「うん？」

俺の事情？ なんだそれ、俺がエヴァちゃんを好きつて事情か？ まあそれならたしかにそうだけど。

「それに一度裏切つた私に話したくないといつ氣持ちもわかる。打ち明けた後に裏切られた場合はこれどこのでは済まないからな」

確かに告白した後に攻撃されたらこむけどさ。

「だからそのことを詫びた上でもう一度言いたい。私にミソギの持つている情報を聞かせてくれないか？」

真剣な表情で問いかけてくるエヴァちゃん。うつむ、ただ俺をいじつていただけじゃなかつたのか。

とはいっても俺がエヴァちゃんに『えられる情報なんて、ナギさんのことだけだしなあ・・・。でもここであの人の話をするのは気がすすまないし・・・。どうしよう。

そんなことを考えて数分の間逡巡していると、その沈黙をどうとったのかエヴァちゃんが大きくため息をついた。

「やはり話す気になれんか・・・。だったら私から言ひてやる。お前の口から聞きたかったのだがな」

「え・・・？」

俺の口から聞きたかった言葉？仕方ないから自分で言ひつつ、ま、まさか・・・愛の告白か？愛の告白だったのか！？といつ妄想を抱いてしまいそうなセリフだなおい。

「マスター、そのことに關しては伏せるのではなかつたのですか？」
「いや、いつそはつきりさせてしまつたほうがお互い楽だろ。奴も最初は明かすつもりだったのだろうしな」

何の話だろ？？と思いながらもエヴァちゃんの言葉の続きを待つ。そしてエヴァちゃんはこちらを向きながら真剣な表情で

「ミソギ、お前は人間じゃないな」

といつた。

「え？ 一体なんのこと？」

とつあえずとぼけてみる。

「」の別荘で起きたことは距離が離れていてもだいたい感じ取れる。数時間前に突然貴様から漏れる魔力が人間のものではなくなった。と言つてもわずかな変化だつたから余程のものでないと気づけん程度の変化だつたがな。その後数時間その状態のままで過ごし、何らかの魔法を使したとたん今のような人間としか思えない質の魔力に戻つた。つまり貴様は本来人間ではなく、何らかの隠蔽魔法をすることで人間と偽つているのではないか？」

・・・ おお、当たらずといえども遠からず。何故かこの姿になると悪魔っぽい感じがしないと思つてたけど、魔力的には人間だったのか。だとするならその説明でもほほ間違つてないな。違う点は使つてる魔法が若返りの魔法だといつところだけだ。

「どうなのだ? ミソギよ」

まあ別にエヴァちゃん相手なら隠し通したいわけじゃないし、認めちゃおう。最悪なかつた事にしちゃえればいいんだし。

「そうだね、たしかに僕は悪魔だ」

「やはり・・・だから私の所に来たのか?」

「ん?」

「同じ人外同士だからと私のところへ来たのかと聞いているんだ」「ああそういうこと」

どうするべきか。別にそんなわけじゃないけど、ここで否定しちゃつたらじゃあなんで来たんだよつて言われちゃうし、肯定したら安く見るな!とか怒られそう。

「まあそういう思いがあつたことも否定はしないけどね。でも一番

はエヴァちゃんと仲良くなるためだよ。わざわざ聞つただろ？」「

なのでとつあえず聞を取ることにした。

「そうか。だがなぜナギの息子のところなんぞで世話を焼いているのだ？」

「うーん、自分語りはあんまり好きじやないんだけどね」

基本嘘だし。自分について正直に話せることなんてないよ。

「まあでもエヴァちゃんならいいかな。僕は実は魔法世界のお偉いさんからネギ君を殺すために派遣された悪魔なんだよね」

「・・・なんだと？」

「あの頃の僕は雇い主に拘束されていたから、言う事を聞かざるをえなかつたんだよ。でも、その後なんやかんやあって、ネギ君のおかげでその状態から解放されてね。その時の恩もあるし、そもそも僕はこの世界にいるべき存在じやないから居場所もないくことでネギ君の傍にいるつてわけ」

「なんやかんやとは？」

「それは申し訳ないけどエヴァちゃんにも聞こたくないかな。『めんね』

「いや、人の事情をとやかく詮索するものではないな。いらっしゃりこそ悪かった」

この事情説明の仕方ならあんまり変なこともいってないし、あながち嘘でもないし、貫き通せるかな？

「あ、それとこの件に関しては他の人には内緒にしてね」

「ああ、わかつていい。こんなところで貴様が悪魔だとバレたら、正義の魔法使い共がキャンキャン吠えてくるだらうからな」

「ネギ君にも内緒でお願い」

「ん? なぜだ?」

「さつきのなんやかんやに關しては詳しく述べないけど、ひとつ言つておくとネギ君のおかげと言つてもそれは間接的になんだよ。だからネギ君が自分が何をしたのかも知らないし、僕が悪魔だということも知らないんだ。知らないなら知らないほうが僕としてもありがたいからね。ネギ君にまであんな扱いをされたら僕の居場所がどこにもなくなっちゃうから

意味深なセリフを吐くことで辛い生涯を送ってきたのだといふ演出をする。

「そうか・・・お前も大変だつたのだな」

そして素直なエヴァちゃんは具体的なことは何一つ聞いていないにもかかわらずすんなりと信じてくれた。まあ俺が悪魔なのは間違いないから勝手に想像してくれてるんだろうね。

「わかった、先ほど攻撃を仕掛けた償いだ。ミソギのことなど誰にも言わん。ここにいる私達だけの秘密だ」

「ありがとう、そうしてくれると助かるよ」

やつた、思いの外簡単にエヴァちゃんと仲良くなることができた! いやー泣かれたときはもうだめかと思ったけど、悪魔だつて気づいてくれてよかつたよ。やっぱ仲間意識みたいのがあるんだろうな。今のうちは仲間意識でいいさ。そこから好感度を上げていって、最終的には恋愛感情にまで発展させてやうう! フハハハハハハハ!

「お話中のところ申し訳ありませんマスター」

「ん、どうした茶々丸」

「今の会話のデータが3日後にある定期メンテの際にハカセに見られてしまつ可能性があるのですが」

「・・・ああ、その可能性もあるのか」

「ハカセさん？」

つてあのおでこの子だよね？会いたい！原作ではあんまり目立つた印象はなかつたけど結構可愛いと思うんだ。だつてメガネだよ？おでこだよ？三つ編みだよ？アホ毛だよ？白衣だよ？マッドサイエンティストだよ？これが可愛くないわけないじやないか！

「ああ、茶々丸の開発者の一人でな。定期めんてとやらをするときにもしかしたら中のデータが覗かれてお前のことが知られるかもと心配なんだ」

「ああなるほど」

ハカセちゃんには是非とも会いたいが、でも悪魔だつてことを知られるのはよくなないな。エヴァちゃんと茶々丸ちゃんはともかく、他の人達には普通の人間だと思つてもらいたいからね。だつてこの二人は人間じゃないから恋愛感情を人間じゃない俺にも持つてくれるかもしれないけど、他の純正の人間たちは悪魔なんて好奇心の対象にはなつても恋愛の対象にはならないでしょ。というわけでメンテまでに何とかしないとな。

「でもそれなら見ないでつてお願いすればいいんじやないの？」

「今までそんな頼みなど一度もしたことがなかつたからな・・・不自然に思われるかもしけん」

「うーん、どうじょうか・・・」

・・・まあホントは『大嘘憑き』使って内部のデータだけなかつた事にしちゃえば、もしくは『言葉の重み』の電磁波で茶々丸ちゃん

の中を操ってその部分にだけロックかけたりやえればすぐ解決できるんだけどね。

しかし俺はできる男。一度会つたら次会つときの約束も忘れない。

「じゃあその対策を考える必要があるね。今日はネギ畠も心配だし明日もあるしそろそろ帰るけど、2日後にもつ一度此処に来るよ。その時に話しあおつ」

「もう一度とこなにでぐだわこ」

「おじ茶々丸」

「と言いたいところですが仕方ありません。2日後こ」

俺に暴言を吐こうとしたけどHUG'Aちゃんに奪められてしまつと不満げな茶々丸ちゃん可愛い。

こうして俺はHUG'Aちゃんと茶々丸ちゃんに次会つ約束を取り付けたのだった。

あの後別荘を出てから少し一人と会話し、ダッシュで教員寮の自室に戻ったときには2時を過ぎていた。

「で、何でこんなに遅かったんですかーー？」

「いやあ・・・アハハハ

「笑つてじまかさないでください！」

で、何故か俺はこんな時間まで起きているネギ君に尋問されていた。というか、俺が帰つてくるまではいつも通り10時前に寝ていたようだが、俺が帰つてきたとたん跳ね起きて尋問が開始されてしまったのだ。

ネギ君め、また変な魔法を覚えたな。侵入者が来たときに察知するような魔法だろうか。こんな時間に部屋に入る人なんて俺しかいないし、多分そうだろ？。

「でも、ネギ君に文句言われる筋合いはないんじゃないかな？今日は自由行動つて許可はとつたはずだし」

「そ、そうですけど・・・でも今はもう今田じゃなくて明日田です！」

「24時過ぎてますよ！」

「それは屁理屈じゃないかな・・・」

「そうじやなくともこんな遅くなるなんて心配しますーそれに・・・

」

「それに？」

「さ、寂しかつたです・・・」

少し恥ずかしそうに頬を染めながら伏し田になつてつぶやくネギ君。くつ、このセリフは男に言われても気持ち悪いと思うだけのはずな

のに、少し可愛いと思つてしまつた。これがタカミチとかにやられてたら即なかつた事にしてたけど、ネギ君は結構かわいい顔してるのは、9歳ぐらにならまだ中性的なところもあるからな。仕方ない。可愛いと思つても問題ないよ。つん。

「//つギさん？」

「ああうん。まあもうこんな時間だしね。そろそろ寝よつか」「だから、」まかせられませんよー今田どう向をしていたんですかー！」

めんどくせこな。エウカちゃんのことを言つわけにもいかないから適当に「まかすか。

「あー、ネギ君? もし何も言わずに許してくれるなら、ネギ君のお願ひを何でも一つ聞いてあげるけど、どう?」

「本当ですかー? わかりましたー! 聞きませんー!」

よし、ネギ君が単純なおかげで適当に「まかせた。

「じゃあお願い言つてもいいですか?」

「こや、今日はもう遅いからね。とりあえず寝よう。明日学園長のところに行くまで暇だからその時聞くよ」

「わかりました。じゃあおやすみなさい」「うんおやすみ」

そして翌朝、俺が田を覚ましたのは8時頃だが、その時はまだネギ君は眠つていた。まあ深夜2時過ぎに起こされたわけだから無理もない。だから起いられないよう外に・・・と思つたが流石に昨日の今日だ。おとなしく部屋の中で本でも読んでいることにする。

結局ネギ君が目を覚ましたのは午前10時過ぎ。学園長のところへ
は11時か12時ぐらいには行きたいのでお願いを聞いていた暇は
なくなりてしまった。

「約束したのに・・・」

「いや、ネギ君が起きなかつたのが悪いんだよ」

「起こしてくださいよ！」

「いやああんまり気持ちよさがために寝てたから起こすのも悪いこと思つて」

「ううう・・・」

そんな会話をしながら朝ごはん（兼昼ごはん）を食べ、学園長のところへレッスン。

「失礼します」

「うむ、入りなさい」

学園長室に入ると、学園長とタカミチ、それに見たことのない女の人もいた。確か原作のの人だよね。秘書みたいな役割の・・・名前なんだっけ？

「まず紹介しておこうかのう。こちらは今日からネギ君の指導教員になる源じゅな先生じゃ。わからないことがあつたら教えてもらいたなさい」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

優しげな微笑をネギ君に向けるしづな先生は、またに全国の男子中

高生が妄想する理想の女教師そのものなんぢゃないかな。嫌いぢゃないよ、うん。さすがに女子中学生だとこんな大人の魅力を持つ女的人はいないだろうからね。

「ネギ君は今日からしばらくは前も言ったように裏方に回つてもらおうと思つておる。仕事に慣れてきたら他の先生方の授業を見学して雰囲気を掴んでみるのもいいかもしれんのつ。本格的にクラス担任として先生をやつてもらうのは1月からじゃが、タカミチ君が出張の時はA組の臨時副担任としてやつてもいいことがあるじゃろつ。その時はよろしく頼むぞい」

「わかりました」

「うむ。それではしづな君、ネギ君を案内してあげておくれ」

「ええ、それじゃあ行きましょつか。ネギ先生」

「あ、あのー」

「ん?」

「僕は何をすればいいんですか?」

俺今までガン無視されてました。そりやネギ君がメインなんだから俺のことは後回しなのは分かるけど、さすがに一切触れられないのは凹むぞ。

「おお、そうじやつたそうじやつた。ミソギ君には別の用件があるから、少し残つていて欲しいんぢゃ」

「わかりました」

「えー!ミソギさん、一緒ぢゃないんですか!?」

「うん、まあとりあえずはね。仕事の内容は後で教えるから、ネギ君は自分の仕事を頑張つてね」

「はい!がんばります!」

ついわけでネギ君としづな先生が退室したのを確認してから学園長

と向かい合つ。

まあタカミチもいるから手荒なことはお互いにできないでしょ。タカミチは俺に対する悪い感情を抱けないから、明確な理由もなしに襲い掛かってくるとは思えないし、俺はここに来てから悪いことなんてしてないし。・・・エヴァちゃんがこの人達に俺のことを伝えてなければ、だけど。

「ふむ、残して悪かつたのう」

「いえいえ。それで僕は何をすればいいんですか？個人的にはAの臨時副担任は僕がやつてもいいと思うんですよ。ネギ君には裏方に徹してもらつて」

「いや、それにはおよばんよ」

「じゃあ何をするんでしょう？あ、僕前のところで購買の手伝いしてたんです。こんだけ大きい学園都市なんですし、購買とかもあるでしょう？結構慣れてますからうつく出来ると思いますよ」

「うむ、その話の前にだが、昨日何をしていたのか教えてもらつてもよいかの？」

「昨日・・・ですか？」

なんだ？もしかしてエヴァちゃんと遊んでたのがバレたか？まあ彼女は危険人物だから関わるなとかそういう感じかな。まあ何かを言われるまでは知らんぷりしてよう。

「麻帆良を見て回つてましたよ。すごい街ですから一昨日の半日だけでは見きれなかつたもので。あ、もしかしてネギ君と別行動とつてたのがまずかつたんですか？」

「いや、そうではなくてじやの。ふむ、そうか。まあ麻帆良を堪能してもらつているようで何よりじや。で、君の仕事じやつたの。この事態じやからネギ君は仕方ないが、教育の場にあまり素人を入れるのもよくないんでの。警備員や清掃員として働いてもらおうと思

つてある。よいのか?」

却下。先生なら最高、購買でもまだ良かつたが、清掃員とかじや完全に女子中学生との出会いの場がなくなるじゃねえか。適当な言い訳して他のに変えてもらえないかな。

「僕はかまいませんけど、ネギ君の付き添いですから、やつぱりネギ君の側で補佐とかのほうがいいんじゃないですかね?」

「それは大丈夫じゃ。本職の先生であるしづな先生がしつかり面倒を見てくれるじゃん?」

ちつ、だめか。うーん、どうするかな。『大嘘憑き』はあくまでなかつた事にするだけだ。この爺が俺にあまり好意的じやない感情を持つてるのはさすがの俺でも分かるが、それをなかつた事にしたところで俺が教師になれるとは限らん。最初から俺を清掃員にするつもりで用意をしていたのなら、ただ俺を信頼しているという理由だけじゃ別の役職を与えてはくれないだろ。う。購買にはさせてもらえるかもしれないが、せつかく大嘘憑きを使うんだつたらやつぱり教師にはなりたい。だからそれを使うタイミングは今じやない。とりあえずは諦めるしかないか。

「わかりました。じゃあ今日は何をすればいいですか?」

「うむ、今日は他の清掃員の人に仕事について教えてもらつてほしい。その場所まではタカミチ君に案内してもらつ。では、よろしく頼むぞい」

「了解しました。高畠さん。案内してください」

「うん、それじゃあ行こうか」

俺達も学園長室から出る。道中タカミチとどうでもいいことを話し合いながら、どうやって教師になろうか考えていた。

「それで、あやつをどう思つ？」

禊と一度目の対面をし、またも釈然としない気分になりながら、近右衛門は隣室に控えさせていたエヴァンジエリンに声をかけた。

「ふん、何だジジイ。私の助力が必要だといつからきてやつたのに、別に何の脅威も感じん男だつたではないか。英雄の息子の護衛としてきているのなら拍子抜けだが、あれなら特段警戒する必要もないんじゃないか？」

エヴァンジエリンは、隣の部屋から遠見の魔法で見た禊のことを酷評する。

勿論彼女は禊が何の脅威にもならない男どころか、人間ですらないことを知つてゐる。だがそれをこの眼の前の爺に教えてやる必要はない。アレを敵に回すと厄介なことはその身を持つて味わつていい。こんなところで何の徳にもならない裏切り行為をするくらいなら、何も知らない愚者を演じ続ける方がいいと考えた結果である。

「昨日、彼を一人の魔法先生に尾行させたのじゃが、トイレに入つたつくり姿を消してしまつてのつ。転移術式のようなものを使つたんじやろうが、魔法行使の痕跡が何もなかつたんじや。ああ見えて

彼はそれなりの使い手あることは間違い無いじゃろうな

「そのトイレ、あの男以外には誰もいなかつたのか？」

「いや、ミソギ君が入った後も何人かが出這入りしていたぞい。それで不自然なことがあつてのう

「ん？ なんだ？」

「ミソギ君がいなくなつていてことに気づいた先生が、その間にトイレから出てきた人を探して話を聞いていたんじやが、途中で連絡が来なくなつての。不思議に思つてこつちから連絡してみたら、自分がそんな仕事をしていたことすら忘れていたんじや

「・・・ほう。記憶を奪われたのか？」

「そうとしか考えられんのじや。だが彼も魔法使い、そう簡単にそんな魔法にかかるとは思えないのじやが・・・」

苦悩する表情を見せる近衛門とは別の意味で、エヴァンジエリンも疑問を感じていた。

奴に聞いた能力は、相手の動きを制限し、単純な動作なら強制させることができるものだつた。勿論悪魔であるなら他の魔法も得意なものはあるだろが、メインの能力はそれらしい。現に力の戻つていた私ですら動けなくなるほどの威力であつた。

だが、魔法使いの記憶を操作するのは、本来の能力でない、ただ得意程度のレベルでは不可能だろ。

とすれば、奴は恐らく自らの能力をすべて私に披露したわけではないとしか考えられない。

これは探りを入れる必要があるな。

「エヴァ。これでも彼が無害であると思つうか？」

「・・・ああ、少しは注意したほうがいいかも知れないな。で、それでどうするつもりだ？」

「うむ、エヴァに彼の監視を頼みたいんじや

「は？」

「いや、四六時中見張つていろというわけではない。ただ、彼に何か不穏な動きがありそうならばそれを止めて欲しい。それが無理そ うならタカミチ君や儂に報告して欲しいんじゃ」

「いやだね。私に何の得もない」

「もし引き受けてくれるのなら、君がネギ君に仕掛けるとき、余程 のことをしない限り邪魔はせん」

「・・・ほつ。つまり、私がこのくだらん呪いを解く事を黙認する と?」

「ああ。ネギ君がお主を止めてくれればそれでよし。それが駄目で も、本来であればもう解けているはずの呪いじゃ。もういいじゃろ う」

「はつ、いいだろ。引き受けたよ、そのくだらん仕事を。そ のかわり、私があのガキを襲うときの邪魔はするなよ?」

「ああ、じゃが、さすがに大怪我になりそうじゃつたり、一般生徒 に危害が及びそしたら止めさせてもらつぞ」

「最低限の吸血行為くらいは見逃せ」

「・・・仕方ないの。では、ミソギ君のことは頼んじやぞ」

「ああ、まかせていろ。じゃあな、ジジイ」

そしてエヴァンジエリンも学園長室から立ち去つてこつた。

近衛門はとりあえず禊の事はどうにかなるだろつと一安心。そして エヴァンジエリンも、禊側につく限りどうとでもなるような仕事と 引換にどちらの陣営からも不干渉を約束してもらえた。

こうして表だけを見ればお互いが満足のいく結果での合意は終わ つた。

そう、表だけを見れば。

1-1話（後書き）

ところで、主人公の仮契約の相手は誰にするべきなんでしょう。

今のところ

- ・ネギ
 - ・エヴァ
 - ・茶々丸
 - ・まだ本編未登場の2-Aのあの人
- のどれかを予定しています。今のところ一番可能性が高いのがネギなんですが、やつぱりネギだと誰得になるんでしょうか？もしくはこの4人以外の誰かと仮契約させたほうがいいんでしょうか？
- どなたか案をください・・・。

何が悲しくてネギまの世界に来て、それも麻帆良まで来て掃除なんてしないといけないのか。めんどくさい。

「早急に何とかする必要がある…」

「それがわざわざ約束を一日早めでうちに来た理由か？」

「こんな夜遅くにアホ無しで女性の家に訪れるなんて、最低ですね」「あれ？ふたりとも反応が冷たいぞ？ここは俺の哀れな境遇に涙して、今後の作戦と共に考えるところじゃないの？」

早速今日のことを報告しようとHガアちゃんの家に向かった俺を迎えてくれたのはHガアちゃんのため息と茶々丸ちゃんの暴言だった。

「要約すると、教師の仕事に就きたかったのに清掃員をやらされているから、どうにかして変えられないかといつ話か？」

「そうやつ、どうしたら良いと思つ？」

「知るか」

吐き捨てられた。

「いや、そんな事言わないでさ。一緒に考えよつぜ」

「あー、そうだな。私とお前は共犯者だ。協力してやらんこともないぞ」

「本当ー？」

「だが、貴様が私に隠しておる」とついて話せばの話だがな

「ひかりを睨みつけるHガアちゃん。いや、何言つてるのかわからな

いんだけど。

勿論心当たりがありすぎるからなんだけどね。

「隠してることなんてないよ

「はい、どの口がそれを言つか

たしかに。

「私は腹の探り合いなぞ得意ではないし、貴様相手にそれをしたいとも思わんから単刀直入に言つや。今日、冒頭ジジイに呼ばれてな

「ジジイ?」

「学園長のことだ」

「ああ、なるほど・・・え? なんで?」

「本来であれば私に頼るつもりはなかつたらしいがな。あのジジイは貴様のことを警戒している。だから私に見張り役をやれと言つてきてな

まじかよ。あのジジイ、俺のことをそこまで警戒してたのか。でも危なかつた。大嘘憑きを使ってたらエヴァちゃんにバレてたかもしれなかつたから、使わないで正解だつたな。

「受けたの?」

「ああ。だがまあ安心しろ。今のところはあのジジイより貴様に味方してやる。ジジイには適当に言つておくさ

「それは助かるね」

「だがその時奇妙な話を聞いてな

「?」

「ジジイは貴様の後を部下につけさせたらしいんだが、トイレで貴様を見失つてしまつたようだな。しかも探ししている途中に何者の仕業で自分がその任務についていたことすら忘れてしまつたらし

い。」「れ、貴様の仕業だろ？」「

「え、ええと……」

やべえ、それ絶対昨日の俺だ。下手なこと言つとボロが出るし、どうかごまかすべきか

ていうかあの俺に話しかけてきた先生、魔法関係者だったのかよ。普通になかった事にしちゃった。よかつた、存在じと消さないで下さい。

「お前の能力は人の動きを制限したり、簡単な動作を強制させたりすることだそ？だが、頭の中まで制限できるのか？」

「い、いや、ただの記憶消去の魔法だよ」

「ほつ、魔法使いの記憶を簡単に消し、更に後遺症も一切ないほどの高等な記憶消去の魔法が使えると？」

「そつそつ、そのとおり。いやー僕つて結構魔法が上手いからさあ……」

真剣な顔でこちらを睨みつけるエヴァちゃん。

おいおい、まさか顔を見て真偽を測るつとしてるとかそんな感じか？いやいや、さすがにそれは無理でしょう。

とは思つたが、顔に出さずにエヴァちゃんを見つめ返す。

「……ふん、今日のといひはそれで誤魔化されてやる」

不意にエヴァちゃんが視線を外してそう言つてくれた。よし、なんかわからんがうまくいったみたいでよかつた。

「ひとつ言つておくぞ。裏切られて嫌な気分になるのは貴様だけではない。貴様がこの先私の害になるなら容赦はしないぞ」

「冗談はよし子ちゃんだよ。僕がエヴァちゃんみたいなかわいい女

の子を裏切るわけないじゃないか

「これは本当。大嘘憑きのことは内緒にするつて決めてるし、攻略対象の娘には大嘘憑きを使いたくはないからね。

「で、貴様がどうやつたら子守役になれるかだつたな

「そつそつ、なんかいい案ない？」

「そうですね、ではこういうのはいかがでしょう。今すぐ麻帆良から出ていつてどこかの大学にでも入つて4年間真面目に勉強して教員免許を取り、それから麻帆良で教鞭をとるというのは」

「なるほど。たしかにそれは間違い無く正解なんだけ、でもそれはちょっと無理かなあ

「なぜですか？きつと貴方ならできますよ

「うんありがとう。たしかにセンター試験まで後2ヶ月もあるから今の僕なら東大ぐらい普通に入れると思うんだけど、でもそういう理由じゃないんだ。出来れば今月中に何とかしたいんだよね」

「わがままですね

「ごめんね」

とまあこんな感じで議論は進んでいった。

だがそのほどんどが先ほどの茶々丸ちゃんのように、どう考へてもただ適当に言つてるだけとしか思えない案ばっかりだつたのであまり実入りはなかつた。

唯一使えそうな案はエヴァちゃんが提案したものだつた。

「じゃあそうだな。私が小僧を襲つて、偶然通りかかつた貴様がそれを助けに入り、小僧を麻帆良で一人にさせておくのは危険だんだといちやもんをつけて常に一緒にいれる役職に就かせてもらえばいいんじゃないか？」

「あー、それはさつきの孫娘を人質にして学園長を脅迫するつての

よりかは現実的だね」

「ですがマスター。それだとネギ・スプリングフィールドに護衛がついて終わりになつてしまふのではないですか？」

「まあそこはミンギの交渉次第だろ。私は知らん」

「それにエヴァちゃん。一回目の奇襲が失敗したら、次にネギ君を襲うときに警戒されるんぢやない？」

「一回目は貴様がこつち側につくんだろーが。ガキの相手をさせるつもりはないが、周りの奴らが妨害しないよう協力してもらひづ」

「そうだつたね、了解了解」

「今度の満月が5日後だから・・・3日後にでも仕掛けるか」

「うん？満月の時のほうが強いんぢやないの？」

「だから満月の前に仕掛けるんだろうが。なぜ私がわざわざやられるためだけに満月の日を待たなければならん。5日後を逃したら次は来月までないんだぞ。どうせ貴様に止められるためだけに仕掛けるんだ。満月じゃなくていいだろ」

「なるほど、弱いままネギ君に奇襲をかけるけど、弱いってことが発覚する前に僕がエヴァちゃんを止めればいいんだね？」

「ああ。まあ戦いは茶々丸に任せせるからガキ一匹が私に触れることは出来んとは思うがな」

「いうわけでこれで行くことに。これの後で学園長の俺への不信をなかつた事にすれば案外すんなり行けるかもしね。子供を心配する親の気持は学園長もわかるだろ（つ）。まあ俺は親つてわけじゃないけど。

「夜にガキを外に連れていく言い分を考えとけ。そこは面倒みないぞ」

「おつけー。まかせといて」

まあネギ君のことだから俺がちょっと散歩に行こうって言えばあと

なしく付いてくるだろ。

「それじゃあ本題に入るか」

「本題? ってなんだっけ」

「明後日のハカセのメンテをどうするかだ」

「ああ、そういえばそんなのもあったね」

「・・・別に私は何の対策も打たずにメンテに連れていくてもいいんだぞ」

「ごめんなさい」

「まあいい。で、どうするんだ?」

「ふむ、何も考えてなかつたぞ。まあでも別に彼女も意地悪つてわけじゃないだろうから見ないでつてお願いすればそれで済むと思うんだけど、それは駄目つて言われたしなあ。まあ一応提案してみるけど。

「よし、じゃあ僕もそのハカセつて人に会つて、そこでお願いしてみるよ」

「何をだ?」

「中のデータに僕と茶々丸ちゃんの熱い一夜のことが入つているからそれは覗かないでつて「抉り取りますよ?」・・・普通に中の記録データを見ないでつてお願いするんだよ」

「だから、それだと逆に怪しまれるだろ。普段はそんなもの覗かないんだから、逆効果だ」

「あ、そうなの? じゃあ用心する必要もないんじゃないの?」

「たしかにそうだが、万が一ということもあるぞ」

「それに、ハカセは私の内部データの数値やモーターの回転数に異常があつたとき、原因を解析するため記録データを見ることが過去数回ありました」

「なるほど。僕と出会つたことで茶々丸ちゃんに今までなかつた感

情が芽生えたから、それがメンテの時にばれたらその理由を探るために記録を見られるかもって事だね」

「ええ。まさかロボットである私がこんな感情を持つなんて」

「それが愛つてやつだよ」

「いいえ、嫌悪です」

「まあどうあえず僕も一緒に行つて茶々丸ちゃんのメンテを見張つてようかな」

「それでどうする気だ?」

「記録を覗きそうになつたら止める」

「どうやって?」

「能力を使って体の動きを止めて」

「・・・さすがにそれはどうなんだ?」

「大丈夫だよ。別に動けなくしてから注意するだけだし、害はないよ」

「はあ・・・。わかつたよ。私の方から適当な理由をつけて覗かれんようにしておぐ。それでいいだろ」

「えー、Hグアちゃんじやあ激しく不安なんだけど」

「・・・じゃあ勝手についてこい。ただ向こうで変な真似をしたら殺すぞ」

「よ

「やばい、Hグアちゃんのイライラがマックスだ。さすがにふざけすぎたか。

「わかつた。それじゃあ一緒に行こうか」

「メンテは明後日の放課後からだ。5時ぐらいからだな。だからそれまでは私の前に絶対顔を出すな。来たら潰す

「じゃあ明後日にこの家に来ればいい?」

「いや、帰つて来ないから適当に探せ。見つけろ」

「・・・了解」

迷子センターで呼び出されちゃってられるかな。

家へ帰りネギ君の話を適当に聞き流して、翌日は眞面目にお掃除を頑張り、更にその翌日も夕方までは普通にお掃除をして、そして放課後となつた。

そこ、カットがひどいとか言わない。だつてこの間は女の子との絡みがなかつたんだからじょうがないじゃないか。エヴァちゃんには会うなと言われたし、掃除の時だつて10歳児の先生と同居という事情を鑑みて、シフトを毎頃、つまり皆が授業中の時の街中の掃除にしてくれたもんだから女子中学生となんて出会えるはずもない。早朝の掃除だつたら新聞配達してくる娘と知り合えたかもしけなかつたのになんてありがた迷惑をしてくれたんだ。

閑話休題。

さて、エヴァちゃん達はどのへんにいるのかな？

とりあえず麻帆良大学工学部の場所を調べて玄関で待つことにする。

・・・

現在午後6時少し前。

メンテの始まる5時はとつに過ぎてしまつて、エヴァちゃん達の姿はまだ見えない。

いや、おかしいでしょ。

仕方ないので中には言つて学生風の人と話をしてみる。くそつ、何で男なんかに声をかけなきゃいけないんだ。

「あの、すいません」

「ん、なにかな？」

「えつと、知り合いであるエヴァンジエリンさんと茶々丸さんが今日ここでメンテをするつていうから見学に来たんですけど、ハカセさんの研究室つてどこですか？」

「ああ、ハカセならここのは24階の一一番大きい研究室にこもつてると思つけど」

「ありがとうございます」

まああたりまえだが何の問題もなく会話を終了。即行でハカセちゃんの研究室へ。

「失礼しまーす」

ノックして声をかけ中に入る。

そこにいたのは

「む、きたのかミソギ」

退屈そうに寝転がりながら本を読んでいるエヴァちゃん

「あれ？どちらさまですかー？」

なんかよくわからない機械を片手にメンテ中の白衣の少女（多分ハカセちゃん）と

「・・・・・・・・・・・・」

上半身裸の茶々丸ちゃんだった。

「「」たそさま茶々丸ちゃん。それはそうと何で一人とももう一人にいるんだい？」

「ああ、中に入ろうとしたら貴様が入口の近くで待ち構えてたから仕方無しに裏口から回りこんだんだ」

「え？ なんでそんなこと」

「別にいいだろ、最終的に合流できたんだから」

「ああ、貴方がミソギさんですか。エヴァさんから話は聞いてますよ」

「へえ、どんな話だつたのか気になるね」

「ええと、たしかエヴァさんと茶々丸のストーカーなんだとか」

「・・・まあ、間違つてはいないかもしれないけど正解とも言いがたいね」

「なんだ、わかつてるじやないか」

はははは、と和やかに談笑。うつむ、やつぱりハカセもうつして見ると非常にレベルが高いぞ。

たしかこの人、研究室に自分のパンツ置きっぱなしにしてた気がする。・・・すばらしい！

「・・・ところで、なぜ貴方はこちらを凝視しているのですか？」

「愚問だな茶々丸ちゃん。目の前に上半身裸の女の子がいる。それを凝視しない奴は男じゃないね」

「ミソギさん、茶々丸をあんまりそういう目で見なによいに。これでもまだ2歳なんですから」

「誤解だよハカセちゃん。何も僕は茶々丸ちゃんを性的な目で見ていたわけじゃないんだ。かがくのちからつてすげー！って感動してただけなんだよ」

「はあ、そうですか」

あれ？ ポケモンってこの世代じゃなかつたつけ？ それともネギま世

界にはないのかな？やつぱり講談社の世界ではポケモンは存在してはいけないのかもしない。

「と、そんなことより、なんか急にモーターの回転数があがつててる。茶々丸、状況はどう？」

「それがその、奇妙な感覚が・・・どう言語化すればいいのでしょうか・・・おそらく、苛々しているところのが、その、妥当かと『ええつ！？苛々している！？人工知能が苛々つてどーゆこと！？他にはなんかあるの？』

「胸の主機関部辺りがもやもやして、落ち着かないというか・・・」

「茶々丸がこんな反応をするなんて、一体どこに異常が・・・」「ねえねえ、それってもしかして、恋じやないかな？」

「それは違うだろ」

「それはありえません」

「それはないんじゃないですか？」

「・・・ああ、そう」

原作でも見たような景色だつたから同じ展開に持つてこいつとしたけど、駄目でした。全否定つて・・・。

「まあなんにしても、茶々丸に何かしら感情のようなものが芽生えている事は確かにようですね」

「その感情がlikeなのかloveのかが問題だね」

「hateだと思われます」

「それが始めたのは数日前からみたいだね・・・よし、茶々丸。原因探るから、ちょっと記憶ドライブを見せてもらひよみ」

「あ、まよい。止めないと。

「あー、ハカセ。悪いんだが、それはやめてもいいのか？」

と思つたらエヴァちゃんに先をこされた。

「？ ビリしてですか？」

「ちょっと見られてはまずいものが入つていてな。お前にも超にも、もちろん他のやつにも見てほしくないんだ。魔法関係で少し、な

「まあ、いいですけど、茶々丸もその方がいいの？」

「・・・ええ、私としてもその方が助かります」

「じゃあわかりました。そつちは見ません。そのかわり他のところは徹底的に調べますよー。それで、覚悟してよ茶々丸う」

「了解しました」

「近いうちに軽く戦闘するつもりだから、いつもより頑丈にしてくれ」

「まあエヴァさんの物ですから強くは言えませんけど、あんまり乱暴にしないでくださいよ」

「大丈夫だよ、心配するな」

あれ？俺がいなくても全然丸く収まつたね？俺いらないじゃん。てゆーか全然怪しまれてないじゃん。エヴァちゃん情報あてになんねー。

その後何事も無く数十分ほどでメンテ終了。その間俺はハカセちゃん人と談笑しつつ茶々丸ちゃんを眺めてるだけだった。エヴァちゃんは漫画読んでた。

「さて、終わつたし帰るぞ、茶々丸」

「はい、マスター」

「それじゃあ僕もお暇しようかな」

「あ、ミソギさん、ちょいちょい」

帰ろうと立ち上がつたらハカセちゃんに手招きされた。口で手の動

きに会わせてちょいちょい言つてるのがすごい可愛かつた。

「何かな、ハカセちゃん」

「茶々丸のことなんですけど、これからも側にいてあげてください
「言われなくともそうするつもりだけど、どうして?」

「あの子、ロボットだから、本来なら開発者である私と主人であるエヴァさん以外の人は同じにしか感じないんですよ。優しい人格がプログラムされてるから誰にでも優しいけど、それは優しい人間の真似をしてるだけで茶々丸の行動じゃないんです」

「えーと・・・どういうこと?」

「あの子は子供と遊んであげたり猫に餌を上げたり、結構皆の人気者なんですよ。でもそれは私がもしロボットであることがばれても皆に受け入れてもらえるような優しい人格をプログラムしたからなんです。あの子がそういう性格に作られたからそういう行動をとつてるだけ」

人格をプログラムつてできるの・・・?とは思つたがなにやらそんなことを訪ねていい雰囲気ではなかつたので自重。

「皆が同じに見えるから、皆に同じ優しさを『覚えてるんです。誰に対しても特別な感情は抱かない。私とエヴァさんにだつて、開発者と主人だから従つてるだけで特になんとも思つてないかもしません。でもそれが当然なんです。ロボットなんですから」

「まあ、言つてることはわかるよ」

「けど、貴方だけは違うようですよ、ミソギさん。あなただけは特別みたいですね」

「え? それつてつまり・・・」

「はい、茶々丸はなぜか、あなたのことだけ特別に嫌つています」

「・・・・・」

・・・嬉しくない。

「もちろんそれが本当に感情なのかはわかりません。ですがもしロボットに感情が芽生えたなんてことになれば人類の歴史に名を残す大発見です。ノーベル賞ものです」

茶々丸ちゃん単品だけでもノーベル賞ぐらい余裕でいただけると思いますけど。あ、魔力とかも使われてるから無理なのかな?

「だから、それが本当に感情なのか検証するためにより多くのデータが必要となります。なのでミソギさんは出来る限り茶々丸の側に居続けて嫌われ続けてください。それが明日のロボット工学の発展につながります」

「・・・ずいぶんな要求をするね」

「あ、もちろん好かれてもかまいませんよ。少なくとも誰も同じに見られてる他の人よりは可能性あるでしょうし」

「まあいいけど。どちらにしろ側にいるつもりだつたんだし、親の許可を得たと思えば」

「そう思つてください。じゃあお願いしますね」

「おじミンギーいつまでくつちやべってるんだ、とつとと来い!」

先に部屋を出ていたエヴァちゃんと茶々丸ちゃんがもじりてきて声をかけてきた。

「それじゃあまた。何かありましたらいつでも来て下さい」

「わかった。またあそびにくるよ」

「遊びに来られても困るんですけど・・・」

よし、これで次からは堂々とここに来ることができるぞ!。

そんな感じでハカセちゃんと別れの挨拶をしてエヴァちゃんのもと

へ。

「もしかして、待つてくれてたの？」

「勘違いするな。お前に渡さなければならないものがあつただけだ。
ほら、いくぞ」

シンデレザリフだ！生では初めて聞いた！

そして建物を出てから俺に一枚の札みたいなものをさし出してきた。

「明日、あのバカのガキを襲うんだる。夜にやいつをうまく一人に
なるよう誘導したらそれに魔力をこめる。そうすれば私にその場所
がわかるからそこに行く」

「なるほど、了解。じゃあ明日の夕飯は外食にしてその帰りにでも
一人にさせるよ」

「そこんところはひとつでもいい。まあせいぜい頑張れ。じゃあな」

エヴァちゃんは素つ気なく別れの挨拶をして、茶々丸ちゃんにいた
つてはこつちを見てすらくなかった。いや、まあ、ほら、これも
親しさの証みたいなれだよ。

という訳で帰宅。若干遅くなつた事に対するネギ君の文句を聞き流
しながら明日の夕食は外食にしようと提案。（ちなみに普段はコン
ビニ弁当である。料理なんて面倒なものをしたくはない）
すると、

「じゃあ、明日は土曜日で休みなんですから、どこか一人で行きま
しょうよー。そのまま夕飯を外で食べればいいんじゃないですか？」

と、逆に提案された。

いや、なにがいいんじゃないですか？だよ、別に何もよくないよ、

とは思つたが、今日までつやむやにしていた『お願ひ』をじれつて
ことにしてればいいんじゃないか?と思ひ承諾。
こうして明日土曜日、ネギ君曰く『初デート』をする事になつた。
おー、デートの意味知つてんのか!?

1-3話（後書き）

今回の話のもとにした75時間田は原作の話の中でもトップクラスに好きな話です。ただあの茶々丸の可愛さが表現できないのが残念でした。

「ハハギセーん、ヒヒちですよーー！」

「あんまりはしゃいでると転ぶぞーー！」

とこつーと、俺はネギ君とお出かけをしていた。前回の麻帆良探索の時はタカミチがいたし、それ以降は俺がエヴァアちゃんたちの方にずっと居たせいであまり一緒にいられなかつたからだろ? が、ネギ君のテンションは最高潮である。

てゆーか今10時ぐらいになんだけばれ、ヒツから後1~2時間ぐらい外でふらりしてなきゃいけねーのかよ。辛いぞ。

「お腹いっぱいですーー！」

「そうだね、もう歩きたくないね

そしてそれから数十分後、朝食兼昼食をたくさん食べ過ぎたせいで動くのがだるくなつてきた。まだ飯時には少し早いからお店は混んでない。しかし後1時間もすれば客でいっぱいになることは目に見えている。だから先に言つておこう。ごめん。

「ねえネギ君。少しここで休憩してこいよ

「こいつて、このお店ですか?」

「うん。お腹いっぱいになつたら寝くなつて起きちゃつてね。ひつと寝てもいいかな

「ええーー！」

「ううう所で時間を消費しておかないと夜になる前に帰つてしまつかもしない。それじゃあ本末転倒だからね。不満そうなネギ君は置いといてテーブルに突つ伏す。お皿を下げるに来た店員さんの食い終わつたなら早く帰れよオーラも気にしない。おやすみー。

「おひ、ネギ君じゃーん。やつせー」

と思つたら女の子の声がした。え? ネギ君もつ誰か女の子とフワフワ立てたの?

「あ、こんにちは朝倉さん」

しかも朝倉さん! ? 2 - A の子じやん!

別に朝倉さんはそこまで好きなキャラでもなかつたけど、ここにで変な初印象は与えないほうがいい。ということどりあえず起きる。

「おはよう! もす、ミソギさん」

「大丈夫、寝てないから」

「あれ? ネギ君、その人だれ?」

「前に話したじやないです、ミソギさんですよー」

「ふうん、この人人がねえ・・・」

値踏みするような目で俺を眺める朝倉さん。うん、かわいいけどHヴァちゃんとかの時ほどの衝撃はないな。

「で、ネギ君、このはだれだい?」

「朝倉さんです。ほら、前にお話したじゃないですか、職員室に押しかけてきてインタビューされたって。その人ですよ」

「……ああ、そんなことも言つてたね」

やべえ全然覚えてねえ。ネギ君の話を適当に聞き流しそうたか？もしかすると他の子にも会つてゐる可能性があるな。あとでもう一度話を聞いておこう。

「どうもはじめまして。朝倉和美です」

「あ、どうもどうも、ミソギです」

「それって苗字ですか？名前ですか？ネギ君に聞いても教えてくれなくつて」

「え？ええと、名前だけど……」

「そつなんですか。じゃ あ苗字はなんていうんですか？」

「な・・・に・・・？」

苗字ー？そついえば今まで聞かれたことなかつたよ。イギリスにいた頃はそういう事聞きそつな人には大嘘憑きで洗脳してたし、こっちに来てからは俺の名前なんかどうでもいいよつて人ばかりと出会つてたからなあ……。

でもどうしよう、苗字も球磨川を使いまわしちやうか？でもそれだと芸がないつて思われちゃうかもしれないし……。

「えーっと、ミソギさん、でいいですか？あの、苗字聞いてるだけなんですか？」

「ちょっとまつててー今考てるからー」

「いや、苗字を考てるつて……」

「うーむ、どうするか……。安心院にして好きな人と一緒になれたGOODENDにするか、それとも財部にして後輩との純愛TRUE

EEENOにいるか、まさかの阿久根といつ禁断のBADENOにいるか……。

・・・いや、俺は何を言つてるんだろ？

真面目に考えよつ。スプリングフィールド姓にしておけば親戚という設定が強固になるかな？でもこんなことでスプリングフィールドの名前を使つたらいろんな人から怒られそうだしな。

「あの、朝倉さん。実はミンギさんには「家族がいないんですよ」「え？、うんなんですか？」

ヒ、惱んでいふヒネギ君が朝倉さんに何かを説明し始めた。

「ところよ、小さい頃に『親に、その、捨てられてしまつたみたいで……だから苗字に当たるものはもつてないんですよ」「や、そつだつたんですか……すいません、嫌なこと聞こいやつて……」

「え？、ああ……いや、気にしないでよ。僕もやつて説明するべきか迷つてたけど、ネギ君に言つてもうて助かつた」

「あの、朝倉さん。新聞にはこのことは書かないでくれると……」「もちろん、わかつてます。そんな事書いたりしませんよ」「ありがとうございます」

うむ、ネギ君の様子を見ても、つまく誤魔化せましたよーって感じがしないなあ。つてことは本気でそう解釈されるのか？……まあいいか、別に不都合はないし。

「あの、それで……ミンギさんにあつたらネギ君との馴れ初めを聞きたいくつてたんですけど……いいですか？」

「それくらいならいいけど」

「じゃあ教えてください。そこは記事にしてもいいですよね？」

「・・・まあいいけど」

この子結構団太いな。

親に捨てられた子どもが成長して、別の子どもの面倒を見てるって絶対複雑な事情があるだろ！察しろ！

・・・いや、そんな事情ないけど。

にしてもどうやって説明すればいいんだ？まさか転生がどうのとか言うわけにもいかないし、エヴァちゃんの時みたいに悪魔だからどうのこうのも無理だろうし・・・。

そもそもネギ君自身は俺と一緒にいる事の理由にはどう解釋付けるのかな。俺の存在に疑問に思うことをなかつた事にしてるから、ただいるのが当たり前つて言つ風に思つてるんだろうか。よくわからん。

ちらりとネギ君を見てもただポワポワしてるだけだ。今回は助けを期待できそうもない。

なんかもうめんどくさくなつてしまい、そもそもそこまで好きでもない朝倉さん相手になぜここまで真剣に考えなきゃいけないんだ。

「・・・いや、やっぱり人様に聞かせるようなことじゃないからやめておくよ。」めんね

「い、いえ、別にいいですよ」

「そのかわりネギ君の学校以外の私生活についてなら話してあげるよ。新聞読者もそつちの方が知りたいんじゃないかな？」

「あ、じゃあお願ひします」

とこいつとで適当な話に変えてお茶を濁す。朝倉さんも俺に嫌な過去を思い出させてしまつたとでも思つたのか、深く追求することなく俺の話に乗つてくれたのでさつきのことはすぐ有耶無耶になつてくれた。

結局その後朝倉さんが自分の「ご飯を食べ終わるまで適当な話をし続け、店を出て別れるまで少し情報を得ることができた。

麻帆良学園女子中等部に子供先生が来たといつ噂は結構広まっているらしい。ていうか朝倉さんが広めたらしい。うーん、他の生徒に広まるのは俺がネギ君の傍にいる仕事につけてからが良かつたんだけどな。最初からいたのとあとから来たのじゃあ皆の受け入れ具合も違つてくるだろうし。

まああの情報通の朝倉さんと今のうちに仲良くなれたのは良かつたかもしだれないな。これでネギ君の傍には俺がいることが広まつてくれるだろう、多分。

ていうか朝倉さん、結局俺らと飯食つてたけど、もし俺たちに会わなかつたら一人で食事だったのかな。別にいいけど女子中学生のうちからそれはちょっと寂しくないか？

それからじぱらくは麻帆良の町を見て回り、娯楽施設に行ってみたりして時間を潰すことができた。あれ以降他の原作キャラに会うことはなかつたが、それなりに楽しむことができたと思う。

そしてそろそろ彼女を呼ぶ時間だ。

「今日は楽しかつたですね、ミソギさん」

「そうだね。またこんなふつに遊ぼうね」

「じゃあ今度は僕、遊園地に行きたいです！」

「うん、じゃあ調べておくれよ」

夕飯を食べた帰り道、呑氣におしゃべりしてたるネギ君。うーん、こんなに嬉しそうなところに水をさすのは悪いと思つけれど、まあ今日は助けてあげるから許してね。

とことうことで少しネギ君と距離を取ることにする。

「僕ちゅうとトイレ行ってくるから、ネギ君はそこの公園で待つてよ」
「あ、僕もトイレ行きますよ」
「いいよいよ、待つてよ」
「え、でも・・・」
「大丈夫、すぐ戻つてくるから」
「分かりました、待つてますね」

びっくりした、まさか付いていくと言われるのは思わなかつた。男子と連れショーンとか誰得だよ。いや、女子とはできないけど。少し離れて、けれどあまり遠くに行く前にもつたお札に魔力を込める。よし、あと数分で来てくれるだろ。とりあえずトイレにでも行こうかな。嘘を付くのはよくないからね。

「ミソギさん遅いなあ

トイレに行つたミソギさんを待ちながらぼんやりと夜空を眺める。月が綺麗だなあ。丸丸つてわけじゃないけど、もつすぐ満月になつた。

「後2・3日で満月かなあ」

「正解だよ坊や。賢いじやないか」

「え、だれ?」

ただの独り言に返事が返ってきた。驚いて声の方を向くと、僕と同じ年くらいにみえる金髪の女の子が一人立っていた。

「お前に恨みはないがな。呪いをとくためにその血が必要なんだ。
悪いがもらつていいくぞ」

「え、なにを・・・」

「いけ、茶々丸」

「はいマスター」

よくわからないことを言つている女の子が合図すると、今度はその子より大きな女の人気が現れた。
え? なに? なに!?

「ほら、せいぜい抵抗しろ」

「う、うわ!」

突然女の人気が殴りかかってきた。慌ててベンチから飛び降りて攻撃を避ける。更に殴りかかるが、そこまで速くない。これなら普通に避けられるかな。

「ほらほら、得意の魔法でも使ってみたらどう?」

魔法? この人魔法関係の人なの? 思わずミンソギさんから以前頂いた魔法発動体の指輪を見る。これ、そういえば最近使ってなかつたけど、今は襲われてるし、相手も魔法使いの人みたいだし、使うべきなのかな?

「まら、隙だらけだぞ坊や」

「うぐつー」

「あ、すいません」

それに気を取られていたせいで頬を殴られた。痛い。痛い。痛い。
今まで喧嘩なんて子供の時にしかしたことはなかつたし、魔法での戦闘もほとんどしたことがなかつた僕にとつて人に殴られるというのはほんとに久しぶりだった。痛い。

何で僕がこんな目に。ミソギさん、助けて。痛い。痛い。

痛みで抵抗する気力も魔法を使う気も無くなってしまった。というより、こんなに遠慮無く相手を殴れる人を相手するのが怖い。怖い。僕にできるのは、うずくまつてミソギさんが助けに来てくれるのを待つことだけだった。

「あ? おい、まさか一発当たっただけでもう終わりか? お前本当にナギの息子か? ・・・つたく、あいつが助けられたとかいうからどんなやつかと期待してみたらこれが。つまらん」

「マスター、相手はまだ子供です。そこまで言つのは酷かと」

「知るか。ていうか、おい。誰もこないんだが」

二人が何かを言つてゐるようだけれど、僕にはよく聞こえない。せめてあの一人が会話に気を取られているうちにここから逃げよつとするが、身体が震えてうまく動かない。

「あいつがこないんじゃ仕方ないよな、うん。ここで私が飲まなきや不自然だしな。こないほうが悪い」

女の子のほうがこっちに近づいてくる。なに? 何をされるの?
そういうえばさつき血がどうとか言つてた。もしかしてこの人、吸血

鬼なのだろうか。そして僕は全身の血を吸い取られて死んでしまうんだ。嫌だ。それは嫌だ。

でもどうしよう、今から魔法を発動させて間に合うの？それに僕が使える攻撃魔法なんて高が知ってる。それが吸血鬼相手に効くの？

「ふん、この期に及んで少しの抵抗も無しか。本当にがっかりだよ、ネギ・スプリングファイールド」

駄目だ、迷ってる暇があればとにかくやつてみればよかつた。でももう駄目だ。女の子の手がこっちに伸びる。そして、

「間一髪だったねネギ君。大丈夫かい？」

とても聞き慣れた声が聞こえた。

やつべー、「冗談でトイレ行つたらまさか本当にしたくなるなんて。しかもでかい方。

ということでトイレで生物として当然の喰みを終えて足早に公園へと向かう。到着すると、やっぱ、ネギ君超震えてるじゃん。

いや、原作だともうちょっと強かつた気がしたけど・・・。村の襲撃も父親からの杖もないから父親探しモチベが低い 修行をあんまりしない 攻撃魔法とかもあまり覚えてないし実戦経験もない、みたいな感じなのかな？

まあどうでもいいけど・・・つて、エヴァちゃん完全に血吸う感じやねえか！

ダッシュで近づいてエヴァちゃんのネギ君の首に伸ばしていた手を取る。そして一言。

「間一髪だったねネギ君。大丈夫かい？」

キマッた！超かっこいい！多分ネギ君からすればピンチになつたとこに颯爽登場したように感じられただらう。別にネギ君からの評価とかどうでもいいけど、良いに越したことはないからね。

「可愛らしきお嬢さんがた、一体僕の連れに何のようつかな？」

「マスターどうしますか？気持ち悪い男が出てきましたが」

・・・えつと、それは本心じゃないんだよね？ただ親しい様子を見せると怪しまれるから、あえて突っぱねてるだけなんだよね？

「ちっ、仕方ない。今日は一旦引け。次は見逃さんぞ、ネギ・スプリングフィールド」

あ、行つてしまわれた。仕方ないので後ろで震えているネギ君に振り向いて声をかける。

「で、結局あの子達はなんだつたんだい？」

「いえ、僕にもわからないんですけど・・・なんか、僕の血が必要だとか言つてて・・・」

「ふうん、血が必要ねえ・・・」

「や、やつぱり、吸血鬼さんとかなんでしょつか・・・」

「かもしれないね。まあはつきりとは言えないから、明日学園長にでも話を聞きに行こう

「わかりました」

よし、これで明日学園長のところに言つて難癖つけて、ネギ君と一緒にいれる仕事につかせてもらえばオッケーだ。駄目つて言われても俺を疑う心をこんどこそなかつたことにしちゃえ、ただ俺がネギ君の身を案じてしているだけなんだと思つて配慮してくれるだろ。なんかこの言い方だと俺がネギ君大好きみたいなんだけど・・・ちがうからね？

「じゃあまあどうあえず今日は帰ろうか。最後にちょっと横槍が入つたけど楽しかったね」

「はいー。」

次の日、ネギ君を置いて学園長室までやつてきた。最初は色々便利だらうから連れてこようかと思つたけど、それ以上におもりが面倒

そうなのでおひてきた。もし何かあつた時に『大嘘憑き』を使うことになると思うけど、これ以上ネギ君相手に使うのもひつとかわいそうな気もするし。今更だけどな。

「失礼します」

「ああ、待つておつたよ」

お？ アポ無しで行つたから驚かれるかと思つたけど、なんか俺が来るのがわかつてたみたいだな。

「待つていたとは？」

「実は事前に、昨日エヴァンジエリンが君たちを襲撃したという報告があつての。そのことで来たんじゃろう？」

「まあ、そうですけど」

もしかして昨日付け回されてたのか？ 昨日は問題がある行動はとつてない・・・はずだよな？ 本当にトイレにも行つたし、エヴァちゃんとも無駄な会話はしてないし。

「それについては儂の不手際じやつた。申し訳ない」

「いえ、謝罪はいいんで、詳しい説明をお聞かせくださいますか？」

「ああ、それについては本人も入れて説明しよつ」

「へ？」

学園長室の奥の扉から現れたのは不機嫌そうな顔をしたエヴァちゃんと茶々丸ちやんだつた。

や、やべえ・・・いざとなつたら『大嘘憑き』を使おうと思つたけどできぬじやないか。エヴァちゃんにコレのことは知られたくないし、使つたらなんか感づかれそうだしなー。仕方ないな、これはもうノリで攻めるしかない。

「学園長！これは一体どういふことですか！？なぜこの一人がここに！？」はつ！まさか学園長もグルだつたんですか！？」

「お、落ち着いてくれミソギ君。これからその説明を」

「落ち着いてられますか！ネギ君を襲うような危険人物ですよ？なんでそんな人がこんなところに・・・！」

「大丈夫だよミソギ君。今は僕もいるからもし何かあつても僕が何とかするさ」

と、二人の後ろからタカミチも現れた。

くつ、そんな事言われたら一旦抗議を中断するしかないじゃんか。一応あの人は学園最強で通つてゐるわけだしな。

「・・・ふむ、落ち着いてくれたかの？」

「ええ、まあ高畠さんがいるなら大丈夫だと信じましょ」

あ、でもここでやめちゃつたら本当にただ取り乱しただけのチキン野郎みたいじやん。なんか恥ずかしい・・・。

「それじゃあ説明するかの」

と言つて学園長はエヴァちゃんの過去を話し始めた。まあ全部知つてるような話だつたから聞き流す。

「と、いうわけなんじや」

「へえ、そうなんですか。でもそれは僕達に何の関係もないですよね？」

「ふあつ？」

「ていうか、そんな危険人物を野放しにしておかないでください。ネギ君のような重要な人物が来るんだつたら普段以上に警戒するのは

当然ですよね？それすらできないんですか？今回の件は明らかに学園側の職務怠慢です。管理不届きです。事前に防ぐことはできなかつたのですか？もしくは僕たちに前もって知らせておいてくれればこのような事態にはならなかつたかもしません。もしあそこで僕が間に合わなくてネギ君が死んでしまつたらどうするつもりだつたのですか？死ぬまではいかなくともなにか障害が残るダメージをおつてしまつたらどう責任を取るつもりだつたのですか？まあエヴァちゃんにだつたらそれもご褒美かもしれないんですけど、それはともかく。今回の件で僕の学園に対する信頼は地に落ちました。もしかしたら他に隠していることがあるかもしれませんし、更に危険な人物が潜んでいるかもしれません。なので僕は提案します。僕を今のような清掃員ではなく、ネギ君を補佐する職務に就かせていただけませんか？今回の件で学園側の警備がザルなのはよくよく理解しました。なのでもういいです、自分の身は自分で守ります。ただネギ君が仕事中に一人になつてしまつた時に襲われないとは限りません。なので僕に護衛を含めてネギ君の補佐をさせて欲しいんですがいかがでしょう

「う、うむ・・・」

「うむ？それは了承したということですか？」

「そ、そういうことじやないよミソギ君。急にたくさん言われて驚いただけさ。ちょっと考えさせてくれないかな？」

む、タカミチめ。また変なタイミングで横槍を入れてきおつて。せつからくこつちがまくし立てよく考えさせずに頷かせちゃおうと頑張つたのに。

「ネギ君にはこいつから護衛をつけるよ。もうこんなことがないようこそ」

「いえ、それはもはや信用できません。高畠さん個人は信用していますが、学園 자체が信用できませんので。自分で守れば安心アンコ

ールワットです」

タカミチがなんか言つてゐるが拒否。それはダメだつて言つたばつか
だろ。あの長台詞ちやんと聞いてなかつたのかよ！

「ふむ・・・やつは言つてものの、ミンギ君にやらせぬ」とが出来
る仕事がのつ」

「さすがに一〇歳児よりは仕事できますよ？向こうに長年住んでた
んで英語もできますし、他の教科も中学生レベルを教えることぐら
いならできます」

ていつか『完成』のおかげで学習能力も格段に上がつてゐるんだよね。

「ん、じゃがのつ・・・」

ちつ、まだ渋るか」のジジイ。仕方ない、奥の手を使わせてもらお
う。

「わかりました、それすら無理だといつのならイギリストに帰らせて
頂きます」

「ふおつ！？いや、それじゃと魔法使いの修行が達成できんぞい」
「かまいませんよ。ただ日本で教師をやるだけならともかく、こん
な人物が側にいたのではロンドンで占い師とかに比べて危険すぎま
す。その上勤め先も信用できず、こちらの要求も一切受け入れてく
れない。話になりませんね」

「じゃ、じゃがのう・・・」

「それに、かのサウザンドマスターは魔法学校中退だそうじゃない
ですか。この話をすればネギ君も僕の案に賛成してくれると思いま
すよ」

「む、むう・・・」

「す、少し待つてもらえるかな

俺の言葉を聞いてさすがにやばいと感じ始めたのか、タカミチと学園長がコソコソ相談し始めた。

この隙に俺はエヴァちゃんの方を向き、やつた、うまく行きそうだが、と喜びの意を込めてウインク。中指突き立てられた。かわいいなあ。

「それじゃあミソギ君」

「あ、はい」

和んでたらタカミチがこっちに話を振ってきた。もつ結論が出たのかな。

「君をネギ君の補佐役に任命するよ。兄的立場の人物だつて言えば皆納得してくれるだろ? し、10歳児だからね。君の心配もわからなくはないから」

「ありがとうございます。そう言つていただけると嬉しいです。ですが・・・」

ちらりと学園長の方を向く。不満そうだな、おい。

「大丈夫ですよ、学園長。彼の人となりは僕が保証します。悪い子じゃないですよ」

タカミチが学園長にフォローしてくれる。なるほど、学園長を説得できたのはタカミチのおかげだな、ありがたい。出会った時に『大嘘憑き』使つといてよかつたよ。

「それじゃあ僕はそろそろ失礼しますね。昼間だから大丈夫だとは

思いますがネギ君を一人置いてしまつていいので

「ああ、明日はネギ君と一緒に職員室まで行ってくれ。皆には僕から説明しておくから。7時半には居てくれると助かる」

「はい、わかりました」

しかし、本当にこんな作戦でつましくいくなんてなー。まあつまくいったんだじどうでもいいか。

とりあえず一旦ネギ君と合流して、夜になつたらエヴァちゃんの家へここう。明日の打ち合わせもしなきゃいけないしね。ていうか結局エヴァちゃん一言も喋らなかつたんだけど、一体何しに出てきたんだ？

1-5話（後書き）

今回はあくまでつなぎ、次回からよりやや学園編が開始されるはずです。
まあ本格的に始める前にエヴァ関連のことを精算する必要がありますが。

部屋に戻りネギ君に今日の報告をして、じゃあ明日からはずっと一緒にですね!つてすごい喜ばれたのに若干引きながら返事をし、そんなネギ君を相手にしているうちに夜になつた。と言つてもまだ7時ぐらいたが。ちょうどビタ飯時だな。

「ネギ君、僕はちょっと夕飯買つてくるよ。適当にコンビニ弁当でいいよね?」

「あ、僕も行きますよ」

「いいよいよ、すぐ戻るから待つて」

適当な理由をつけて部屋から出て、エヴァちゃんの家に向かつ。入れてもらう時茶々丸ちゃんから嫌な目で見られた気がするがきっと氣のせいだらう。

「それで、明日のことなんだけど」

「ジジイにあんな大口叩いておいて大丈夫なのか? その翌日に坊やを守れなかつたとか」

「だから、ある程度守れなくとも仕方ない状態を作らなくちゃなんだよ。とりあえずエヴァちゃん、その見た目は変えることつてことができる?」

原作で幻術を使い見た目を変えることができるとは知つてゐるが、まだ一回も目の当たりにはしていない。一応聞いておこう。

「ああ、できるぞ」

「じゃあ、それで姿を変えておいて。出来れば大人に見える姿がいいな」

「ん？ なぜだ？」

「以前と同じ姿なのに守れないと学園長に怒しまれるでしょ。見た目が違つてればまだ言い訳もつく」

「じゃあなぜ大人なんだ？」

「僕の趣味」

「死ね！」

エヴァちゃんからはなんか汚いものを見るような目で見られたけど、今の口り姿に興奮するよりは大人の姿に興奮する方が正常だよね。・？

まあ、趣味つていうのは方便なんだけどね。漫画で見た限りでは大人バージョンより元の口り姿のほうが何百倍も可愛かっだし。

ただエヴァちゃんに本当の理由を言うわけにはいかないんだよね。だって表面上は協力的に振る舞うけど、実際にエヴァちゃんの登校地獄が解かれちゃつたら夢の学園生活が送れなくなるわけだし。だから明日の襲撃はなるべく俺の管轄外のところで失敗してもらわなきゃいけないんだよね。まあそのために必要つてわけだ。不可欠とは言わないけどあつたほうが成功しやすい要素つてやつだな。

「まあそう言わずにさ、頼むよ」

「はあ、まあ姿を変えるのは贊成だし、最もよく使つていた幻術が大人になるものだからお前の言つとおりにしてやるよ。よかつたな」「それともうひとつ、茶々丸ちゃんをこっちに預けて欲しいんだ」

「はあ？」

「嫌です」

くつ、茶々丸ちゃんには即答された。どうせやつぱり傷つく。

「まあこれには理由があるんだよ。明日僕とネギ君が夜出歩いてる

時に僕が、怪しい人影がある、とか何とか言ってネギ君をおいて猛スピードで飛び出していくからさ。その先に茶々丸ちゃんを置いて欲しいんだよ。そこで僕と茶々丸ちゃんが戦闘、エヴァちゃんとネギ君が戦闘。僕が予想外に強い茶々丸ちゃんに苦戦してる間に、あわれネギ君は血を吸われてしましたとさ、つてね

「・・・そんな作戦でうまくいくのか？」

「大丈夫だよ。学園長は俺の実力なんか知らないし、唯一この学園でそれを知ってるタカミチも僕の能力のことまでは知らないしね」

『言葉の重み』のことを知っているのは今のところエヴァちゃんと茶々丸ちゃんだけだ。『大嘘憑き』に関してはだれも知らないはず。

「なら・・・まあいいか。茶々丸は貸してやる。変なことはするなよ？」

「大丈夫だよ。万が一監視があつたら嫌だから一応戦闘もどきはするけど、怪我はさせないようにするさ」

「そうか。なら茶々丸、こつちは殺す気で行け」

「はい、マスター」

「・・・まあいいけどさ」

実際その方が自然だからね。下手に手を抜かれるよりはいい。茶々丸ちゃんが全力で来ても大丈夫だと僕の事を信頼してくれているのだろう。・・・そうだよね？

「それじゃあ昨日の札と同じやつちよつだい」

「ああ、ほら」

「ありがと。走り出す前にこれ使うよ。じゃあ今日はこのぐんで

「何だ、もう帰るのか？」

「ああ、ネギ君が待ってるからね。・・・もしかして寂しいの？一緒にいてつてお願いしてくれるなら僕は何時間でもここにいるんだ

けどなあ

「はつ、死ね」

鼻で笑われた上に罵倒された。

「副担任？」

翌日、僕とネギ君が言われた通りに職員室へ行くと、そこで待ち構えていたタカミチからそんな話を持ちかけられた。

「本当はもうしばらく様子を見るつもりだったんだけど、明後日から急に出張が入っちゃって。まあミソギ君がネギ君のフォローをしてくれるなら問題ないかと思つてね。それに、ネギ君もしづな先生から色々教えてもらつたろう？それと大して変わらないから大丈夫だよ」

「は、はあ」

ふむ、2-Aメンツとの接触はまだ先かと思ってたが案外すぐできたな。こんな事あのジジイが許すわけがないからタカミチが取り計らってくれたんだろう。感謝感謝。

ネギ君はちょっと困惑ってるみたいだけれど、まあ大丈夫でしょう。

「それで高畠さん、僕たちはどうすればいいんですか？」

「今から朝の打ち合わせ、それが終わったら教室に向かおう。紹介
ぐらいはするけれど、その後のHRは君たちに任せようかな」

「それじゃあ高畠さんは？」

「うん、とりあえず最初は僕も一緒にいたほうがいいだろからね。
今日明日と君達を見守つてるよ。でも明後日は出張に行かなきゃいけないから見てられないけど、そこは頼んだよ？」

「わかりました」

とりあえずは朝の打ち合わせ。まあ俺はただの補佐なのでそこまで
真剣に聞かなくてもいいだろ。

ネギ君はもう他の先生方と打ち解けているが俺は初対面の人が多い
のでおとなしくしておこう。

そして十数分後、とうとう2-Aへ赴く時となつた。ちよーたのし
み。

高畠先生引率のもと2-Aの教室へ向かう。原作と違つて朝倉さんが既に子供先生のことを知つてゐるから、多分クラスの皆さんも知れ渡つてゐるだろう。果たしてそれが吉と出るか凶と出るか。ま、どうでもいいけどや。

「さあネギ君、ここが君のクラスだよ」

「は、はい・・・うう、緊張します」

「大丈夫だよ、そんなに固くならないで。みんないい子だからさ
「わ、わかりました・・・」

そしてネギ君が扉を開けると、

ボフツ「うわっ」「

案の定上から黒板消しが降ってきた。ていうかネギ君、それはさすがに気づけよ。タカミチも教えてやれよ。まあ俺も教えないんだけじゃ。

「ケフケフ、いや、あははは。ひつかかつちやつたな・・・」

恥ずかしさを紛らわすために苦笑いするネギ君を見て、クラスの女子達が一斉に

とまあ大はしゃぎである。ネギ君の方に駆け寄つて色々質問しだす
女の子達。いやーほつほつほつほつほつほつほつほつほつほつほつ
の後ビヤビヤ見て見た田普通の俺が
入れと?

まあその大騒ぎの中にも例外、といふか不参加の人も結構いる。もみくちゃにされてるネギ君を横目にクラスを一望してみる。騒いでる方はめんどくさいから省略するとしても残ってる組ぐらいには注視するべきだろう。

た。目を向けたらそらされたけど。

茶々丸ちゃんはネギ君にも僕にも興味なしのようだ。どこ見てんのかわからん。ところでネギ君に何の説明もしてないけど、この二人がいて大丈夫かな？ ビビって取り乱さないだろうな。

刹那ちゃんは席から動いてはいないもののネギ君の方を見つめてる。まあアレはネギ君を、というよりネギ君の周りで騒いでる木乃香ちゃんを、といったほうが正しいだろうね。

千雨ちやんはなんかこう、形容しがたい顔をしてる。驚きと呆れと

怒りを足して2で掛けたような表情だ。

龍宮さんは興味深そうに眺めてるだけ。

超ちやんは最初ネギ君の方へ行こうとしたみたいだけど俺を見て動きを止めた。なんでだろ。

そして一番前の一番窓側の席を凝視するが・・・駄目だ、見えない。行けるかと思つたけど駄目みたいだ。まあそんな事もあるつかと対策は練つてあるので数日後には見えるようになつてるだろ。という訳で人間観察もそろそろ終わりにして中に入る事にする。ちなみにタカミチの馬鹿はニヤニヤ見てただけだった。

「はいはーい。みんな、そろそろ席に戻つてくれないかな」

大声で呼びかけると、・・・だれ?みたいなしらけた空気が一瞬流れれる、が、朝倉さんが

「あーあー、ミンギさん!あれ?清掃員をしてたんじゃあ・・・」「ああ、いろいろあつてね。僕もここでネギ君を支えることになつたんだよ。とりあえずネギ君もまだまともに自己紹介が出来てないから、席についてくれないかな?」

「ああそうですね。ほら皆ーとつと席戻るよー」

と皆をまとめてくれたので、不審者扱いされることはなくて助かつた。なぜ朝倉さんが協力的なのは謎だがここは甘えておこう。クラスの皆がひと通り席に戻つたのを確認して自己紹介を始める。

「今日からこの学校で英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願ひします」

ネギ君の模範的な挨拶にクラスの皆も拍手+歓声。

「ネギ君のアシスタントのミンギです。ネギ君は見ての通り子供だし、僕もまだまだ若造です。こんな二人が副担任になるなんて明らかおかしいと思うでしょうが、疑問や不満は僕にぶつけてください。僕もおかしいと思つてるので大歓迎です」

俺のよくわからない挨拶に多くの人が首をかしげながらもパラパラと拍手してくれる。

まあそれでいいさ。今のはたつた一人に向けた挨拶だからな。その一人だけは僕の言葉に他とは違う反応を示してくれたし（ネギ君の時は嫌そうにしながらも拍手していたが、今回はそれをしないで俺のことを凝視していた）、まあ成功だろ？。これで実際に不満を言いに来てくれればしめたものだ。

「うん、というわけで、副担任になつてもらつたネギ先生とミンギ先生だ。彼らはイギリスの学校を卒業してるから頭はとてもいいよ。皆、仲良くしてあげくれ

それは転校生がきた時のセリフじゃないのか？とでも新任の先生を生徒に紹介するときの言葉とは思えん・・・。

1-6話（後書き）

またエヴァとの会話に丸々1話とかけてたらこいつまでも学園編に入れないのでちょっと駆け足氣味です。
今回もそこまで早いわけじゃないですが、このぐらいのテンポと以前までのテンポ、どっちのほうがいいですかね？

自己紹介や質問コーナーを軽く設けた後、タカミチの号令の元授業が始まったわけだが、その間はネギ君には仕事があるが俺には何も仕事が無いので少し考え方をすることにする。

原作とは違う点がいくつかあったよな、それについて問題がないかどうか検証していこう。

一つ目、トラップが黒板消しだけと非常に軽かつたこと。これは先程雪広さんが『トラップをあれだけに食い止めといてよかつたですわ・・・』とかつぶやいてたから多分ショタ先生が来ると聞いて嫌われたらいけないと必死で食い止めた結果なのだろう。黒板消しくらいなら歓迎の範囲内だから許可したのかな。

二つ目、黒板消しが何の抵抗もなくネギ君の頭に落ちてきたこと。俺に依存しすぎるせいで障壁の常時展開すらしてないってことかな。まあこの子が強からうが弱からうがどうでもいいけど。

三つ目、神楽坂さんのネギ君への態度。これが一番大きいかな？初対面でネギ君から変なことも言わせてないし、黒板消しを一瞬止めたりとかもしてないから普通の子供だと思つてるな。だからさつきも普通に皆と騒いでたし、タカミチが担任じゃなくなるわけじゃないからそこまで反対もしていない。

これ、どう影響するかな。この子は俺のハーレム要員じゃなくてネギ君にあげるつもりだからあんまり原作と変わられても困るんだけど。

「ミソギさん？どうかしましたか？」

「ん？あ、『じめん』じめん、ちょっとぼーつとしてたよ

「もう、しつかりしてくださいね。授業終わっちゃいましたよ

「まじでか」

せっかく一番後ろにいるんだから珍しく眞面目に授業を受けているエヴァちゃんの後頭部でも眺めてようと思つたのに出来なかつた。残念。

ちなみにネギ君はエヴァちゃんや茶々丸に對して無反応だ。気づいていないのか、はたまた気づいてはいるが無視しているのか、まあ後者ができるほどの度胸はないだろうな。

「ネギせんせー、ミンギせんせー」

と、授業が終わつて何やら雑談に興じていた生徒たちの輪の中から一人の女生徒が出てきてこちらに声をかけてきた。

「えつと、たしか佐々木まき絵さんですよね。どうかしましたか？」

「今日ですか？はい、空いてますよ」

「そつかー、ならよかつた。それじゃあお仕事がんばってねー」

「え？あ、はい。・・・あれ？なんで予定聞いたんですか？」

「いいからいいから。いやーそれにしてもネギ君つてほんと可愛いねー」

「ふええ

「ちょっとまき絵さん！いつまでネギ先生を独占してこいつもつりますの！」

「ふえええつー？」

おー、もみくぢやにされとる。にしても今日の予定を聞くつてことは・・・あれかな？ネギ君の歓迎会。一応俺の名前も呼んでくれたつてことは俺も参加していいんだよね？

てゆーか俺は別に先生つてわけじゃないんだけどな。でもだとすると俺つてなんなの？

その後、職員室で担任としてのお仕事をタカミチの指導のもと頑張つてるネギ君をおいてなんか広場みたいなところに行く。原作での場面を頑張つて思い出して、のどかちゃんが落っこちてくる（予定の）場所をこないだの一人麻帆良探索の時に見つけておいたのだ。のどかちゃん可愛いからネギ君にあげたくないし、なによりあのアーティファクトが厄介だ。人の心読むとかホントやめて欲しい。という訳でネギ君とのどかちゃんは絶対に契約させちゃダメなわけよ。なので俺がフラグ立てようと思います。まあ彼女は男性が苦手らしいので無理かもしれないが、それでもネギ君にフラグを立てせりのだけは回避しないと。

待つこと十数分。ようやく本を大量に抱えたのどかちゃんが階段を下つてくる。ていうか今思つたんだけど俺が余計なことしなければここでのどかちゃん普通に落っこちるんじゃない？ そうすれば入院とかなんやらいでネギ君との接触も減るからその分フラグが立てづらく・・・つて嘘々。さすがに助けますよもちこん。

「あっ、れやああああああー！」

と、そんな事を考えているうちにのどかちゃんが足を滑らした。ダッシュで駆け寄つて受け止める。めだかちゃんだつて音速で動けるんだから悪魔ボディの俺なんかはそれ以上に動けるし、頑丈だからダメージも特にない。余裕で間に合つた。

「大丈夫？えつと、宮崎さんだよね？」

「う？ね、ネギせんせーの隣にいた人？え？なんで、私・・・」

隣にいた人つて・・・どんな認識だよ・・・。まき絵ちゃんは名前で呼んでくれてたけどもしかしてクラス全体の認識としてはそんな感じなのかな。

「うん、ネギ先生の隣にいた人だよ。そこに座つてたら宮崎さんが落っこちてきたから、怪我したらいけないと思つて受け止めたんだけど」

「そ、そうだつたんですか・・・すいません、私失礼な言い方を・・・」

「別にいいよ、どうせ僕なんておまけみたいなもんだからね。ビックリマンチョコを大人買いした時の余つたチョコみたいな存在だもんね・・・」

「ああつーすねないでください、私はチョコ好きですから・・・えつと、みそじ・・・先生？」

「・・・うん、フォローありがとう。でも、僕の名前はミソギだから。それだと30歳つてことになっちゃうから」

「すつ、すいませんミソギ先生！」

「あはは・・・まだ10代だからその間違われ方は辛いよ。それで、身体は大丈夫？どこか傷んだりしない？」

「あ、はい。おかげさまで」

「ならよかつた。にしてもこの量の本を一人で運ぶんじゃ大変だろ。僕も手伝つよ」

「い、いえ、そんな・・・」

「こういう時は変に遠慮してくれないほうが嬉しいんだぜ」「じゃ、じゃあお願ひします・・・」

思つたよりも普通の対応だな。さすがに助けてくれた人を邪険には

できないかな、一応俺も先生みたいなものだし。

「とにかくこの本は富崎さんの私物？」

「いや、図書館で借りてきた本です。返すのを忘れてて……」

「そりなんだ、本が好きなんだね。僕も前はよく読んでたけど、最近忙しくてあんまりそんな暇がなかつたんだよね。今つてどんな本が流行つてるのかな？」

「えつと、こいつ本とか……」

「へえ、おすすめの本があつたら今度教えてくれない？」

「あ、はい。いいですよ」

仲良くのどかちやんとお話ししながら本を運ぶ。あれ？ 男性恐怖症どこ行つた？

「せういえばミンギさん」

「ん、なに？」

「さつき10代だつて言つてましたけど、ミンギさんつて何歳なんですか？」

「あ、あー。一応18だけど、そつか。子供先生の手伝いつて言つてるのにその手伝いもこんな若造じや意味分かんないよね」

「いえ、そういうことじやなくて……」

「じゃあ、もしかして20代だと思つてたとか？」

「いえ、そうでもなくて……すくなく大人に見えるのに、あんまり違わないんだと思つて……」

「あはは、たしかに4歳つて言つたらあんまり変わらなく思えるけど、10代の4歳つてのは大きいと思うよ。ほり、ネギ君だつて10歳だから富崎さんと4歳差だし」

「や、そりですよね。大きいですよね」

とまあこのよつて最後にはのどかちやんから話題を振つてくれるく

らいにまで打ち解けることができた。

もちろん年齢に関しては適当だが。この世界にきてからだつたらまだ数年しかたつてないし、生前も含めたら20ははとうに越してゐるし、そもそもこの体の肉体年齢は多分転生してきた時点で数千歳だと思う。そんな事馬鹿正直に言えるか！

その後何事も無く本を目的の場所まで運び終えたところ、

「あ、もうこんな時間・・・ミソギ先生、ネギ先生のところに戻つてあげてくださいね」

と言い残して去つていった。

そろそろいい時間だから多分そろそろ歓迎会が始まるんだろう。じやあ言われたとおり俺もネギ君のところに戻らうかな。

俺がネギ君の元へと戻つたところでタカミチが本日の仕事の終了を告げた。多分俺が帰つてくるのを待つてたんだろうな。
早速帰ろうとするネギ君に、明日の説明があるから2-Aの教室まで来て欲しいと告げるタカミチ。やつぱりお前もグルか。でもその説明は不自然すぎるだ。

まあちよとアレな子であるネギ君はその言葉に疑いもせず付いて行け、

「……………ネギせんせー & ネギせんせー……………」「」「

鳴らされたクラッカーと生徒たちの言葉によつて歓迎された。
よかつた、俺の名前も呼んでくれて・・・正直ドツキドキだったよ、
無視されたらどうしようつて。

早速連行されていくネギ君を見送りながら、どつか適当に落ち着ける場所でもないかと周囲を見渡すと、エヴァちゃんと茶々丸ちゃんを発見。でもタカミチがいる前であんまり仲良くするのもなあ・・・。

「あの」

そう悩んでいると横から声がかけられた。

「ん、えっと、長谷川さんだよね?」「あ、はい。もう名前覚えたんですか?」「うん、生徒の顔と名前を一致させるのは教師の義務だからね」「教師じゃないけど。

「それで、なにかな？もしかして歓迎会なのに一人寂しく呆けてる僕がかわいそうできてくれたとか？それなら嬉しいけど、僕は高畠先生と適当にだべってるから皆と騒いできていよ」

「あ、いえ、そういうわけでは……それに高畠先生ならあそこでもう生徒に捕まっていますよ」

「え？」

と言われて指された方を見ると、タカミチが神楽坂さんに絡まれてた。原作と違つて変な姿を見られてないからあの子も積極的に話しかけてるなー。うんうん、いいことだ。

じゃなくて。

「あはは・・・あれだと僕が一人ぼっちだから・・・うん、話し相手になつてくれるとい嬉しいかな」

いやまあ元々タカミチとおしゃべりなんかするつもりはさらうねーけどな。タカミチが自分のことで手一杯なら、見張られる心配もないで遠慮無くエヴァちゃんたちのところに行くつもりだつたし。まあ千鶴ちゃんがいてくれるなら十分だけね。

「はい、それは構わないんですけど・・・一つ聞きたいことがあるんですけど」

「聞きたいこと？ああもしかして、なんであんな子供が先生に、つてこと？」

「ええ、まあ」

「やつと聞いてくれる人がいたかー、良かつた良かつた。もしかして日本ではこれが普通なのかと思つてドキドキしてたところだったんだよ」

「え？」

最初の自己紹介の時わざわざ意味が分からぬ様な言い回しをしたのは千鶴ちゃんの質問をさせるためだからね。そりやまあ聞いてくれるかドキドキだよ。

あとは千鶴ちゃんが好きそうな言葉を並べ立てて、俺を味方だと思わせて、そしてその後あわよくば……。

「だつて普通なら疑問に思つもんね、10歳が先生つて労働基準法は大丈夫なの、とか、私達の大事な中学生活をこんな子供に任せて大丈夫なの、とか」

「まあ、たしかに」

「だから生徒がネギ君とか高畠先生のことにおしかけて迷惑かけたら申し訳ないから、僕のところに来るようひと言つておいたのに、誰もこないんだもん。いや一びっくりだ」

「……やつぱり、ここにいる人達皆変ですよね」

「あはは、自分の生徒のことをそんな風に評価することはできないからなんとも言えないかな……けど、長谷川さんみたいなまともな子もいてくれたみたいでちゅうと安心だよ」

「ほ、本當ですか？」

「うん……と、話がずれた。えっと、なんで子供が先生をやつてるかだよね。まあなんだかんだ言つてたけど実は僕も詳しい事情は知らないんだよ、ごめんね」

「あ、そなんですか……」

「ネギ君のお父さんが業界では有名な方でね、その「ネギで」で教師をやることになつたつてのはわかつてんんだけど、それ以上のことは何も。ネギ君も僕もお偉いさんに言われるがままここにきたから。あ、もちろん大学を出るのは本當だよ」

今回は千鶴ちゃんに好かれたいから適当じゃなくてそれなりに筋の通つた答えを返してあげる。いやまあ筋も何も大嘘なんだけだ。

大学を出たのも本当じゃねーよ。

「ところで・・・あそこにいる縁髪の子、絡繆さんって・・・もしかして口ボットだつたりする?」

茶々丸ちゃんを「そり指をして尋ねる。話題を変えて雑談を挟むことで千鶴ちゃんの意識を別の方に向けるとともに、好感度を上げようところ素晴らしい作戦だ。

「・・・ええ、多分、そうです」

うんざり、みたいな感じで答えてくれる千鶴ちゃん。

「うつそ。自分で聞いておいてあれだけビ、口ボットが中学生つて・・・えー、冗談だよね?」

「いえ、本当にあいつは口ボットです・・・やっぱり、外からきた先生ならわかつてくれるんですね」

「え、なにが? いや、彼女が人間っぽくないってことならだれでもわかると思うけど」

「いえ、気づかないんです、だれも。仮に気づいてたとしても、突つ込まれないんです。口ボットが中学生やつてることに」

「う、うーん。それはもはや大らかとかそういうレベルじゃないよね。でもそれって、クラスメイトに対して、あなた口ボットだから学校来ないで、なんて言えないからただ黙つてるだけじゃないの?」「そうじゃありません。そもそも、この麻帆良って町はおかしいんです」

「といつと?」

「麻帆良の外だつたらノーベル賞でもオリンピックでも簡単にモノにできそうな奴がうじやうじやいるし、それに対して疑問に思う人もいない。それが普通だつて思い込んでるんです」

「まあ確かに本当にロボット中学生なんものが作れるんならノーベル賞なんて余裕だよね」

「でも、そのことを指摘しても誰も異常に気づかない。それどころかおかしいのは私だとか言つてきて……くわつ」

「は、長谷川さん？」

「あ、す、すいません」

「いや、別に気にしないけど、そつか。麻帆良に生まれて麻帆良で育てば麻帆良が普通だつておもちゃうわけだね。けど長谷川さんはそうは思えない」

「はい」

「なるほど、たしかにそれはちょっときつこね。ストレス溜まりそう」

「まあ、もう慣れましたから」

「そう、でも僕は君が間違つてないってことはわかってるから、もし今度そういう文句が言いたくなつたら僕のところにおりで。話しが相手ぐらにはなれるし、僕も生徒からそういう話をふりれるようになれば嬉しいからさ」

「……わかりました」

一瞬胡散臭げな表情をしたけど頷いてくれた。まあまだ来たばっかの教師に全幅の信頼なんか置けるわけないよね。じやあそろそろ失礼します、と言つて離れていった千鶴ちゃんが独り言で

「なんで私あんな事まで話しちまつたんだ……？」

とか言つてるのが聞こえる。さすがデビルイヤー、聞こいつと思えば色々聞けるな。

まあツカミとしては良かつただろ。怪しい教師からなかなか話のわかる若い教師ぐらにはランクアップしたんじゃないだろうか。最

初はそんなもんでいいこと。

「あ、あの・・・」

と、そんな事を考えていると横から声がかけられた。

「あ、富崎さん。わっかぶりだね」

「あの、さつきは危なことこころを助けていただいた上、本まで運んでもらって、その、これ、お礼です」

とこいつて図書券を手渡された。

お？おお？おおおお？？

これはあれだよね？本来ならネギ君にこいつてるイベントだよね？それがこっちに来たってことは・・・

これはもしかすると初めてわかりやすいフラグが立ったかもしけないぞ！助ければオッケーとかのどかちゃんちよれー。

「ありがとうございます富崎さん。でもさつきも言つたとおり僕、最近の本には疎くてね。良かつたら今度、この券で買う本と一緒に選びに行かない？」

「え、えええ！？」

できるだけ心の中の動搖に気づかれないように落ち着いて誘つと、帰つてきた答えは悲鳴だった。

・・・あれ？

ちょっとすいません、と言つて急いでのどかちゃんが後へ退散し、そこそこちらりの様子を窺つていた夕映ちゃんとハルナちゃんのところへ駆け寄つた。

本来ならこの距離では会話を聞くことができないが、デビルイヤーのおかげで聞きとることができた。

「ど、どじょうゆえ、ハルナ～」

「う、うーん、これはちょっと難しいねえ・・・」

「のじか、ここは勇気を出すべきです！」

なんだ？デートみたいで恥ずかしいことか？いやー、初々しくていいねえ。

「で、でももし途中で怖くなつて逃げちゃつたら失礼だし・・・」

「その時は、所詮一時の気の迷いだつたということです。それなら別に構わないですよ。私達でフォローしますから」

「まあそれくらいはするけど・・・やつぱりネギ君にしどかない？あつちならラブの気配がちょっととするしさー」

・・・ん？なんか雲行きが怪しくなつてきたぞ？

「ダメです！ネギ先生が怖くないのは子供だから当たり前です！それより今はなぜあつちが怖く感じなかつたかを探るのが優先です！」

「そ、そんなのいいよお・・・」

「のじか、将来もしいい人と出会つた時に男が怖いから無理でしたでは話にならないですよ？社会に出てからも苦労するでしょう。男と隔離される今のうちに何とかしておぐべきです」

「まあ明らかに普段ののじかなら怖がつてゐるような相手に対してなぜ普通に接することができたのか。これが解明できれば克服の日も近いよね」

「うう・・・」

「いいですか？これはあくまで練習です。もし何が失敗しても私達でフォローするです。だから気兼ねなく頑張つてくるですよ、男と二人で買い物なんて出来れば大躍進です」

「ま、深く気にせずもつと気楽に。そもそも向こうに立つては單な

るお礼なんだからさ。断るのもなんだか失礼だし、一回だけ頑張つてみれば？ダメだったらダメでそれでいいからさ」「わ、わかった……やつてみるよ」

…………
あ、のどかちゃんきた。

「わ、わかりました。じゃあ、今度のお休みの時に、その、本屋さんにも、あの、行きましょう……？」

「……うん、わかった。楽しみにしてるね」

「じゃ、じゃあ、それでは」

去つていいくのどかちゃんを田で追いながら考える。

ああ、単なる練習か、男性恐怖症克服のための。はは、なーんだ。てゆーかパルさん、ネギ君に対してラブを感じたって言いました？え？まだフラグ潰しきれてない？俺の方には一切立つてないのに？もう泣きたい。

1-8話（後書き）

某動画サイトでネギま！？の一挙放送を見ました。
改めて見ると一部の設定は原作よりいいんじゃないかと思いました。
あの設定なら一部キャラが非常に動かしやすくなるんですけどね、
刹那とか特に。

楽しい時間はすぐす“ぱる”。あの後ハカセひかるやその周りにいた超ちゃん達とおしゃべりしたり、チア部の3人や散歩部のちびっこたちに絡まれたりしていたらあつという間にお開きの時間になってしまった。

と、その前に。

「神楽坂さん」

「はい？なんですか、ミソギ先生」

やるべれいじをやつておいつ。やつ思つてクラスメイトとおしゃべりしていた神楽坂さんに声をかける。

「これ、さつき高畠先生から預かつたお手紙。仕事が急に入っちゃつて直接渡す時間がなくなつちゃつたから僕が渡してくれつて頼まれたんだ。はい」

「え！た、高畠先生からの手紙…？」

僕が差し出した手紙をひつたくるように奪い、中身を確認する神楽坂さん。

「なーなー、なんて書いてあつたんー？」

「あ、ちょー！だめだめだめ！誰にも内緒つて書いてあつたんだから

！」

「えー、なんやいけずやなー」

話しかけてくる木乃香ちゃんにも連れないと、だがその表情は緩みきつている。

まあ想い人から

『君にどうしても伝えたい事があるんだ、けれど誰かにそれがバレたら問題になってしまふから一人きりで会いたい。今夜 時に×で会えないだらうか? できるだけ皆には内緒で頼むよ』

なんて書かれた手紙をもらつたらそりや有頂天だよね。
もちろん手紙は俺が偽装して作ったものなわけだが、まあ喜んでもらえたみたいでよかつたよかつた。

「パ、パーティももう終わりの時間でしょ? 私寮に帰つてシャワー浴びて着替えてくる!」

「あ、ちょ、アスナー。・・・もう、全然話聞いてくれへん」

「えつと・・・あの子はどうしちやつたのかな? ずいぶん嬉しそうだつたけど。手紙の内容わかつた?」

「見えへんかつたけど・・・多分補習のお知らせとかそんな感じやないかなー」

「・・・補習つて喜ばしいものだつたつ? そうじやなくたつて僕が学生の頃は教師からの手紙なんて一種の恐怖の手紙みたいなものだつたのにな」

「あははー、どうせ先生もすぐには氣づくと思つから言つちゃうんやけど、実はアスナつて高畠先生のことが好きなんよ。だからたとえ補習でもあえて嬉しいんやつて」

「それはまた結構な趣味してるね。たしかに高畠先生は男の僕から見てもかつこいいぐらいだけど、中学生の趣味とは合わないと思つんだけどなあ」

「せやねー、なんでなんかなー」

そして神楽坂さんがいなくなつてフリーになつた木乃香ちゃんおしゃべりすることもできた。いやー、はんなりした女の子つていい

ね。はんなりつてびつこつ意味かは忘れたけど。

「よし、それじゃあネギ君。そろそろ僕たちも帰ろつか」

「はい、ミソギさん」

あれからしばらく経ち、ひとりふたりと生徒たちが教室から寮の自室へと戻つていき、残つている子も後片付けの段階に入つていて、まあ委員長が残つた子たちに片付けを強いているだけだが。

もし彼女が最後まで残つていなかつたら明日この教室がどんな状態だつたかは想像に難くない。ありがとう委員長。

もちろん俺たちも手伝いを申し出たんだが、主役のお一人に後片付けをさせる訳にはいきませんわ、と断られてしまった。ネギ君一人ならそれでも手伝うと言い張つただろうが、別に俺はそんな事しなくていいならしたくない。お言葉に甘えて帰らせてもらうことにした。

「で、ネギ君それ本当に持つて帰るの？」

「あ、はい。せっかくいいんちよさんのがぐださつたものなので」

「いや、それにしてもすごいよね。なんで半日足らずでこれが作れるんだか・・・置く場所あるかな」

「あ、駄目なら捨てますけど」

「いや、それはもっと駄目でしょ。大丈夫だよ、びつかしらにおけると思つから」

先ほどの歓迎会の時に委員長からもうつたらしい銅像をびつやつて

運ばつか思案してゐようだ。まあこれくらいなら俺が持てるから持つてあげよう。

ていつかネギ君、生徒からもうつたものを簡単に捨てるとかいつちや駄目だろ。けどこの子なら俺が捨てるって言つたらためらはなく捨てるだらうな、まあそれが便利だからいいんだけど。

そんなこんなでネギ君と俺は寮に向かつて歩いてゐるわけだが、このまま帰つたらエヴァちゃんに怒られる。という訳で人通りのない道までついたところでもうつたお札にこいつそり魔力をこめ、打ち合わせ通り立ち止まつた。

「？ どうしましたミンギさん

「いや、今向ここの林のほうからなんか妙な気配がしてね」

「え！ そ、それってもしかしてこないだの・・・」

「かもしれない。様子を見てくるからちょっと待つてて」

「は、はい・・・」

よし、それじゃあダッシュでゴー。

結構な速さで走つたので30秒ほどで茶々丸ちゃんの待ち構えるところまで辿りつけた。ちょっとネギ君から近いような気もするけどまあいいでしょう。これくらいの距離ならここの状況も探るひとつと思えば探れるから万が一の時には妨害できるし。

茶々丸ちゃん数メートル手前で立ち止まると、茶々丸ちゃんが一礼して一言。

「ほんわかミンギ先生。よく来てくださいました」

「――」

万が一の監視を欺くための言葉だといふとはわかつてゐ。だがそ

れでも俺はその言葉に感動を抑えることができなかつた。

あの茶々丸ちゃんが俺がきたことを歓迎してくれるなんて……！

「……何二ヤーヤと笑つてゐるんですか？」

「あ、ああ、失礼。それにしても昨日の今日で一体何のよつかな？」

「はい。先日は遅れを取りましたが、今日は満月。前回の借りを返させてもらひにきました」

「へえ、けどそれにしては一人足りないと思うんだけど？」

「マスターは力を取り戻してからここに来られますので、それまで私がお相手致します」

「力を取り戻す？？？まさか！」

驚いた俺が後ろを向き、ネギ君の方に行こいとした瞬間、頭の真横を結構なスピードで拳が通り抜けた。

「よそ見をしていてよろしいのですか？次は当りますよ」

「くつ・・・・君を倒さなきや行かせてくれないつてわけだ」

「はい、マスターの邪魔はさせません」

「じゃあ、悪いけどとつと終わらせるよ」

「小さい子ども相手に本気を出すのは躊躇われますが、貴方相手ならばそのような気も起きません。全力でこころ・・・・いえ、倒しに行きます」

「ああそう。けど僕は生徒相手に本気が出せるほど冷酷な人間じゃないからね。且一杯手加減してあげるから本気でかかつておいで」

「という俺と茶々丸ちゃんによる茶番劇が終了し、時間つぶしのための戦闘が始まったわけだが、戦闘中ならボディタッチとかが1回や2回あつても仕方ないよね。さて、楽しむとするか。

ミソギの合図をつけ現場へ向かうと、ちょいと並んで森の方に置いた茶々丸の方へ駆けていくところだった。

これで二人きりだ。茶々丸はいなが前回のあの情けない姿を見る限り警戒にも値しないだろう。まったく、なんであんなガキがナギの息子なんだ。全然似てないじゃないか。せいぜい顔が似てるぐらいいだ。

まあいい。とつとと面倒事はすませて自由の身になるとするか。と、その前に幻覚の魔法だつたな。

「やあネギ先生、こんちわ」

「え？ は、はい。こんちわ・・・えつと、どなたですか？」

気持ち悪いぐらい精巧な自分の銅像に寄り掛かっている坊やに声をかける。そういうえばこいつ教室でも私に何の反応も示さなかつたが、もしかして気づいてないのか？ 本当に間抜けなやつだな。

それに今もこの姿が私だと気づいてないようだし、まったくミソギの奴め、もう少し教育しておけ、これじゃ全く面白くないぞ。

「おやおや、もうこの間のことを忘れてしまつたのか？ そんな弱い印象しか『えられなかつたとは残念だな

「え、・・・じゃあ、まさか、この間の吸血鬼さんですかー？」

一転して恐怖の表情を浮かべている。戦つ氣がまるで見られないな。まるで助けを求めるかのように逃げ腰で周囲をキョロキョロして、

敵を目の前にしてずいぶんと余裕じゃないか。

「その通りだよネギ先生」

「でも、じゃあミソギさんは何を追つて・・・」

「はつはつはつはつは！あいつなら間抜けにも私が用意した囮の方へ行つてくれたよ」

「そんな・・・」

「ふん、出来の悪い従者を持つと苦労するなあ。まあグズ同士でいいコンビだよ」

「・・・」

「・・・ん？雰囲気が変わつたな。さすがに怒つたか？まあ楽しませてくれるなら何でもいいが。

そして坊やはおもむろに魔法発動体である指輪をこじりひたに向けて言い放つた。

「・・・訂正してください。ミソギさんは従者でもグズでもありますん！僕の一番大切な方にそんな事を言つ人は、たとえ吸血鬼さんでも許せません！」

「・・・気持ち悪いなこいつ！」

「それどころか僕が何度も従者にして欲しいってお願いしても、さすがに男はなあ、とか言って断られちゃうし、お願いを聞いてくれるつて言うから従者にして欲しいってお願いしようと思つてゐるのに、なんだかんだ理由をつけてお願ひを聞いてすらくれないし・・・」

「・・・」

何だこいつ。本格的に気持ち悪いぞ。

いきなり自分の世界に入つてブツブツと気持ち悪いことを呟いている

「こいつを見ると、本当にこいつがナギの息子なのかといつ疑問がますます大きくなってきたぞ。

「おい。死にたいならこつまでそうしてもいいが、そうじゃないならいい加減戻つて来い」

「はつ！す、すいません・・・とにかくミソギさんを馬鹿にするのは許しません！」

「ほう、許さないならどうするんだ？」

「とりあえず貴方を捕まえます！話はそれからです」

「はつ、お前にそれができるのか？」

「やつてみなくちゃわかりません。ラス・テル マ・ステル マギ ステル 風の精霊11人（略） 魔法の射手・戒めの風矢！」

おつと、いきなり仕掛けてきたな。とりあえず手持ちの魔法薬で打ち消したが、よく考えたらこの魔力が大幅に封じられてる状態で茶々丸なしで戦うのは無理があつたか？

1回目があれだつたからつてさすがに舐めすぎたか。まあだからどうというわけではないが。

魔法戦で不利なら接近戦でとつとと方を付けてしまえばいい。

「はじめましたか！でもまだこれからです！ラス・テル マ・ステル マギ「おらつ」ぎやうつ！」

呪文詠唱される前にとりあえずぶん投げておいた。加減は一応したはずだが5mぐらい吹つ飛んでつたな。まあそこまでダメージはないだろ。障壁もあるだろうしな。

「え？い、今のは・・・」

「こつちは魔法が使えんからな。本来なら前衛の仕事だがまあ仕方ない。ほら、続けるぞ」

そして数分後、やはりというかなんというか、ここには格闘戦はからきしのようだな。無詠唱魔法も幾つか使えるようで思ったよりは手こずつたが、さすがに何度も投げられて殴られて蹴られて体力が尽きてきたらしい。ふつ飛ばしたきり起きてくる気配がない。まあ頃合いか。あんまり長く遊んでいても茶々丸が心配だからな、とつとと血を吸つて戻るよ。

倒れ伏している坊やに近寄り、血を吸おうと屈み込んだその時

「ちよ、ちよとあんた！ なにしてるの！？」

突然叫び声が聞こえた。

ミソギのやつ、人払いの結界は自分がするから任せとけとか言いながら全然ダメじやないか。これは後で仕置きをする必要があるな。そんな事を考えながら乱入の方を向き、その人物を確認する。

「そこ」で倒れてるのつてうちのちびつ・・・ネギ先生じゃない！ ちよっと大丈夫！？」

「神楽坂明日菜か・・・」

「へ？ なんであんた私の名前・・・」

おっと、そういえば今は大人の姿だつたな。私がエヴァンジェリンだとは気付かんだろう。まあどちらにしろ記憶を消すんだから特に幸運だとも思わんが。

「とにかく！そいつから離れなさい！今放り投げてたわよね！
？私見てたんだから！」

私のことを不審者とでも思つたのかこちらにつかつかと近寄つてくる。

まったくめんどくさい。くそつ、ミソギなんかに頼らず自分で結界をはつておけば良かつた。封印されていて魔力が少ないからつてケチケチするものではないな。

まあ今は満月、多少は魔力も戻つてるので記憶消去の魔法ぐらい朝飯前だ。結界よりは消費魔力も少ないしな。

「リク・ラク ラ・ラック ライ「魔法の射手！」なつ！？」

「いまだ！こっちです、神楽坂さん！」

ちつ、油断した。神楽坂明日菜に気を取られすぎて坊やがノーマーケだつた。

突然攻撃してきた坊やに驚いてモロに攻撃を受けてしまつた。まあ攻撃 자체は障壁があつたのでダメージは殆ど無いが、その隙に神楽坂明日菜を連れて逃げられてしまつた。

ミソギが走つていつた森の方へ逃げ込んだようだが、もしあいつと合流でもされたら厄介だな。

あいつも私と戦う気はないだろ？がさすがに坊やから直接助けを請われたら無視は出来まい。その前に追いついて方を付けるのがいいだろうな。

それにしてもあれだけ元気だとは。先ほどの消耗はブラフだつたのか？ふふふ、面白くなつてきたじやないか。

・・・だが、ミソギが結界をサボつたせいで面倒な展開になつた事実は変わらんぞ。戻つたら覚えていろよ・・・。

「くつくしーいやー誰か美少女が僕の尊でもしてるのかな。どう思
う?・茶々丸ちゃん」

「・・・・・」

「わかった、ごめん、ごめんなさい、謝るから。謝るからその対悪
魔用魔力暴走誘発弾の入ったロケットランチャーを構え直すのはや
めで。さすがにそれは僕も死んじゃうかもしれないから」

「・・・・・」

ちよつと[冗談を言つただけですぐ怒るのはやめて欲しいよね。いく
ら手足じゃソシ「ミミ」ができるからつてすぐ銃器で斬しにかかるの
はよくないと思つ。

ちなみに今俺と茶々丸ちゃんの距離は50㍍ぐらいある。
いやー、近距離でボコスカ殴り合つてちよつとした「」褒美状態にな

るのかなんて期待してたけど全然そんな事はなかつたね。まさか開始早々どこからか銃器を取り出して撃ち殺しに来るとは思わなかつたよ。

しかもなにやら悪魔相手に超有効な武器までどこからか仕入れてきつたらしい。まあその使用については必死の懇願でなんとか抑えてくれてるけど、今みたいに変なことを言つたりこの距離を埋めようとするとすぐ構え出すので何も出来ないのだ。

・・・まあ50㍍なんて一瞬で詰めようと思えば詰められるし、対悪魔用魔力暴走誘発弾に関してはくらつたとしても大嘘憑きがあれはどうにかなると思うけど、それをしちゃうと茶々丸ちゃんに本格的に嫌われてしまつかもしれないからやめておく。

それにほら、まあなんというか。

「美少女に撃ち殺されそうになるつて、なんかいつ、色々とくるものがあるよね！ああ、楽しいなあ！」

「・・・・・・・・・・・・」

「けどその口ケットランチャーを構えるのはやめてくださいー！」

ちなみに感想の返信で書いた、今後出す予定の主人公のことのが好きなキャラってネギ君のことじゃないですよ。ちゃんと女の子で出す予定です。念のため。

・・・まあ需要があるならネギ君でも構いませんが。

「はあ・・・はあ・・・」ここまで来れば少しは安心かな・・・?
「はあ・・・はあ・・・ちょっと、ネギ先生? 一体どうなつてんの
よ・・・さつきの女人つてなんなの?」

吸血鬼さんにやられそうになつたところを聞一髪逃れられた僕は、
その切っかけを作ってくれた神楽坂さんを連れてミソギさんが走つ
ていつた森の方へ逃げ込んだわけだけど、ミソギさんも見当たらな
いし、何より女の子である神楽坂さんをこんな夜の森の中引きずり
まわすわけにも行かない。そろそろ覚悟を決めたほうがいいかもし
れない。

この前吸血鬼さんに襲われた時はなにがなんだかわからなくてほと
んど抵抗出来なかつたけれど、準備する時間さえあればそれなりに
戦えるはず。

魔法学校時代、ミソギさんは学校の授業に関してはほとんど関わつ
て来なかつた反面、僕の自主練には結構付き合つてくれた。あまり
実戦形式でやることはなかつたけれど、魔力効率や新魔法の習得に
ついては学校の先生よりミソギさんが詳しかつたし色々教えて
もらつた。

まあ僕だけじゃなくてアーニャとか他のクラスメイトとかも色々お
世話になつてたみたいだけど・・・それでも僕がミソギさんの一番
弟子といつても過言じやないはず。その僕が生徒一人守れないよう
じやダメだ。しつかりしないと。

まずは神楽坂さんを安全なところまで逃がすのが最優先だ。

「とりあえず神楽坂さん。簡単に説明しますと、さつきの人は吸血
鬼さんで、多分僕を狙つてるんだと思います。なので神楽坂さんは
まつすぐ自分の寮まで帰つてください。道中の安全は僕がなんとし

てでも確保しますので。それで出来れば今日のことは他の皆さんには内緒で、もし詳しい話が聞きたければ明日僕のところに来てください。別にいいならこの事は忘れてくれると助かります

「ちょ、ちょっとちょっと！ そんないつぺんに言われてもわかんないわよ！ · · · です」

「まっすぐ寮に帰る、そして今夜のことはすべて忘れる。神楽坂さんにお願いしたいのはこの2つです」

「ま、まあそれくらい単純ならわかるけど···でも！ 先生はそれでどうするの？」

「僕が相手をすれば吸血鬼さんも神楽坂さんをどうこうすることはないと思います。なので僕はあの人相手をします」

「いやいやいや！ 危ないでしょ！ あんただつてまだ子供なんだから一人で吸血鬼さんとやらの相手なんて無茶に決まってるでしょ！ ？ 助けを呼ぶとかしてもっと大人に頼ればいいのよ！」

「残念ながら今はミソギさんがいないのでどうしようもありません」

「いやいや···ミソギ先生以外にもいるでしょ！ 高畠先生とか···」

「タカミチですか？ 確かにタカミチがいれば心強いですけど、そう都合良くなは···」

「そうでもないわ。私高畠先生に呼び出されてこいつちまで来たのよ。この近くの公園にいるらしいから、すぐ見つけられるはずだわ。ていうか叫んだら来てくれるんじゃない？」

「そうなんですか？ ジャあすぐにでも「魔法の射手！」 うわっ！」

見つかった！ 神楽坂さんとの相談に時間を使いすぎちゃったみたいだ。神楽坂さんを逃がして余った時間で結界魔法を設置しようと思つてたけどそんな暇はなくなってしまった。

魔法の射手を避けた僕たちの前に、上空から吸血鬼さんが降りてきた。

「女生徒とおしゃべりとは・・・ずいぶん余裕じゃないか」「神楽坂さん！すいませんがタカミチが本当にいるなら連れてきてください！僕が吸血鬼さんの相手をしますのでー」

「わ、わかつたわ！気をつけて！」

「何、タカミチだと…ちっ、ミンギは本当に使えんなー。」

ミンギさん？なんでそこまでミンギさんの名前が・・・って、考える場合じゃない。

背中を向けて走りだした神楽坂さんと、それに向けて攻撃しようと している吸血鬼さんの間にに入る。

「・・・まあいい。戯れはやめて2分で全て終わらせてやる」

生徒頼りなのは情けないけれど、わざよろはは希望が持てる。がんばろう、こんな所でやられたらミンギさんに顔向けできなくなっちゃう。

「ふう、向こういつもやるやろ決着ついたんじゃないかな。どひ思ひ？
茶々丸ちゃん」

「・・・そうですね。何事もなかつたのであれば終わつている頃で
しょう」

「てゆーか放つとくと死ぬまでネギ君の血吸つてそうだからちょっと
と様子見に行つてみない？」うちに顔ださないから不安になつてき
たよ」

「マスターは約束を違えるような方ではありません。たとえ貴方の
よつな卑劣な方との約束であつたとしても」

「おいおい、卑劣つてどういうことさ。今回の戦いだつて別に何も
卑怯なことはしてないぜ？ただ茶々丸ちゃんがノーコンだつただけ
じやないか」

「・・・2丁機関銃+小型追尾ミサイルをたつた50㍍程度の距離
で避けきるといふのはそれだけで卑怯の領域にあると思います。ま
だ当たつても効かないのほうが現実感がありますね」

「あ、そっちの方が良かつた？」

「当たつて死んでぐださるのが最も良いんですが」

「こりやまた手厳しい」

そんなこんなで戦闘開始からどれほど経つたか、茶々丸ちゃんに近
寄ることも遠ざかることもせず、ただひたすら攻撃を避け続けてた
ら、いつの間にか向こうが戦う気をなくしていたので和やかに談笑

をする」とにした。

監視なら全部なかつたことにしたから何の問題もない。じゃあ最初からそうしろよってツツココはなしで。だつてちよつとじぐりい女と遊んでみたいじゃん。

ちなみに、茶々丸ちゃんが持つていた危なつかしいロケットランチャ一は

『いつかの時のために取つておきましょ』

とか何とか言って仕舞つていた。……どこに？あのまつやりとてかわいらしい体型のどこにあんな禍々しいものが入つてるの？

「……何やらこやらしに視線を感じるのですが」

「え？ いやまさかまさか、気のせいでしょう？」

「……まあいいでしょ。とにかく、こりに向かつて走つてくる人物がいらっしゃるのですが」

「んあ？ 誰だろ？」

まあ予想はつくけど。

そのまま數十秒ほど待つていると、息を切らせて一人の女生徒が俺たちのいる広場へとやつてきた。彼女は周囲をきょろきょろと見渡して

「はあ……はあ……高畠先生は？」

とつぶやき、その後俺達の方を向く

「あれ？ ツギ先生に、そつここのは茶々丸さん？ どうしてこんなところに？」

と不思議そうに首をかしげた。その女の子は予想通り神楽坂明日菜さんだった。

「いや、僕からするとこんな所に君がいる方が不思議なんだけど、どうかしたのかい？」

「えっと、実は高畠先生に呼ばれて……じゃない……あっちーあっちでネギ先生が変な女人に襲われてるんです」

来た方を慌てて指さす神楽坂さん。その方向はやつぱりネギ君とHグアちゃんがいる箇の方だ。

一瞬チラリと茶々丸ちゃんの方を見ると溜息をひとつつき、

「ネギ先生ですか？それは大変ですね」

と、神楽坂さんの話に付き合つてくれた。別に彼女的には何がバレてもいいんだろ？けど一応俺の事を慮つてくれたのかもしれない。

「本当かい？それは大変だ、急いでネギ君の所に行かないと」

「いっつちです、ついてきてください！」

とりあえず僕も茶々丸ちゃんに合わせておくと、それを聞いた神楽坂さんが先導しようと走りだした。

案内されなくとも場所はわかるんだけど、まあいいか。おとなしくそれについていきながら、同じくついてきている茶々丸ちゃんにこつそり話しかける。

「なんかよくわからないことになつてきたね」

「人払いは任せろー、とおつしゃつてませんでしたか？」

「いや、一応したはずなんだけどわ……まあいいや

「よくありません」

「とりあえず、現地についたら茶々丸ちゃんは神楽坂さんについてあげて。Hグアちゃんのことは僕に任せてくれていいからさ」

「・・・非常に不安なのですが」

「頼むよ。ただ名誉返上、汚名挽回のチャンスが欲しいだけだから
や」

「仮にも教師ともありつの方がそのような言葉を使つとは非常に嘆
かわしいですね」

「・・・あれ?なんかまちがつてたっけ?」

何も間違つてないよ、うん。

「まあいいでしよう、とつあえず貴方に任せることにします」

「ありがとう、恩に着るよ。今度可愛い服でもプレゼントするね
「期待しないで待つことにしましょう」

とまあ茶々丸ちゃんの了承もとれた所で現地目前のところにまで到
着。ここまで来れば一般人の聴覚でも戦闘音が聞こえてくる。

「案内してくれてありがとう。ふたりとも安全な所に避難してくれ
てていいよ」

と一言告げて、ニヤニヤと微妙にうれしそうなエヴァちゃん、非
常に苦しそうだがそれでも立ち上がりにまだに戦闘を続けられてい
るネギ君との間に立ちふさがった。

先に謝つておいた。「めんねエヴァちゃん。

今週号のネギまーを見て、やっぱりネギ君はヒロインにしても何の問題もないなあ、と、思いました、まる。

ところどころはあまり小説とは関係有りませんが、先日、『変態王子と笑わない猫。』というラノベを読みました。それに出てくる副部長が自分が書きたい茶々丸の完成形みたいなキャラでとても素晴らしいかったです。ぜひ次巻以降は副部長をもつとブッシュして欲しいですね。

・・・でもラノベって毎巻キャラを増やすなきゃダメみたいな傾向があるからメインヒロイン以外の出番がどんどん少なくなっていくんだよな・・・。新キャラよりももつと既存のキャラを掘り下げてほしいです。

たしかに私は坊やとの戦いを楽しんでいた。

最初はさすがに面倒になる前にケリをつけようといつかり殺しそうになつたが、それでも立ち上がる坊やを見て興が乗つてきましたのだろう。時間を忘れて戦つてしまつたのは事実だ。

神楽坂明日菜の件もあるし時間をかけすぎれば邪魔が入るかもしれないことはわかつていた。

だが、だがしかし。

「なぜ貴様が私の前に立つ……」

お前が私の邪魔をすることだけは納得がいかんぞ、ミソギ。

「ミソギ……さん……」

ミソギはまづいとした表情の坊やに微笑みかけ

「遅くなつて」めんね、もう大丈夫だよ」

そう言つて頭を撫でる。

その動作にも腹が立つた。こいつ、私を無視して何をしている。なぜここに来てこんな所に現れる。

その思いを込めて睨みつけていると、今度はこちらを向いた。

「匿名希望さんからここでネギ君が襲われてるってタレコミが入つてね。来るつもりはなかつたんだけど……つい」

「・・・神楽坂明日菜か」

「いや、匿名つて言ったんだから実名出さないでよ……」

「ふん、で？なぜ貴様がここにいる？」

「え？」

「え？ではない！貴様は記憶消去の魔法が得意なんだりつー？頼まれたからといって素直に従う必要はないはずだ！」

「え？・・・あ、あー、はいはい」

なぜここで忘れてたみたいな表情をする・・・。
まあいい、さて、どんな理由をつけてくるんだ？

「いや、やつぱり自分の生徒にそんな魔法使いたくないしさ・・・。
「奴には魔法を見られたんだ。どちらにしろ使わなければならぬ
だろう」

「それに・・・

「それに？」

ミソギはそこでふと視線を逸らし坊やの方を見た。朦朧とした表情をして、ひやりの話を聞いているのかすらわからんが、それでも一本足で立つている。

「言われるままにきてみただけで、やつぱりネギ君のこんな状態を見ちゃつたら・・・どうしても我慢できなくて」

「・・・どういう意味だ？」

「最初は本当に思つてたんだ。死にさえしなければエヴァちゃんを解放するためにこの子を使おうって。でもこれを実際見ちゃつたらもう無理だ。僕はこんなにボロボロになつても、絶対勝てないってわかってるような相手でも、諦めずに戦えるネギ君を見捨てられるほどマイナスな人間じゃないよ。本当にごめんエヴァちゃん。僕は君の仲間だとか言っておきながら、それ以上にネギ君の味方だつたみたいだ」

そう言い切ったミソギからなにか一言を吐き出された坊やは、安心したかのように膝から崩れた。多分あとは任せせて休んでるとでも言つたんだろう。

まあそんな事はどうでもいい。それより大事な事は

「つまり貴様は、私の敵というわけだ」

「え？ いやちよ・・・」

「別にいいや、こんなことは慣れているー。こ、茶々丸、用意してたアレを使え！」

田の前の敵をひとつと排除して、こんなクソみたいな学園からひとつおわらばすることだ。

ミソギに裏切られた以上、いよいよ遊んでいる暇はなくなつた。どこかに潜んでいるであろう茶々丸に声をかける。保険として用意しておいた対魔用の装備を実際に使う時が来るなんてな。

「ちよ、ちよと待つてエヴァちゃんー別に僕は君の敵になつたつもりは・・・」

「問答無用ー」とつとやれ、茶々丸ー」

「ああもう・・・」めん茶々丸ちゃんー『動くな！』「

ちよ。お得意のその魔法か。だが茶々丸がどこにいるかはわからないはず。さすがに姿の見えない相手にまでかけられるほど万能じゃないだろ？。

「とか考てるのかもしけないけど、『めん。僕、茶々丸ちゃんの居場所知つてるから』

「はー？」

そう言つとミソギは茂みの方へと歩いて行き、何やら話し声が聞こ

えた後、茶々丸と神楽坂明日菜を抱えて戻ってきた。

「はあ・・・茶々丸ちゃんには神楽坂さんを安全な所に避難させておいてつて頼んだはずなんだけどな」

「・・・貴方の命令を聞く義務はありません」

「いや、そうだけどさ。でも今回はそれが仇となつたね。もし神楽坂さんを連れて帰つた後戻つてきたんだつたら場所がわからなかつたから危なかつたかもしれないのに、全然移動しないからふつうにわかつちやつたし」

「・・・」

そのままミソギはよつこいしょ、とかいいながら茶々丸を地面に立たせてやり、意識を失つている神楽坂明日菜はそつと横たわらせた。私の体はまだ動かせない。茶々丸もダメ。ミソギは無傷。詰みだな。

「・・・」の私をここまでコケにするとはな。もうここを、好きにしき。だが私がやられても第一第二の私が・・・」

「いやいやいや、何言つてんのさ。だから僕はエヴァちゃんに戦つつもりはないつて」

「ふん、どう言い繕つても同じだ。貴様のせいで私はこの学園から逃れられないんだ。15年も耐えて、ようやくきたチャンスだと思つていたのに・・・貴様は、それすらも貴様は・・・」

「ま、待つてつてば！だから僕は別にエヴァちゃんの呪いを解くことには協力したいんだつて！たしかに、こうなつちやつた以上ネギ君を差し出してお終いにするのは僕としてはちょっとできないけど、それでも僕にも協力できることがある」

「協力だと？はつ、そしてまたうまくいきそつな所で全てを台無しにして私をあざ笑うつもりか。趣味が悪いなミソギ、まさに悪魔だよお前は」

体が動かせないせいでミソギから顔をそむけることはできないが、できるだけ視界に収めないように努めた。そうしないと、悲しみが溢れきそうだったから。

長い付き合いだったわけじゃないし、信頼に足る人物なわけでもない。だからこの悲しみは多分、同族のやつに裏切られたからだ。人外として扱われ、私と同じような苦労してきたであろうミソギに、裏切られたからだ。

そういうえば私も初めて会った時、こいつには同じようなことをした。だつたらこいつも、今の私と同じような気分を味わったんだろうか。普段は飄々とした男だが、その心の中では傷を抱えながらも苦悩していたのだろうか。

そんな事を考えた時、視界の端で捉えていたミソギに動きがあった。地べたに膝をつき、手をつき、頭を下げ、まあ簡単にいえば土下座の状態になっていた。

「お、おー。なにやつて・・・」
「「めんなさい」

そして額を地につけたままミソギは言った。

「でも、ネギ君にはこれから的人生を有意義に生きて欲しいんだ。正義の魔法使いになるために頑張って欲しい。父親の功績で捕らえたはずの闇の福音を、自分のミスで逃したなんてことになつたら、ネギ君はすごく気にすると思う。それに、周りのネギ君への評価も一変してしまうかもしれない。こんなことは言いたくないけれど、立派な魔法使いを目指す身分で周りからの評価が良くないっていうのはす「くマイナスなことだと思う。だからネギ君を襲つて呪いを解くのは勘弁して下さい」

「ふ、ふざけるなーそんな事は知らんーそうなつたとしたつて自由に生きることができるだけマシだらうー私は、十五年も、こんな場

所で・・・

「でも！エヴァちゃんの呪いは僕が必ず解く。自分で呪ひのもなんだけど、僕は魔法が得意だ。サウザンドマスターに比肩できるくらいの能力はあると思う。僕が絶対にエヴァちゃんの呪いを解くから、だからもう少しだけ待って欲しい」

そう言つて顔を上げたミソギは、今まで見たことがないほど真剣な顔をしていた。

確かにこいつの魔法はすごい。どうやってやったのかわからないが言霊による相手の体の制御、現役魔法先生にも通用するほどの記憶消去魔法、私の一撃を受けてもその数瞬後にはほぼ無傷となつて回復力。見たことはないが攻撃魔法も素人ということはないだろう。魔法の才能は確かにある。だが・・・

「そんなもの、何の確証もない！あのジジイですら解けなかつた呪いを、いくら貴様とはいえたやすく解けるとは思えん」「解ける。簡単には無理かもしれないけど、解く自信はある

「その自信の根拠はなんだ？ただ自分を過信してただけなのだったら張り倒すぞ」

「・・・わかつてゐる。ここまで来たらもう躊躇はない。ネギ君も寝てることだし、僕の秘密を教えるよ」「秘密・・・？」

そこでふと体が軽くなつたのを感じた。どうやら奴が制御魔法を解いたらしい。

茶々丸がすぐに寄ってきて武器を構えようとしていたが、目で制する奴の秘密とやらに興味が出た。攻撃するのはそれからでも遅くあるまい。どちらにしろ奴が此方と敵対する気なら解放はしなかつただろうしな。

私と茶々丸は黙つてミンギの言葉を待つた。立ち上がつたミソギは

何やらポケットに手を入れまじりつつ言葉を続けた。

「なんで僕がエヴァちゃんのことを知っていたんだと思つ?」

「どうからか嗅ぎつけてきたんだろ?、ハイエナのよつ」

「いやいやいや・・・僕がどうやってエヴァちゃんのことを知つたのか、そして協力しようと思つたのかは、何もエヴァちゃんが可愛かったからってだけじゃないんだ。勿論それもあるけど・・・お、あつたあつた」

そして奴がポケットから取り出したそれは

「僕が君のことを知つたのは、サウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドに会い、君のことを聞いたからだ」

見間違えるはずもない、あのバカの、ナギの持つていた杖だった。

22話（後書き）

本当は今回でエヴァ編は終わらせるつもりだったんですが、かなり長くなつてしまいそうだったんで次回に回します。

ポケットに杖入らないだろつて文句は、ミンギのポケットと彼の私的収納スペースを直通できる『とりよせバッグ』的な機能を持つた魔法を使つたつてことで一つお願いします。

「な、なぜ貴様がそれを持っている・・・」

自然と声が震えてしまう。あまりに突然のことに呆然とする私を尻目にミソギは話を続けた。

「僕が彼と出会ったのは今から何年前だつたか・・・その頃、僕は彼の敵対していた組織で飼われていた悪魔だつたんだ。僕が遣わされた時、ナギは一人で旅をしてたみたいでね。僕も何匹か部下を連れていつたんだけど、そいつらは一瞬でぶつ倒されたんだ。でも僕は元からそれなりに力があつたからね、ある程度互角に戦えてんだ」

話しながら、ミソギはだんだん遠い目となつていく。まるで懐かしい過去を思い出すとしているかのように。

「今にして思えば、あの時僕は初めて樂しいって思つたんだろうね。飼われてから僕がやつた仕事なんてゴミみたいなものしかなかつたし、実力が拮抗している相手と戦うのはすごく楽しかつたな。まあそれはともかく、しばらく戦いが続いた後、彼が言ったんだ

『ちょっと休憩にしないか?』

つてね。僕は驚いたわ。おいおい冗談だろ? こつからが本番じゃないか。どうせこのまま帰つても次の仕事はまたゴミ処理だ。だつたらこのまま戦つて殺されたほうがマシだ。そう反論したら、彼、なんて言ったと思う?

『俺がお前の呪いを解いてやるから、その後もう一回やるぜ』

だつて。僕はもうなんだか拍子抜けしちゃつて、じゃあやつてみたら? みたいな感じで好きにさせてたら本当に呪いを解いてしまつてさ。僕は晴れて自由の身になれたわけだよ。いやほんと、さすがサウザンドマスターだよね』

確かに、ヤツならそれぐらいできるかもしれん・・・。

話を聞きながらあの無茶苦茶な男のことを思い出して苦笑した。

「それから半月ぐらいかな、今までお世話になつた人たちにお礼参りに行くついでに、ナギと一緒に行動してたんだ。その時の話をすると単行本にして24巻ぐらいかかる超大作になっちゃうから割愛するとして、まあその後だよ。ナギは僕に、このあとはお前とは関係のない相手だからもう手伝わなくていい、好きに自由に生きてけよ、みたいなことを言ってくれたんだ。まあ僕としてはお礼参りしてただけだから手伝つてたつもりはなかつたんだけど、そう言うならつてことでそこで別れることになつたんだ・・・もし、そこで別れなかつたら、未来は変わつたのかもしれないね」

そこまで言つた後、ミソゾギの表情が不意に曇つた。

「おかしいと思つたんだよ。あいつが、もしものときは生まれてくる息子を頼む、なんて言つなんて。おまけに、息子が一人前になつたら渡してくれ、なんて言つてこの杖までよこすじた

そう言つて杖を掲げるミソゾギ。

「自分で渡せ、って言つて流石に断つと思つたんだけどさ、あの表情が真剣だったから、思わず受け取つちゃつたんだよね。・・・

・今にして思えば、あいつは多分これから死ぬつもりだつたんだ。あの時そつと氣づければ、絶対に一人になんかしなかつたのに。・

・

「ミソギ、お前・・・」

「間抜けにも僕がそれに氣づけたのは、それからしばらくたつて、ナギが死んだと噂になつた時だ。僕は忘れてたんだ、ナギはデタラメだけど、それでも、なにかあつたら死んでしまう、ただの人間だつてことを。あいつは僕の恩人なのに、何もできずに死なせてしまつた。いや、それどころか僕が何も考えずに杖を受け取つてしまつたから、その分戦力が落ちたせいで死んでしまつたのかもしない」

「それは・・・さすがに考え過ぎだらう

「そうかもしだれない。けどそつじやないかもしだれない。その疑念を僕は晴らすことができない・・・」

「仮にそうだとしても、それはあいつが勝手に頼んだことで、貴様のせいではないだらう!」

思わず声を張り上げてしまつ。普段の飄々とした表情からは想像でできない、そんなミソギの沈痛な表情など見たくなかった。

「そつ、僕は頼まれたんだ。ナギから、恩人から息子を頼むつて。だつたら僕はそれをしないといけない。だから僕はこうしてネギ君を傍でずっと見守つていなくちゃいけない。・・・ああ、こう言つとなんか義務感でやつてるとか思われちゃうからちゃんと言つておくよ。別に義務感からじやなくて、僕がネギ君を好きだからやつてるんだよ。嫌いだつたらとつと杖を渡しておさらばしてるわ」

それは、本当だらうか。こいつはいい加減に見えて意外と義理堅い、いや、不器用な所がある。きっと、ネギのことを気に入つていなくても側で仕えていただらう。そう思えるからこそ胸が傷んだ。

それではもはや、呪いのようなものではないか、と。

「ナギの後を継ぎたい、なんて大それた事を考えたこともあつたんだけどね。残念ながら、僕はなんでナギが僕の元飼い主と戦つていたのかも、一体何と戦いに行つて死んだのかも知らなかつたから、彼の後を継ぐことはできなかつた。けど、彼のやり残したことを何かできないかと考えたんだ。そのために、僕はナギと会話したことを持つ一つ思い出していくた。そして・・・」

そこで一回言葉を切つたミソギは、改めて私の方を向いた。

「Hグアちゃんのことを思い出したんだ。ナギが

『麻帆良に置いてきてそのままな子がいる。迎えにいけなくて申し訳ない』

みたいなことを言つてたのを思い出して、けど日本の麻帆良なんてなかなか行く機械がないから悩んでいた所に、ネギ君の修行の話がきたんだ。だからすごく驚いたし嬉しかつた。絶対にこの機会にその子を迎えて行こうと思つたんだ。けど、調べれば調べるほどそれが難しく思えてきた。サウザンドマスターが無理やりかけた呪いなんて、僕に解けるだらうかって。だからこそ、ネギ君を使ってでも、多少無理矢理な手でもいいから確実な方法で解こう。そう思つちゃつたんだ」

やはりHグアは、死んだナギに報いることしか考えていない。

先程こいつは言つていた。ナギと戦つた時初めて楽しいと感じた、と。つまり、その組織とやらに飼われる前もろくな人生を送つていなかつたということだらう。

わたしですら、忘れ去つたはずの遠い昔のことだが、吸血鬼になる

前の、楽しかったであろう日々はある。だが、こいつにはそれすらない。だから、知らないんだ。誰かに命令されないと、何かに呪われていないと、どうやって生きていけばいいのかわからないんだ。だからこそ、ミソギはナギの頼みのために生きていく。そうしないと生きていけないから。

それは本当に生きているといえるのか？もしかしたら飼われていた時と同じなんじゃないか？それでは、あまりにも、報われない。ミソギも、ナギも。

私は、解放してやりたい。あまりにも不器用なこいつを、ナギの意図せぬ呪いから、解放してやりたい。そう思つてしまつた。

「あれ？今の説明だと、エヴァちゃんの呪いを解く自信があることの説明にはならないな・・・ええと、ナギとも互角ぐらいに戦えたから、きっと解けるって言いたかったんだけど、ははは、さつき途中で自信がないってばらしちやつたな。ごめん、本当は絶対の自信があるってわけじゃないんだ。けど、絶対に解くから、だから・・え？」

「もういい」

未だ説明を続けるミソギを見てられなくて、思わず抱きしめてしまつた。ふふ、身長が合わないから傍から見ると変に見えるだろうな。

「・・・えっと、エヴァちゃん？何これ、『褒美・・・？』

「つむれこ。黙つていら」

「はい・・・」

そのまま数秒ほど抱きしめていたが、ふと我に返り恥ずかしくなつた。

・・・ナーラヤツテイルンダワタシハ。

「ちよ、うわっ！」

思わず突き飛ばしてしまった。

「呪いは必ず解いてもらひぞ！その坊やに頼らず自分で解くといつたこと、せいぜい後悔するといい！楽しみに待つているからな、フハハハ！・・・おい、茶々丸！行くぞ！」

「・・・はい、マスター」

奴の顔をまともに見れる気がしなくて早口で結論だけ告げとつと去ることにする。

茶々丸を連れて帰りながら、私はこれからについて考えてみた。あいつを解放するには、とりあえずナギの頼みをとつと済ませてしまふのがいいだろ？ あの手の輩は無理に止めさせよ？ すると反発するからな。

まずは私の呪いを解く事だ。これは絶対やつてもらわんと困るな。次は、ええと、あの坊やをミンギの目から見て一人前にして、杖を渡すことか？ これについては、まあナギの息子だけあつて素質はあるみたいだからな。私が鍛えてやればちょちょいのちよいだろ？ 本来であれば頼まれても人にモノを教えたりなぞせんが、まあ今回だけは大サービスだ。よかつたな、坊や。

それが終わつたら、あいつには坊やと離れて少し世界でも回つてもらうとするか。旅をすれば世界観も変わる。きっと奴も良い方向に変わつてくれるだろ？

ああ、その頃には私の呪いも解け、晴れて自由の身となつているんだつた。だつたら共に旅をするのも悪くないかもしねないな。まあなんにせよ、だ。

「・・・面白くなつてきたじゃないか

「なにか言いましたか、マスター？」

23話（後書き）

今回で吸血鬼編は一応終わりになります。綺麗にまとめられてよかったです。

・・・と言いたいところですが、このままだと『あれ？今回シリアス？』と勘違いなさる方がいらっしゃるかもしないので、蛇足かもしれませんがミソギ視点をもう一話入れようと思います。それについてまさか茶番に丸々一話使ってしまうとは思わなかつた・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4568t/>

魔法先生と王嘘憑き

2011年11月20日03時29分発行